
狂獄 The CrazyInferno

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂獄 The Crazy Inferno

【Nコード】

N2492Z

【作者名】

P 琢磨

【あらすじ】

《檻飼い》の青年は思い出す……二年前に起こった《地獄》の工程と末路を。現実を脅かし、正気を貪り食う狂気の群像劇はやがて最悪の結末を呼び覚ます。“狂気”を題材にした中篇ストーリーです。

序章／底いの先（始）（前書き）

4年前の作品を掘り起こしてみました。若干の手直しはしてありますがほぼ当時の原文そのままです。

タグにも入れましたが、バッドエンドの物語です。ただただ膨大な悪意に吞まれる心苦しい想いをされるかも知れません。

テーマは“狂気”。その事に対し僅かでも造詣が深まれば光栄です。

序章／底いの先（始）

『挟峰市大災害から二年』

そんな見出しが躍った新聞を広げていた人物は、ミルクティーの入ったカップを静かに手に取るうと手を動かした。細い華奢な指が滑らかに宙を滑る。

中性的な風貌は女性にも男性にも見え、一見ただけでは即座に見極められない容姿だった。暗色系の外套を纏った格好なので体型もほとんど分からない。歳は20代半ばという頃だろうか。達観、或いは老成したような顔つきをしていた。

その人物がカップを形の整った口許へ運んだ時、不意に声が掛けられた。

「あれ、おりまさ檻雅か？」

声に反応して中性的な人物 檻雅は新聞から顔を上げた。

そこには檻雅と然して歳が変わらないような、こちらは一見して男だと分かる風貌をした人物が立っていた。眼鏡を掛け、落着いた色合いの服装を纏った、いかにもインドア風の男である。

檻雅は彼を見てニコリと微笑む。

「やあ、……誰だったかな？」

「おいおい、そりや無いだろう？ 同業者の名前を忘れるってオマエ……」

「ははは。かこもり籠守くん、だろう？ かこいぐち囲井口籠守。私の同業者、つ

まり、《おりか檻飼い》。……これでいいかな？」

「……まったく、オマエ暫く逢わない内に、性格捻じ曲がっちまったんじゃないか？」

少し強めの陽光が射し込むオープンテラス。平日の昼間と言う時間帯が要因にもなっているが、辺りには数人の客がいるだけで檻雅と男 籠守に注意を払う者は一人もいなかった。朝の静かな時間帯なら鳥の囀りさえも聞こえてきそうだ。近くの街路樹には青々と

した葉が生い茂り、気の早い虫達が喚声を上げているのが聞こえてくる。

籠守は檻雅の真向かいに腰掛けると、丁度通りかかったウエイトレスに「アイスコーヒ一つ」と注文した。それから檻雅の持つ新聞に眼が向かい、……若干気まずそうに嘆息を零した。

「……もう、あれから2年も経つのか……」

その呟きには幾分かの感慨が込められ、どこか憔悴を感じさせる声音で吐き出された。

檻雅は自身の持つ新聞に再び眼を落とし、顎に指を添えて僅かな間を置くと、

「時が経つのは早いな、……位の感想しか湧かないな」

「……本気か？ ……だとしたら、やっぱりオマエは変わったよ。昔に比べて、随分とな」

籠守が肩を竦める仕草を見て、檻雅は苦笑を滲ませ、そうかも知れない、と小さく返した。籠守もそれ以上は言葉を繋げるつもりは無いようだった。

静寂が訪れたかと思うと、その間隙を縫うようにウエイトレスが湯気の出ないカップを運んで来た。若干汚れが目立つが元は白かったのだろうテーブルに、音を立てないように注意してカップを置いた。ごゆつくり、と小さく口の中で転がすように呟くと、ウエイトレスは頭を下げて立ち去った。

穏やかな時間が過ぎ去るかと思われた矢先、ふと何かを想起したように檻雅が口を開いた。

「時に籠守くん。結論が出ない話の意見を聞かせて貰ってもいいかな？」

籠守は男にしては細い手をカップに伸ばすのを止め、檻雅に視線を向け直す。僅かに眉根が寄った険しい形相になる。

「……何だよ藪から棒に。豪く哲学ぶった言い方をするな？ ……ま、いいぜ。取り敢えず聞かせてくれよ、その結論が出ない話って奴をよ」

籠守が運ばれてきたアイスコーヒーを傾けて返すと、檻雅は視線を彼に合わせたまま続けた。

「狂気とは何か、……という話なんだけどね、」

「……腰を折って悪いけどよ、そりゃ《狂徒》^{きやうと}や《司狂》^{しきやう}　つまり俺達の敵の話、……って事か？」

表情を更に険しくする籠守。苦々しく言を吐くが、

「いや　違う。純粹に、狂気に関する話だ。奴らとは別だよ」

檻雅がニコリと微笑んで返すのを見て、そうか、ならいい、と籠守は幾分ささくれ立った表情を戻して、再びアイスコーヒーを口に運ぶ。

「……でもまあ、完全に関係無いとは言えないな。彼らとは概してそういうモノだろう？」

「……悪かったよ、俺に構わず先を続けてくれ。もう腰は折らない」
籠守が不機嫌そうに睨むのを見て、檻雅は意地悪そうに微笑を浮かべると小さく咳払いをして、真顔に戻る。

「狂気とは何か、と私は考えていたんだ。……私達、つまり《檻飼》^{きようお}は、現在も狂気が根源とされるモノ　《狂皇》^{きやうおう}を追っている人にしてみれば彼らは災厄としか表しようが無い、人の天敵であり、人を滅ぼすモノだ。……だけど私はふと思ったんだよ。本当に狂気とは、悪いモノなのだろうか、　と」

そこで序論は終わりなのだろう、ミルクティーで舌を潤す檻雅を見て、籠守は不機嫌と言うより不可解そうな表情を刷き、口を挟む。
「……その話を続ける前に、最後に一つ聞かせてくれ、檻雅。《狂徒》を罪悪以外として話すつもりなら、俺は聞けない。それは俺達が生きる意味を殺す」

「……繰り返し言うが、私は《狂徒》の話をしたいんじゃないんだ。狂気の事だよ、籠守くん。何も《狂徒》を味方に引き入れたいとか、《狂徒》を殺してはいけないとか、そんな話をするつもりは私にだって毛頭無い」

「だったら……？」

「これも何度も言わせないでくれよ、籠守くん。私はね、狂気の話をしたいんだ。《狂徒》は関係無い」

テーブルのあまり汚れていない部分にカップを置き、檻雅はやつと話せるのかな、と深く息を吐き、難しい形相のまま凝然としている青年を見やった。

籠守はまだ解せきれていないようで、不可解そうに檻雅を見つめるに留まっていた。これ以上問答を繰り返す気は無いらしく、質問を飛ばす事もまた、無い。

檻雅は若干表情を和らげてその様子を見やると、幾分か表情を引き締め、言を紡ぎ始めた。

「そう、狂気だ。名の通り、狂えた気持ち　異常な精神状態の事を差す。そのまま受け入れれば、それは確かに危うい。狂気の沙汰……とても常人とは思えないような事を口走り、或いは行動を起こす。それは理解されない、否、理解し得ない精神状態、且つ思考回路だ。だが、それを偏に殺人等の犯罪に引用するのは、どうかと私は思う」

一旦言葉を置き、籠守の様子を窺い見る。彼は黙ったまま檻雅を見つめると、茫洋とした表情で、イマイチ論点が掴めていないようで、それで、と先を促すに留まった。

檻雅は頷きを返し、言を継げる。

「そもそも狂気とは、異常な行動や言動、偏った思考や思想などによくよく見受けられるとは思わないか？　異常と称する以外に呼べない行為が即ち、狂気に直結していないだろうか？　悪い例で例えるなら　猟奇殺人がまさにそれだ。特殊な性癖を懐く犯人の欲望が、惜しみも無く全面に表出したと言っても過言ではない。そここそが常人には理解し得ない行動であり思想。即ち狂気　猟奇的とも言える。……だが、それは本当に狂ったと呼べる行動で、思想なのだろうか、私は思った訳だ」

再び言を切り、籠守に発言を促す間を開ける。

籠守は難しそうな顔をして顎に指を添え、顔どおりの唸り声を漏

らした。

「……どうしてオマエがそこに疑問を持つのが、俺には分からんと口火を切ると籠守は顔を持ち上げて、どこか掴みどころの無い青年の顔を見やる。」

「仮に犯人が幼少時に虐待を受け、トラウマとして特殊な性癖を宿してしまい、そのために犯罪を起こしたのだとしたら、それは親に狂わされて起こした犯罪という事になるだろう？　だったら犯人を突き動かしたのは即ち狂気にならないか？　その異常な性癖を懷いた時点で犯人は狂ってしまったと断言できるんじゃないのか？」

切り返す籠守の顔を見て、檻雅は満足そうに微笑を浮かべる。

「貴重な意見をありがとう。参考になるよ。じゃあ最後に一つ、仮定の話の意見を聞かせてほしい」

「……何だ、今の話はこれで終わりなのか？　そんなんでいいのか？」

「ああ。……^{もっと}尤も、メインは次の話なんだがね」

何だそりゃ、と籠守が顔を怪訝に歪めるのを見て、檻雅は再び話仮定の話を紡ぐ。

「最後の話は仮定の話だ。実際には有り得ないからね。だからこそ私には結論が出せなかったんだ。……現在の世界……21世紀の地球、否、日本限定にしようかな。今の日本の人口の何割が、先程言ったような狂人だと、キミは考えている？」

「……いきなり規模がでかく出たな。……そうだな、1割にも満たないと思うぞ。……思いたいだけかも知れんが、1割もいたらもつと日本は荒んでると思うしな」

「では、ここからが仮定の話だ。キミは狂人の人口の割合が1割未満だと言ったね？　では、それが逆転したら、という話を私はしたいんだ」

「逆？　……と言うと、常人が、日本の人口の1割未満、って事か？」

怪訝に呟く籠守に、そう、と短く返す檻雅。淡白な返事に籠守は

更に表情を曇らせる。

「有り得ないだろ。そんな世界は成り立たない」

「だから仮定の話なんだ。私の話を少しはちゃんと聞いて欲しいな」

「……悪かったな。だが、そんな狂れた世界なんか根底に敷いて、オマエは一体何が聞きたいんだ？」

意図が掴めない籠守に檻雅は感情を削ぎ落とした顔を向け、彼を不覚にも緊張させる。

「その世界では、先程の猟奇犯罪は、どう映るだろう？」

ああ、なるほど。

籠守はようやく先程からの話の意図が掴め、同時に深い憤りを感じた。

睨みつけるように檻雅を見つめ、怒気を孕ませながら忌々しそうに言を吐く。

「つまり何か？ 《狂徒》は殺人を犯すのが常識の世界の住人だと、そう言いたいのか？」

「キミの結論は、そうだと言つのかな？」

「……あのな、幾ら俺が頭弱いつて言っても、オマエが俺に言わせようとしてる事が、《狂徒》の理解だって事ぐらいは解るんだぞ？ それはつまり俺達の生業の全否定だって分からないのか、オマエは？」

怒鳴っている訳でもないのに静かな怒りを孕んだ語気に、まるで空気が緊張しているような錯覚が生じる。籠守の瞳には灼熱のような強い光が感じられた。

それを真正面^{マトモ}に受けて尚、檻雅は平然とカップを口許に運び、舌を潤していた。周囲の人間もその気配に気づいた様子は無く、皆泰然と談笑に花を咲かせていた。

まるで、二人の存在がここに無いとでも言うかのように。

「……どうしてそう話を飛躍したがるかな、キミは。何もそんな事は言っていないのだから」

「いいや、オマエはそう言ってるんだ。気づいていないのなら、良

かったな、今やっとオマエは気づけた。その思想はな、俺の敵と同じ思想なんだよ、檻雅」

射殺さんばかりに敵意を剥き出しにした眼差しを向けられ、檻雅は小さく吐息を漏らして肩を竦める。理解されない事に対する徒労や諦念を表面に刷き始める。

そんな檻雅を見て、表情を和らげてどこか悲愴の面持ちを浮かべる籠守。

「……やっぱり引き摺ってんだな、二年前の事件を」

「……そう見えるかい？」

檻雅が疲れたように微苦笑を浮かべるのを見て、籠守は力強く確りと首肯を返した。

「じゃないと今のオマエの説明が付かん。……【境会^{きょうかい}】からも言ってきたんだろ？ 《檻飼い》を辞めろ、……って」

「……知ってる、か」

腫れ物に触るような籠守の眼差しから逃げるように、檻雅は眼を閉じると、眇めるようにしてテーブルの上のカップを見つめる。

「……私に《檻飼い》を辞める気は更々無い。……でもキミ達から見れば、とてもではないが続けられる状態には見えないんだろう？」

「……俺からも辞職を勧める。まさかこんな精神状態だとは思ってなかったからな。オマエは頑張り過ぎたんだよ。……母親の手掛かりを探す事が人生の全てじゃないだろ？ 《檻飼い》以外にも別の生き方がある筈だろう？」

「……ふふ、その言葉、自身にも向けられるかな、籠守くん？」

切り返され、籠守は思わず口ごもる。

その様子を見て、檻雅は穏やかな微笑を滲ませた。

「その気持ち、汲んでくれないかな？」

「……それで続けられるのか？ オマエは狂気を相手に戦えるのか？ 自身をも蝕む狂気と隣り合わせで生きていけるのか？」

本気で心配している籠守に檻雅は微苦笑を返すだけだった。

暫く見つめ合っていたが、……やがて籠守は視線を下ろし、はあ、

と重たい嘆息を零した。暖かい、寧ろ僅かではあるが暑さを感じさせる眩しげな陽光が降り注ぐ中、それに合うような柔らかな苦笑を浮かべて、先を続けた。

「……まあ、俺が言っただころで高が知れてるか。……俺がオマエの立場で同じ事を言われたら、オマエと同じように返すと思うし」「ふふ、……お互い、難儀な職に就いてしまったものだな、籠守くん」

「全くだ。……それも仕方無いだろ、お家柄って奴だ」

二人は小さく笑い合い、すぐに落ち着きを取り戻した。

「……っと、俺はもう行くな？　これから仕事なんだ。何でも、この近辺に《歪》^{ひずみ}が在るらしい。オマエも早くこの辺を離れた方がいい。巻き込みたくないし」

「……ああ、分かったよ。《檻飼い》として手伝いたい気持ちは山々だが、今の私ではキミの足手纏いにしかならないだろうしね。……否、寧ろ致命傷になるかな？」

「違うない」

再び小さな笑声が漏れた。籠守が紙幣を一枚テーブルに置き、立ち上がる。柔らかな陽射しを背に、静かに歩み去って行く。

「ここは俺の奢りでいいから、早く行け。……弱い奴から、喰われていくんだから」

「ああ、そうするよ。……済まない、気分を悪くするような話をして」

「いいって。……今度逢う時を楽しみにしてるぜ？　じゃあな」

そう言って立ち去る籠守の背中を見送り、檻雅はふとテーブルに置いたままになっていた新聞に眼を向け直した。檻雅は瞳を僅かに眇めると、細い指でその文字を、す、となぞった。

『挟峰市大災害から二年』

……ふと、あの頃の事を思い出そうとしてみる。

そう、あの《地獄》は確か

序章／底いの先（始）（後書き）

新連載と言う形ですが実質昔の作品を思い出したように公開し始めただけですので、気が向き次第毎日更新するかもです。宜しかったら最後までご覧頂きますように。

零章／集いし闇徒（前書き）

早速悪魔みたいな殺人が起きます。

ここが分水嶺みたいなモノです。どうか気を悪くされた方はここで引き返される事をご推奨致します。

この程度の悪意なんざ屁でもないという方、どうか最後までご覧頂けるよう祈っております。

零章 / 集いし闇徒

犯行に及ぶ際、必ず俺は対象を眠らせておく。

液状の睡眠薬をハンカチに滲ませ、就寝している対象の口許に当てて深い睡眠へと誘導する。その後特注の轡くつわを嵌め、首に鎖付きの枷かせを嵌めると 殴り起こす。

「……んぐ？ んむ、む？」

対象 男は轡のせいで声を出せず、ぐもった声を上げる。同時に首に嵌められた枷が邪魔で部屋から逃げる事も出来ない。

首枷の鎖は、部屋の中心に穿った杭に繋がっている。杭 細いが意外と頑丈な丸太の底辺に鉄片を喰い込ませ、その鉄片を畳敷きの床に直接釘で打ち込んだ代物だ。この杭が犯行中に外れた事は今まで一度としてない。決して完璧な杭とは言えないし、畳敷きだと相当の力を込めたらすぐに抜けそうなものだが、先程述べたように生憎と今まで一度として外れた事は無い。

「その轡は外れないようになってる。どれだけ足掻こうとな」

「むぐ？ んー、ぐ、う」

男は意識が徐々に覚醒しつつあるようで、必死に轡を外そうと自由な両手で足掻き始める。が、どう足掻いても轡は外れないし、首枷も全く取れない。

「オマエが生き残るためには俺を倒すしかない。俺はその轡と枷を外す鍵を持っている。オマエは俺から鍵を奪えば自由になる」

困惑している男は訳も分からず俺の声を聞き、徐々に青褪めていくのが判った。

俺は黒い革の手袋を嵌め、男に向かって歩き出す。

男は警戒するように俺から離れるように移動し始める。明らかに困惑しており、男は何やら説明を求めるように声を荒らげるが、全ては轡に因り俺の耳には決して届かない。

布団しかない、そう広くない六畳程の部屋に大人一人と青年一人

がいれば、あつと言う間に距離は無くなる。部屋には北側と西側に障子戸があるだけで変わった物は一切無く、小ざつぱりとしている。単に俺が物を移動し、戦い易くしたただけだが。南側と東側は壁で、且つ杭に繋がれた鎖は障子戸に届くまでの長さを持たない。生き残るためには、或いは逃げ延びるためには俺を倒す以外に道は無い。

俺の拳が唸りを上げ、男の顔を抉るように突き刺さる。

男は呻き声を発したが全て轡の中でくぐもる。痛みでふら付いたようだが倒れるには至らない。俺は更に拳を鳩尾みぞおちに叩き込む。

鋭く突き刺さった拳に呼応するように、男の体が「く」の字に折れ曲がる。そのまま膝を突き、辛そうに腹を摩る。呻いているのは痛み是因る嗚咽のようだった。

俺は構わず厚めの靴下を上から履いた安全靴で男の腹部を蹴り上げる。鈍い音と共に男が轡の奥で咳き込み始める。肺を潰したのか。轡の端から赤い液が滴る。

最早動ける状態じゃない男の髪を掴み上げ、顔を畳敷きの床に叩きつける。鼻が潰れたのか、床から引き剥がすと鼻血を出した汚らしい顔になっていた。更に叩きつけ、それから髪を離すと気を失ったのかそのまま動かなくなる。

これで終わっては話にならない。俺はポケットから枷を外すための鍵を取り出すと、男の手を掴み上げる。人差し指を握り締め、指と爪の間に鍵を刺し込む。激痛を感じたのか男の体がビクリと脈打つ。構わず刺し込み、奥まで突き刺すとそのまま難無く爪を引き剥がした。

「ッッ」

男がくぐもった絶叫を上げたのが判った。凄まじい力で俺を突き飛ばし、涙を流しながら手を押さえてもんどりを打ち始める。人差し指の先からは活火山のように血液が流れ出していた。

俺はゆっくりと立ち上がり、再び男の腹部に安全靴の爪先蹴りを突き込む。男は声にならない呻き声を上げ、腹を押さえたまま再び蹲る。蹲ろつが構わない、黙々と腹に蹴りを入れ続ける。

そして意識を失ったと思った時に、指の爪を剥がす。その繰り返し。

やがて男は意識があるにも拘らず何の抵抗もしなくなった。

頃合いだな。俺は最後の仕上げにと、持参の灯油を男にブツ掛け、部屋一面にも撒布し、ライターで男の足から火を点ける。

男は最早懇願もせず、ようやく激痛から解き放たれると、惨過ぎる絶望に恍惚とした表情を浮かべて自身を焼き尽くす炎を見つめていた。

俺は男の家を後にし、濃い夜の闇へと身を躍らせる。

夏が近いからか夜とは言ってもそう寒さは感じられない。寧ろ一仕事終えた今の状態では心地良い涼しさがある。夜気に沈んだ町に俄かに活気づく音を背後に感じながら、俺は空に浮かぶ禍々しい色を湛えた月を見上げて歩いていった。

俺は随分前から不定期に殺人を行っている。しかも足が着くのを警戒し、大分時期を空けて行うように心掛け、使用する枷などの小物は他県で購入している。特注の轡などは大きな鞣革などに改造を施して作ったモノのため、売ってはいないのだが。ともあれ今現在まで犯行が白日に曝された事は一度としてない。

今日は何十人目を殺害したかを考えながら帰途に着き、自宅住宅地の一角にあるどこにでもありそうな二階建ての一軒家の一室に戻る。

「手馴れてんなア、オマエ」

「
自室に入って荷物を放り投げ、シャワーを浴びてこようと背中を向けた瞬間、声が耳^{じだ}を打った。

この部屋には誰もいない筈だ。俺は何年も前から一人暮らしをしていたし、親戚が訪ねて来る事は今まで一度も無かった。同時に、人が発するであろう気配が、声を聞いた今でも全く感じられなかった。

どんな人でも少なからず僅かな音を発している。それは呼吸だったり衣擦れだったり、必ず些細な音を立てる。それが現状では一切感じられなかった。

「もうどれだけになるんだ？ 殺人者になって」

「……」

部屋には闇が落ちている。灯りを点けず、窓もカーテンも閉めきられているためだ。本来ならば荷物を部屋に放って灯りを点けるところなのだが、その動作を先回りするように謎の声が掛かったのだ。俺は確認している。部屋に入る前に中に誰もいない事を。幾ら闇に沈んでいたとしても、人を見逃すほど俺の眼は使い勝手が悪くない。殺人を犯すのは夜だけのため夜目は利くように訓練している。

部屋には隠れるような隙間は無い筈だ。入口の扉から見て左側に本棚が壁を埋め、正面奥に窓と机、右側にベッドがあるだけの簡素な部屋。なのに、どこに、いたと言った？

「証拠を一切残さないア、魂消^{たまげ}たねエ。その歳で立派な殺人鬼かア……」

気配は、無い。だが背後には確かに声を発する《何か》がいる。

俺は瞬間的に思考を回し、背後の《何か》をどうすべきか判断を下した。殺^ヤるしかない。

着ていたジャケットの裏地にそつと手を差し、一挙動で万年筆を抜き放ち、動作を極限まで収斂させる。胴体を捻って振り返り、一息で背後の何者かへと跳ぶ。距離を一瞬で殺し、一切の間断も無く万年筆を背後の何者か。外套を羽織った子供の首筋に突き立てる！

ぐちり、と肉が抉れる。

生々しい感触が手のひらに広がり、その感触が消え去る前に更に深く突っ込み、横に捌く。

ばしッ、と勢いよく鮮血が迸り、部屋にムツとした血臭が広がる。と、辺りに鮮血が撒布する。

ぼたぼたぼた

と鮮血が降り注ぐ部屋の中央で、首を掻つ

捌かれた少年が俺と視線を交える。濁った瞳は白眼の部分が深紅に染まり、黒眼の部分が金色に彩られていた。まるで猫のように瞳だけが闇の中にゆらりと浮かび上がる。

「ひやはア！ いいねエいいねエ、その反応。取り敢えず規定外と感じた時点で殺害を躊躇わねエたア、根っからの殺人鬼なんだな」

「何で、生きてる。」

ボタボタと鮮血が床板を満たしていく中、少年は無邪気な笑みを浮かべて俺を見つめていた。そう、あくまで何の悪意も感じさせない笑顔を浮かべて。

首筋からの流血は止まらなかったが、それと同様に少年からは狂気や戦慄も止め処なく溢れ出ていた。

「コレは、何だ。」

まるで現実感が無い。夢の中にいるかのような錯覚を感じる。

「……オマエは、何だ？」

俺は干乾びた喉を震わせて必死に声を絞り出した。

あまりに龐大な狂気を浴びて、俺は脳が機能不全を起こし掛けているのを悟る。

「オレサマか？ オレサマは狂界の使い、ってトコかなア。そう身構えんなよ、何もオマエの命を刈り取りに来た死神って訳じゃアねエんだからよ」

無邪気に紡がれる言葉には滲み出る怖気が隠しきれていない。

首を捌かれた少年は悪意の無い純真に満ちた笑顔で更に言を続けた。

「オレサマはオマエの願望を叶えに来たのサ」

軋む笑みが張りつき、全身に戦慄が駆け抜ける。

願望を叶えに来た。そう、少年は言った。……だが、俺には一瞬何を言われたか分からなかった。そして現状を認識する事も、出来なかった。

「……願望？」理解が及ばず鸚鵡オウムのように返してしまう。

「そう。オマエの願望を叶える。……なあに、難しく考える事アねエよ。オマエは望むだけでいい。願うだけでいい。想うだけでいい。それだけでオマエの望みを、願いを、想いを、ぜエーんぶ成就してやるってんだ。……分かったかア？」

……意味が分からない。何を言ってるんだ、コイツは。

異常な事態には違いない。気配を感じさせない少年、首を捌かれ
ても平然と話し掛けてくる少年、願望を叶えると宣う、少年。
どれにしても現実感がまるで伴わない夢物語のような事態だ。

カラカラの喉を一滴の唾が通り抜ける頃、俺は緊張したまま、だ
がそれ以上にこの事態を許容しようと、少年に問いを發した。

「……叶えられる願いは、一つだけなのか？」

あくまで利己的に。これが仮に夢だとしても最高の結末を望
んだ方が夢の分だけ得をした気分も味わえよう。……こんな生々し
い夢を見るのは生まれて初めてだが。

紅金の瞳の少年は三日月のように口を歪めると、

「いいや、何度でも、どれだけでも、オマエの望みが尽きるまで、
だ。……疑いが晴れねエなら試しに使ってみりゃいい。ナニが欲し
い？ 金か？ 女か？ 力か？」

自覚していた。自身に狂気が流れ込んでくるのを。止め処な
い純粹なる衝動が体内を巡るのを。

「……何でも、いいんだな……？」

最後の、確認。

了承が出たら、俺は

三日月の形に歪む口は、

「ああ」

凄絶なまでの笑みを、結んだ。

その夜は鮮血のように紅い三日月が禍々しく浮かんでいた。
まるで人を喰らったような三日月に惹かれ、一人、また一人とそ

の地に足を向ける。

「……兄貴、ここだ。ここから狂気の……スゲエ薄いけど、色んなモンをごちゃ混ぜにしたような臭いがする……！」

目深に頭巾フードを被った幼い人物が発した声に、上背のある、同じく頭巾を目深に被った人物が顎に手をやり、厳かに頷く。

場所は町と町を繋ぐ陸橋の上。陸橋の下では夜中だと言うのに車道から騒音が消える事は無い。円形の光だけが車道を照らしていく。陸橋の上には月明かり以外の光源は無く、僅かに朱に染まった影が二人分、止まっているのが映った。

上背だけを見ると親子に見えない事も無い二人組みの外套を纏った人物は、朱い月に照らされて闇のように地上に影を落としていた。幼い方の影が鼻をスンスンと鳴らし、喉の奥で唸りを上げる。まるで猥染いざみた仕草に、併し大人の方の影は諫める事はせず、

「そつか……やはり、人が集まる場所には付き物のようだな、

《歪ひずみ》というモノは」

学者染みた呟きを発し、大きい影は更に小声で独白を続ける。

「人の底辺にある狂気性とは即ち、密集した空間で表出し易いという、良き例なのかも知れないな。故に《歪》という名の狂気の源泉が世界に生じ、それが人の正気を喰らい尽くし、更なる狂気を……」

「おい兄貴、ストップ、ストップ！」

目前で大きく両手を振る幼い影に大きい影はハッと我に返り、頭巾の上から頭を掻く。地上を駆ける騒音を耳に留めながら大きい影が苦笑を零す。

「済まない、どうも私は没我し易い。……どうしても《歪》が近くなると想起してしまうのだよ、……母を」

一瞬凍るように冷たい光を瞳に宿した大きい影に幼い影は困った風に表情を苦らせ、何とか励まそうと声を掛ける。

「……先代の事ア仕方ねエよ、兄貴。きつとどこかで生きてる筈さ。……きつと」

言いつつ自信が無くなってきたのか、俯うつむきつつある幼い影。大き

い影はその頭にそつと手を置き、柔らかく撫でる。幼い影が気持ち良さそうに首を竦める。

「……済まない、キミを困らせるつもりは無かったんだが、どうやら意図せずそうさせてしまっていたみたいだね。悪かった」

「……兄貴は、先代の事を《きんぎょ狂皇》なら知っていると、本当にそう思うのか？」

そう尋ねる幼い影に対して大きい影はフツと皮肉った微笑を零し、空を仰いだ。

朱に染まる、禍々しいまでの月が浮かぶ、闇黒にそび聳える空を。

「……分からない。でも可能性があるのなら賭けてみたくなるそれが人間というモノだよ」

告げる澄んだ声音は朱色の月まで届く事は無く、闇へと解けて消えた。

二人の外套を羽織った人物が往く陸橋より幾分か離れた はざま挟峰

の市街。夜中の時間帯にも拘らず煌々と照るビルの電飾に車のヘッドライト、そして多くの人の往来が町に睡眠を与えぬように瞬いていた。世界は夜だと言うのに、それに抗うように挟峰の市街地は昼の明るさ、そして日中の賑わいを見せていた。

そんな夜に抗う町を人目を惹く人物が闊歩していた。

「ん〜ん、んっんっん〜」

端的に言えば絶世の美女だった。夏も近い六月中旬の夜空の下、地面に届きそうな程に丈が長い、男物のような鮮やかな紅い厚手のコートを羽織り、その下には豊かな胸を隠す事しかできないような丈の短いタンクトップと、太腿を完全に露にしたショートパンツという格好。更にその下にある肉体はグラビアモデルのように整い、且つ長身。美顔にも拘らずやんちゃっぽい少年らしさも内包した容貌。黎明の空を思わせる深い紺色を湛えた、腰まで届きそうな長髪。全てに於いて一度見たら忘れられない程の麗人だった。

20代前後と思しき美女は鼻唄を鳴らしながら町を散策している

ようだった。

その女に声を掛ける者はいない。更に背後からは全くいなかった。コートの中に提げている物があまりにあまりな物で、声を掛けるのを躊躇わせてしまうのである。

「……キミ」

女が鼻唄を止めて振り返ると、警察官らしい男が不審者を見る目で女に声を掛けたようだった。怪訝そうに歩み寄って来る警官らしき男の姿が視界に映り込む。

女はキョトンとした顔のまま、ナニ？ と闇に染み渡るような透き通る声で応じる。

「その……背中に吊っているそれは何だね？」

警察官が指差すのは女の背後にある物。女は何食わぬ顔で警察官に笑顔を返した。

「大鉈だけど」

「……あのね、そんな物ぶら提げてこんな時間にどこ行くつもりなの？ 危ないから元の場所に戻して、キミも早く帰りなさい」

警察官が呆れ顔で嘆息する姿を見て、女はポリポリと頬を掻く。

「元の場所つ言ってもよォー、コレどこに在った物か憶えてねエし」

「……じゃあどうして持つてるの？」怪訝そうに尋ねる警察官の男。「どうして持つてるかって？ ヒヤハハハ！ オーマエ可笑しな事訊くなア？ 使うからに決まってンじゃねエか」

哄笑を上げる女の背に吊られたそれ 鉈と呼ぶには些か大き過ぎる、180?程の背丈がある女と同じ程の大きさがある 大鉈には、刃に禍々しい鮮血色の紋様が描かれているが、それがホンモノかどうかは定かではない。とても一般人が持つような物ではない事だけは確かだった。

女の狂態に警察官の男は顔を顰め、幾分か居心地が悪そうに言を繋ぐ。

「……熊でも狩る気かい？ 挟峰の山にゃあ熊は出ないよ？」

至極真つ当な事を告げた筈なのに、女は逆に不思議そうな顔をし

て警察官の顔を覗き込む。邪気の一切が感じられない、硝子のように無垢な眼差しが男を射抜く。感情すらも感じさせない、底が全く見通せない闇の瞳が男を捉えて離さなかった。

警察官の男がたじろいで身動ぎした頃、ようやく女は反応を返した。哄笑で。

「ヒヤハハハハ！……あーコレ、熊狩る奴に見えたア？　ちツがうんだなア、コレがさア」

得体の知れない憫笑を浮かべていた女だったが、そこまで告げると急に表情を改め、感情の通らない人形染みた真顔になった。

「ああ、そうだ。こりや熊狩る得物だ。文句あんなら　オマエも一緒に、どうだ？」

ニイ、と八重歯を覗かせ、唇を歪ませて凄絶な冷笑を浮かべる女に、警察官の男は最早言葉が出なかった。

脅されている　それを盾に取って話し合えばまだ自身が上位に立てる？　有り得ない。彼女にはそんな常識^モ通じる訳が無いのだ。

彼女は明らかに異常だ。恐らく自分が盾突くなんて事をしたら

男は微かに体を震わせながら、ただ女から眼が離せなかった。出来たら今すぐにも視線を外して逃げ出したい。でも男にはそれが出来なかった。女の瞳に捉えられていたからだ。

女の感情を通さない闇に通じる瞳に射抜かれ、全身が完全に機能を凍結していた。まるで心の底にある芯を素手で握り取られたような錯覚に曝され、男の額には見る見る脂汗が浮かんできた。

す、と急に女が視線を逸らした結果、男は解放されたと同時にその場に尻餅を着かざるを得なかった。冷や汗がドツと出て、忘れていた呼吸を今更のように思い出す。喘ぐように喉を震わせて息を吸い込み、早鐘を打つ心臓を他人事のように聞き入れる。

女は背　巨大な大蛇を向けて、片手をヒラヒラと振って立ち去ろうとしていた。

「まっ、今は手出ししねエーよ。早死にしたくなけりや、オイ

ラから離れてるこつたなア」

訳の解らない単語を吐き残し、女は闇夜に消え去る。

残された男は言いよつの無い悪寒に曝され、すぐには動き出す事すら叶わなかった。

その頃同じ市 挟峰の住宅地。似たような家々が連なり、これと言った特徴も見出せない地域が数キロに渡って続いている。市街の喧騒が届かぬ静謐な空間が形成されている。そのとある一軒家の一室。

勉強机に向かって陣取り、指でペンを弄んでいる少女がいた。

「……」

その視線は窓の外。今は街路灯の小さな明かりが僅かに差し込んでいるが、部屋の灯りに比べたら話にならない程度のモノで、外の暗さのせいで窓硝子には少女の端整な顔が映り込んでいた。

人形のようにくりつとした愛らしい黒い瞳に通った鼻筋、小さく引き結ばれた口許、美少女と形容しても差し支えない程に整った顔立ちは今、不快気に曇っていた。本人自身その不快の許は分かっていたのだが、その事に関して今結論を出そうかどうか黙想していたところであつた。

少女は席を立ち窓硝子を開けた。夏の匂いがする風が彼女の短めの髪を攫つたが、少女は構わずその先を見やる。

朱い月が睥睨する世界は空気の音さえ聞こえてきそうなほど静かだった。静謐な世界を侵すモノなど見渡す限り無く、沈黙と言つ名の虚無を蔽かに形成していた。

だが、少女は外に広がる異常を鋭敏に感じ取っていた。

それは

「……遂に、この町にも」

何を見るでもなく外に視線を向け続ける少女の瞳は、頑なな意志を強く滾らせていた。その時思い出したかのように遠くから消防車の奏でるサイレンが響いて聞こえ始めた。

「……彼は渡しませんよ。私が必ず 護つてみせる……！」
握り拳を固め、少女は決意を新たに、 窓硝子を閉める。
閉ざされた世界には外界の全てを遮断するように一切の音が介在しなかった。

窓が閉められた外界の 更に上。遙か上空に一人分の影が映り込んだ。

濃紺の布衣を纏った、20代半ば程の男。艶がかった総髪は黒。大蛇のような爬虫類染みた印象を与える顔立ちに、瞳は濁った黒の三白眼。スラリとした体軀だが華奢には見えない。学者然とした雰囲気を感じさせるもどこか人を見下したような印象を隠せない、そんな人物だった。

足場は無い。ただ何の力が働いているのか、苦も無く宙に立っていた。

「……狂界の使者が現界した、か。これにてこの地は穢される。さて、此度はどれ程の狂気が渦巻くのか 《狂皇》様」

男の囁きは闇夜に融け、地上に降り注ぐ事は無かった。

朱い月の光を浴びたその人物は次の瞬間には周囲に浮かぶ薄い闇へと融け、失せた。

残された空には禍々しくも輝き放つ、朱く濁った眼球が浮かんでいた

「……さア、役者は揃った。後は、開幕の鐘を待とうじゃアないか」

「

斯くして始まる狂^{イカ}れた世界の創世記。

何が狂い、何が壊れ、何が終わるのか、篤^{とく}とご覧頂こう

壱章 / 疼く悪夢

刻木祥きつぎさちがその夢を見るのは、何も今日が初めてではなかった。

内容は至極簡単で、怪物に殺される夢だ。何度も見たし、その度に冷や汗びっしょりで目覚めるものだから、内容が脳髓に刻み込まれたようにいつだって意識に上り詰めてくる。まるで怪物が心の奥底から自分の命を虎視眈々と狙っているようにも思えて、とてもではないが気分が良くなる事は無い。

脳髓にこびり付いた悪夢はいつだって同じ風景を映し出した。

そこは焼け野原と称せられる場所。辺りには何かの残骸が在るだけで、目印になるような建造物や標識など、視覚的な物体は一切が根絶していた。もしかしたら建造物などの残骸がそれなのかも知れなかったが、元の姿を想像する事が出来ない程にコンクリート片までもが粉碎し尽くされていた。

時間帯は夜なのだろう。仄暗い空気が敷き詰められ、視界はともも良好とは言えない。ただ、辺りの闇が濃い割に頭上に浮かぶ月だけが太陽のように照りついていた。

……お母さん。

無意識の内に零れる単語。それは鼓膜を打つ訳ではない、脳の奥で鳴る残響だった。その夢には自身の声は録音されていないらしく、在るのは怪物の声だけ。祥自身の声は音声処理でもされたように全く聞こえない。

夢で祥は母親の姿を探していたが、夢を見ている現在の祥には母親はいない。父親も同様だ。幼い頃に事故で亡くした。その場に祥が居合わせた訳ではなく、二人は旅行先で不幸な事故に遭ったと聞かされている。祥はそれ以来親戚　父方の祖父の許で生活していた。尤も中学卒業間際に祖父が事故で急死したので、去年からは一人暮らしとなっていたが。

……お母さん、どこ……？

トボトボと、当ても無く足を進ませる祥の視界にやがてそれが映り込む。

残骸の上に座り込み、片手を高らかに持ち上げ、手に掴んだ壺から零れ出る水を浴びる、人の姿。

幻想的な映像ではあった。太陽のように輝く月の光を受けた人物は、まるで湖の上に浮かぶ水の妖精に見えなくも無かった、それ以上近づかなければ。

「ヒヤハハハハハハ！！」

人の姿をした《何か》は、浴びるように水を飲み、空が割れんばかりの哄笑を詠っていた。まるでそういう雑音ノイズとでも言わんばかりの笑声そつあんに祥は顔を顰める。否、顰めたような表情の機微を感じる。

一歩ずつ、祥は人の姿をした《何か》に近づいていく。覚束無い足取りで、だが確実に。

やがて哄笑を上げる《それ》が浴びているモノが、掴んでいるモノが分かる距離になる。吐き気を催す、その事実に気づく距離に。

人の生首だった。更に近づくと分かる事だが、恐怖に顔を引き攣らせた人の生首を掴み、《それ》は滴る鮮血を浴びるように飲んでいった。まるで聖水でも浴びるかのように恍惚とした表情を浮かべ、これでもかと言う位に愉悦に浸っていた。

やがて《それ》が座り込む残骸も判別できる距離になる。人の死体の山だ。無惨にも体の一部を刮こそげ取られた損壊の激しい死体が堆く山積しているようだった。そこに無遠慮にも、高級な椅子にでも腰掛けるように《それ》は片膝を折って座していた。

死体の山に腰掛けた《それ》は祥に気づくと、ゆっくりと生首を口許に運び、大きな口を開け、生首を齧かじり取った。

骨と蛋白質が噛み砕かれる生々しい音が響き、夢の中とは言え祥は凄惨過ぎる光景に胸焼けが起こる。まるで意識がそこに宿ったように、現実としか思えない臨場感でその光景を見つめている。胸が張り裂けそうで気持ち悪さに喉の奥が一杯になる。

「……まだ生き残りが居ったか。よくぞ今まで生き抜けたものだ。私はここにある全てを殺し尽くしたと思っておったのだが」

《それ》は祥を見ても然したる感慨が湧かないようで、急ぐでもなく焦るでもなく泰然とした足取りで彼の許へと歩み寄る。澱みの感じられない歩調はそこが青信号の点った横断歩道でもあるかのように、迷い無く祥へと向かって来る。

祥は逃げない。夢を見ている祥自身は逃げたいのだが、夢の中の祥が全く動こうとしないのだ。幾ら祥が逃げようともがいたところで、夢の中の祥は身動き一つしない。ただ黙して《それ》を見つめている。

……お母さん。

何度も呟く、同じ単語。だが、その単語が差す存在はこの場には居合わせない。助けてくれる母の姿はどこにも無い。

その間にも《それ》は歩を進め、あつと言う間に距離は殺されていた。眼前に聳える大人の背丈を有する《それ》は祥を見下ろし、
「……命乞いすらせぬか。……ふん、少しは抗えばよいものを……命が惜しくないのか？ 小僧」

《それ》は不愉快そうに祥を見下ろすが、祥は見上げもせず《それ》の胸を見つめていた。筋肉などありそうも無い華奢にさえ映る腹だった。かと言って先程遠目に見た体つきを見ても、とても人を屠るような膂力りよくなど持ち合わせていないようなのに。《それ》の一体どこにこれだけの人間を屠る力が在るのか、祥には皆目見当が付かない。

その手が伸び、祥の首を鷲掴みにする。相手がただの物であるかのように、一切の遠慮を感じさせない手つきで祥の首を捻り上げる。
苦しい。

それは夢の中の祥の呻きではなく、夢を見る祥自身が感じた錯覚だった。息が詰まり、頭に酸素が入らなくなる。視界が明滅し、徐々に思考の白紙化が始まる。

白熱する視界に《それ》の顔が映し出される。

祥の首を握り

締めたまま、体ごと持ち上げたのだろう。祥の視線と《それ》の視線が交わる。

女性のそれを思わせる顔立ちだったが、何より眼を惹いたのが醒めた眼だった。

「……抵抗せぬ者を殺めても不快だの。　　去ね^い」

視界が一転、深紅に染まる。

そして祥は現実で目が覚める、　　筈だった。

いつもならここで現実の世界に覚醒するのだが、　　今日は違っていた。

塵のように放り出され、祥の視界が地面を転がる。やがて動きが止まる頃、祥の視界に一人の人間が映り込んだ。男か女か判然としない中性的な人物が。

《それ》と対峙するように現れた人影は祥に憐憫の眼差しを向けると、即座に《それ》へと視線を投げ直した。

「ん？　華檻^{かおり}、か。貴様のお陰で私は解放された。礼を言うぞ？　で、何だ？　もう貴様には用は無いのだが。それとも何か？

親友たる私の手で葬られたいか？」

「……もう、戻れないのね。　　こんな狂れた悲劇はもう終わらせましょう。これでお別れよ、　　《屠鬼^{とき}》！」

人影　　どうやら女の人《それ》に向かって啖呵を切ると、視界が胡乱^{うろん}となり、映像がパツタリと途絶えた。

死んだ、と思った。祥の中にある主電源が落とされたような一切の感覚が遮断したような状態に陥った。

闇　　視界も閉ざされ、感覚も失われ、あるのは永久に続きそうな闇だけ。

……やがてどれ程の時間が経ったのか。瞳に光が戻るのを感じた。片眼が無理矢理に抉^こじ開けられ、虚ろな視界が戻ってきたのだ。視力が戻っていないせいか焦点^{ピント}が合わず、ばやける視界に映るのは輪郭^{シルエット}を伴わない一人分の人影。

「アナタは生きるのよ、祥くん。……生き抜いて、何が何でも。彼

女の分も、彼女の分以上に、生を噛み締めて。それが……最初で最後の、願いだから……」

ぐち、と。
瞳に、異物が入り

ひゅ、と震える喉から僅かに呼気が漏れて、やっと呼吸できている事を自覚する。自身が生きていると、ベッドの上で再認識する。

ぐる、と右眼が疼くのが分かった。

一連の夢を見た後、祥はいつも右眼が疼くのを感じていた。疼く……意識してないのに右眼が蠕動するぜんどうような感覚があるのだ。まるで右眼だけに別の意志が宿ったかのような不気味な感覚。

ただ今日は少し違っていた。いつもの夢の続きを見てしまった。

それは言わば死んだ後の世界。それを見た結果なのか、夢という名の地獄を体感したような酷い徒労を感じてしまった。

ベッドの上に上半身を起こし、祥は右眼に瞼の上から触れる。

と、触れる直前になって疼きは治まり、平生と変わらない状態に戻る。視界にはいつもの光景 祥の起臥きがする部屋が映り込む。簡素な造りの部屋で、入口の扉から見て勉強をするための机が左手に据え置きの本棚が机の脇にあり、筆笥が部屋の奥にあるだけ。祥の体があるベッドは入口の扉の右手に鎮座している。

「……また、あの夢、か……」

意識が覚醒し、今までの一連の光景が夢だと再認識される。この時点でやっと夢が夢だと認識できるのだから、それまでは本当の現実の出来事だとずっと錯覚していたのだとも判る。……この夢が現実ニユースに起これば事件の一つにでもなっているだろうが。

祥は右眼を瞼の上から揉むように押さえ、先程の夢の結末を少しだけ思い出す。

想像を絶する怖気が全身を駆け抜ける。誰かは知らないが瞳の中に何かを詰め込もうとしていた。その感触が蘇り、喉許にまで

吐き気が込み上げてくる。即座に妄想を打ち切り、落ち着こうと思考を切り替えた。

汗でぐっしより濡れたシャツを摘まみ、祥は小さくため息を零す。シャワーを浴びてから行こう。そう考え、思考を現実に切り替える。じゃないと彼女に何を言われるか分からないから。

「行つてきます」

玄関口で咳きを漏らした祥は、家を出て戸締りを行う。

ブレザー越しに感じる朝陽に暖かさを感じつつ、静かな朝の住宅地を歩く。あまり大きな道ではないため、車が二台も並ぶと通行できなくなり、抜け道としてはあまり活用されていない。挟峰の住宅地はこういう道が比較的多い。大通りに出れば車の交通量が多くなるし途端に騒がしくなるが、この辺は夜になると殆ど音の感じられない地帯になる。車の交通量自体も、夜間はともかく日中でさえも殆ど無いのだから。

あちこちから生活音が聞こえてくる狭い道を歩いていると、前方から変わった人が歩いて来るのが見えた。

まず背が高いのですぐに眼に入った。180?はありそうな、グラビアモデルのような体型をしている女性。次にもう夏も近いと言うのに鮮やかな紅色の足下まで届きそうな程の大きな男物のコートに纏っている。流石に前の釦は全て外し、その下は下着と見紛うような、胸がキツそうな丈の短いタンクトップと、同じく子供用のように太腿が露になっっているホットパンツという格好ではあったが、それでも暑そうだと感じる。

何より眼を惹くのは、その美顔だった。やんちゃな少年らしさを含みつつも女性としての可愛らしさを内包した快活な面構え。艶やかな深い紺色の髪は滑らかに腰まで届く長さを有している。一度見たら絶対に忘れないような麗人だった。

祥は一瞬見蕩れるように女性を眺めていたがハッと我に返り、そうだ僕には夢生ちゃんという彼女がいるじゃないか、と慌てて頭を

そう思って自身に向かって一つ律儀に頷くと、通学路でもある道を再び歩き始める。

「なア、そのオマエ」

「ツツ！？」

女性はそう言つて祥の顔を見つめる。その顔の近さときたら、あと一ミリでも動けば鼻と鼻がぶつかる近さだ。

眼前で祥を見つめる女性は暫くの間、ほー、へー、ナルホドなア、と一頻りひとしき感嘆の声を上げてから顔を離すと、祥を見据えて三日月型に口を歪めた。あまりに歪んでいたが、それは紛れも無く

「惜しいなア、鐘が鳴つてたら間違ひ無く喰つてたのによオ。オマエ命拾ひしたな！」

「ま、命は大切にしろよオ。人間様にあ命つてモンは一つしかね
エんだからよっ」

「オイラが行くまで喰われんなよ。テメエはさア

狂気に歪んでいた。

「オイラの獲物なんだからなア」

ヒヤハハハハ！ と再び哄笑を爆発させ、女性は後腐れ無く去っていく。

訳も解らず女性を見送った祥だったが、分かる事もあった。

彼女に近づいてはならない、という事だった。

後になって冷や汗が噴き出し、祥は視界から女性が消えたのを見計らって、……ようやく胸を撫で下ろした。倦怠感に似た安堵を覚えてしまう。

「……何を見蕩れてるのっ？」

「わあっ！」

不意に耳元で弾けた不満気な声に、祥は心臓が口から飛び出すかと思う程に驚いた。

取り繕うように慌てて振り返ると、そこには先程の女性とは別種の可愛らしさが幼さとして残る、美顔を不愉快そうに歪ませた少女の姿があった。

祥と同じ位の歳に相応な可愛らしい顔立ち、短く切り揃えた髪、綺麗に整った高校の制服、シャンとした背筋に拳措と、見るからに育ちの良いお嬢様と言った容姿を備えた少女だった。その整った顔立ちを見ると、すぐに美少女という単語が出てきそうな程の可愛い女の子。

少女は腰に手を添え、全く、と辟易したように嘆息する。ただそれだけの立ち居振る舞いでさえも気品を感じさせる高潔さがあった。「わたしという彼女がありながら他の女の人に移りするなんて、

許さないよ？」

「ご、ごめん。そんなつもりは無かったんだけど……」

「……本当にい？」

「ずずい、と身を寄せる美少女に祥は戸惑うように身を退き、あうあう、と困惑する。

「ほ、本当だよっ」

「……ふふ、冗談だよ、祥くん。わたしは祥くんを信じているよ」

「む、夢生ちゃん……」

意地悪な笑顔を浮かべてウィンクする少女　夢生に、祥はタジタジになってしまう。

御淵夢生。祥の彼女であり、クラスメイトでもある。小さい頃　祥が両親を亡くし、挟峰にいる祖父を頼りに来た時知り合った少女である。家が近所だった事もあり、幼馴染のような間柄が中学の頃まで続き、高校二年になった今、祥の彼女となっていた。

夢生の端麗な容姿から恋敵は非常に多かったため、その座を獲得した祥は周囲からイジメ半分からかい半分の、ちよつと甘酸っぱい高校生活を満喫していた。……とは言うものの、温厚な祥にちよつかいを出すと言っても半分以上は悪ふざけで、本気で二人の恋仲を破綻させようという輩は今のところ現れていなかった。

容姿は幼さの残る可愛らしいモノなのに、話してみると意外にも彼女には大人びた印象がある。独特の空気と本心を決して覗かせない強固な仮面ボーカフェイスを持ち、祥は恋仲となった今でも彼女の事を深くは知らなかった。故に祥は自身の告白が成功した事自体謎に思えてならないのである。

以前聞いた事がある。どうして僕の告白を受けてくれたのかと。その答はと言うと、

「わたし、何かに一途になる人って好きなの。直向きな心に惹かれちゃうんだあ。祥くんからは、そういう気持ちを感じたんだよ」

それは暗に、夢生に対する想いを確りと感じ取ってくれたのかな、位にしか思考が及ばなかったが、何にしたって自分が彼女に認められたような気がして、祥はその事を思い出す度に嬉しい気持ちになる。

「さ、行こう、祥くん。学校に遅れちゃう」

「あ、うん」

「……あと、遅れちゃったけど、　おはよう、祥くん」

柔らかな微笑を浮かべる夢生に、祥は心臓の高鳴りに気づきつつ、うん、おはよう、と若干照れながら挨拶アイサツを返した。

「最近は本当に暑くなったよね」

隣で呟きが漏れたのを聞き取り、祥はうんと頷く。

「もう六月の半分も切ったからね。……今年は梅雨入りが遅いつて言ってたよ」

「ジメジメするのはもつと嫌だなあ。早く夏にならないかな」

「でも今年は酷暑だって話も聞いたけど」

「……この際暑くてもいいよ。夏休みになれば、祥くんともっとたくさん遊べるから」

何気無く雑談に爆弾発言を投下する夢生に、祥は戸惑いながらも苦笑を返した。少し頬が赤いのは自身でも判っていた。

そんな祥の様子を見て微笑を浮かべる夢生には敵わない、と祥は更に苦笑を濃く滲ませる。

まだ静寂が残る住宅地を二人が歩いていると、人だかりを見つける。そう多くは無いのだが、皆足を止めて人の家を覗き込んでいる。

二人は顔を見合わせ、進路上その人だかりの横を通る時、何の野次馬なのか悟った。

焼け朽ちた家がそこにあつた。外郭が僅かに残っていたがほぼ全焼だ。微かにまだそこには木の焦げる臭いが漂い、この火災が昨日、或いは今日未明に起こった事を克明に曝していた。警察官が黄色い紙紐の^{テープ}囲いの中で黒く焼け落ちた家の近くを歩き回っている。

「……昨日のサイレンはこれだったんだ……」

夢生が小さく漏らしたのに気づいて、祥は振り返った。沈痛な面持ちの夢生は昨日の夜中、消防か警察か分からなかったけれどサイレンの鳴る音が近くで聞こえたという話を祥に告げた。

祥はその頃は夢の中だったので全く気づかなかった。その時刻は深夜と呼べる時間帯だったらしく、夢生ももう寝る間際だったらしい。

「ねえ、聞いた？ 何でもまた放火みたいよ」

「ああ。あれだろ？ 一人暮らしの奴を狙った、殺人放火魔」

黒山を通り過ぎる時に聞こえた野次に、夢生は更に表情を暗くする。

「……怖いね。まだ犯人捕まってるみたいだし」

そう愁いを帯びた声を発する夢生に、祥も表情の色合いを落として頷いた。

連続殺人放火魔。その犯行は随分前から確認されていた。

祥の記憶の中では三年前には既に始まっていた。それから幾度と無く犯行は繰り返され、中には模倣犯みたいな者まで現れ始めた。狙われるのは専ら一人暮らしの人間。そこに男女や老若は関係無く、或る意味無差別に犯行は行われている。その犯行は残虐非道で、被害者に重度の暴行を加え、最終的に家に火を点けて証拠を全て隠滅する……併も被害者が生きたまま火を点けるといふ非道ぶりに、世間は少なからぬ恐怖に慄いていた。

あらゆる証拠を炎で焼却するため未だに有力な手掛かりが見つからず、初犯だと思われる事件から三年の月日が経った今でも犯人は特定できていない。人物像としても様々な憶測が飛び交うだけで逮捕に結びつくような話は全く上ってこない。

「祥くんも一人暮らしなんだから戸締りには充分気を付けてね？」

「うん、分かった。それに心配しなくても僕なら大丈夫だよ」

「本当にい？ それ、明確な根拠でもあるの？」

「う……それは……」

「何なら、犯人が捕まるまで泊まりに行つてあげよつか？」

小悪魔的な笑みを浮かべる夢生に祥はあわあわと手を振って、

「いつ、いいよつ、そんなん、大丈夫だからっ」

「ふふふ、可愛いなあ、祥くんは」

「……夢生ちゃん、からかつてるでしょ？」

クスクスと口許に手を当てて忍び笑う夢生を見て、不機嫌そうに唇を尖らせる祥。

すると夢生は、あら、と祥を見つめて、

「わたしはいつも本気だよ？ …… 祥くんの許可さえ下りれば、いつだって泊まりに行つてあげるよ？」

「え、あ、えと……」

顔を紅潮させて言葉に詰まる祥に、再び夢生は口許に手を当てて上品な笑声を上げる。

「ふふ、本当に可愛いなあ、祥くんは」

「……」

絶対に遊ばれてる、と肩を落とす祥に、夢生はうふふ、と笑っていたが、やがて真顔に戻り、肩越しに祥を振り返って、すぐに顔を前に戻した。

「……大丈夫、何が遭つても祥くんはわたしが護るから」

「え？」

「祥くんは何も心配しなくていいよっ」

ニツコリと華やぐ夢生に心を奪われながらも、祥は夢生の言葉を半分も理解できず、小首を傾げてしまう。

挟峰市 規模はそんなに大きくなく、内包する学校数などからしても都会と呼ぶより田舎と言う形容の方が似合う地域だった。見栄えのする商店がある訳でもなく、有名な土産や建造物も無く、近隣の町より見劣りしてしまう人口五万人弱の比較的小さな市だった。市の北から東、そして南に孤を描くように山が連なっている事から通行の便がそれほど良くなく、有体に言えば発展途上の市だった。

挟峰第一高等学校。通称『第一』。祥と夢生が通う高校だ。挟峰市の中では目立つような高校ではなく、かと言って偏差値の低い高校でもない、中級という言葉が似合う学校だった。校舎が広過ぎる訳でもなく、地方の窮屈さでもない。野球部が有名と言えるが、県主催の試合で準決勝以上に進んだ事が無い次元だ。^{レベル}何にしても有名でなければ無名でもない、目立ち過ぎる事も目立たない事も無い『普通』の高校。

二階にある教室の自分の席に鞆を置き、退屈そうに始業の鐘が鳴

るのを待つ祥は、ふと視線を空席へと向けた。誰もいない席が教室の中で忘れられたようにぼつねんと浮かび上がる。

誰も気に掛けない席の主は、異世衛^{いせいまもる}という祥とは幼馴染の少年である。幼馴染……とは言ってもそうたくさん一緒に時を過ごした訳ではなく、時折話す程度の関係だ。単に小学校の頃から同じ学校の同じクラスが多かっただけ。その程度の関係なのだが……

「……今日は、来るかな」

何と無く彼の事はよく気に掛けていた。体が丈夫じゃないとか、気が弱いとか、そういった心配をしている訳ではなく、彼はどこか変わっていて、それが気になるだけだ。

一言で言えば一匹狼。一人で読書をして時を過ごす事が多い彼は、人と関わりを持つ事を極端に嫌う……と言うのが祥から見た印象だった。話し掛ければ応じるのだが、人を避けているような印象が付き纏う。学校に来るのは単に高校を出た方がいい職に付ける、それ位の意味しか感じられないほど行事にも消極的だった。

だが祥は彼の事が何と無く気になるのである。小さい頃から衛を見ていた分、皆の輪に入ってきて欲しいな、と思うし、彼とはもつと色んな事を話してみたいとも思っていた。いつも難しそうな本を読んでいる彼は一体どんな事を話題に乗せるのか、祥はとても気になっていた。

衛はよく学校を休む。先程述べたように体が弱いという訳ではなさそうで、先生は何も言わないが、単なるサボリのように思える。誰も気に掛けないし、気にも留めない。衛は学校に友人を求めているのかも知れない、と祥は考えていた。

黒板の上に掛かった時計に眼を移すと、始業までもう時間が無い。今日もサボりかな、と祥が諦念を嘆息に混せて吐くと、

ぐる、と右眼が疼くのが分かった。

蠕動する　まるで眼球が祥の制御を逃れたように、別の意志を持ったかのように蠢動^{うごめく}する。

不気味なその感覚を祥が自覚した瞬間、　教室の後ろ側の戸が

開き、制服を纏った少年が入ってきた。

漆黒の髪をぞんざいに伸ばし、両眼を隠すように前髪を垂らした姿は、一目で分かる。異世衛だった。

身長は祥程 高校生としては平均的な体躯に、表情といい雰囲気といい、陰気な空気が覆っているように思わせる暗い印象を周囲に与える容姿。肌は白さが目立つ、いかにもインドア風な雰囲気を感じていた。体つきは逞しいとは言えないが、割と肉付きは良さそうに運動をさせれば好成績を残せそうな印象がある。制服にはあまり皺シワが無く、綺麗にアイロンを掛けているようだった。

寡黙な動きで誰もいなかった席に着くと、早速鞆から小さな文庫本を引き出し、頁を繰って静かな佇まいで読書を始める。

その姿を盗み見て、右眼が疼くのが納まらなかった。

何だ？ いつもは目覚めた時にしかなかったのに……！
自分の意志で鎮められない右眼の蠢動に、祥は胸に重石が付けられたように焦り、咄嗟に瞼の上から右眼を押さえた。

『抗うな、小僧』

脳髓に響く女性しゃがの囁いた声は、併し耳朵を打たずに頭に溶け込んだ。
だ。

周囲を見回しても誰も祥を見ていなかったし、話し掛けたような仕草をする者もまた皆無だった。

……誰の声だ？

『くく、此処にきて好機が巡ってくるとはの』

頭に溶ける囁いた声は、しかし鼓膜を揺らさず脳にだけ響く。

祥は不思議そうに周囲を見回すがそんな声を出したような者は誰もおらず、更に祥は疑問符を頭の上に並べていく。

『案ずるな、直に貴様は』

眼球の蠢動が納まり、同時に頭の奥底に響く声も止んだ。

……何だったんだろう？

訳も分からず小首を傾げていると、衛がこちらを見ているのと眼が合った。

衛の顔には驚きが刷かれ、まるで祥を珍品と勘違いしたような眼差しを向けている。

「……？」

祥は一瞬自分が見られているのか分からず困惑したが、すぐに自身を見て驚いているのだと悟り、更に戸惑う。

自席から立ち上がり、祥は衛の前へと移動する。衛は驚きを再び默然とした仮面の下に仕舞い込み、文庫本へと視線を戻そうとした。「えっと……おはよう、異世くん」

「……」

栞を挟んで本を閉じ、衛は見上げる形で祥に視線を向け直す。

感情の通わない黒曜石のような瞳が祥の姿を捉える。

「……何か用か？ 刻木」

素っ気無く衛は返してくる。感情を殆ど抑えたような起伏の乏しい声音に、祥は苦笑を浮かべ、だが折角できた話し掛ける機会を逃さないように尋ねる。

「何で僕を見て驚いてたの？ 僕に何か付いてる？」

「……」

黙したまま衛は祥を見上げ続ける。睨みつけるとか、疎ましいと思っている訳ではなく、単に言葉を探しているような、そんな空隙だった。

やがて祥が質問をし直そうかと思いついた頃、

「……幻覚が、見えただけだ」

「幻覚？ ……どんなのか、訊いてもいい？」

「……」

また長い間があるのかな、と思った祥だったが、今度の返答は然して間が無かった。

「……化物」

「え？ それって……僕のどこに見えたの？ 肩の上？ 頭の上？ それとも……」

「オマエが、化物に見えた」

どくん、

質問を遮ってまで発せられたその言葉の羅列に、祥は一瞬思考が正常に働かなかった。

(……僕が、化物に、見えた?)

暫く沈黙の間が在って、やがて祥はくす、と微笑を零した。

「そっか、僕が化物、か。……それって、その本に出てくるような奴？」

ニコニコと害意の欠片も感じさせない口調で応じる祥に、衛は黙して返事を遅らせる。

衛は文庫本のカバーを取り外し、その表紙を黙って祥の前に差し出した。

真つ黒な背景に白い幾何学模様と祥の知らない文字が記された円が描かれた、如何にも胡散臭そうな本だった。

「……俺は、悪魔や魔物と言った幻想的な存在は信じていない」

祥が呆気に取りられている間にカバーを掛け直した。衛は、だが、と言を続けた。

「それとは別に、人は内に化物を飼っているんじゃないかと、思う時がある」

「……寄生虫とか？」

「……物質的なモノじゃない、精神的なモノだ。……特殊な嗜好や性癖は、それだけで人を化物と同義にするだけの影響力があるんじゃないか、と」

祥は話に付いていけず、頭の上に疑問符を乱舞させる。

「えっと……それって、精神が病んでるって事、かな？」

「……仮定の話だが、潔癖症の人がいたとする。その思想が極端に向かうと、全てを綺麗にしたいくなる。その人物にとっての汚れを取るためには、どんな労力も厭わないだろう。完全に綺麗にするために、どんな事だってする。……究極的に、人を殺す事になってもだ」

「……極端な話だが、有り得ない話ではないと思う。その精神は

「から、と教室の戸が開き、男の教諭が入って来て、全員席に着け
ー、と声を飛ばしたのが聞こえた。教室の中が急に慌しくなり、皆
自分の席へと駆け戻って行く。それを眺めるように衛は辺りに視線
を配り、それから祥へと言の矛先を向け直した。

「……時間だ、席に戻れ、 刻木」

「あ、……うん、じゃ、また聞かせてよ、その話」

そう言って祥は自分の席に戻っていった。

文庫本を鞆の中に戻した衛は暫く横目で祥の様子を窺っていたが、
……それもすぐに止め、授業に集中し始めた。

…… 本当に錯覚、なのか？ 刻木……

そう頭の中で呟きを漏らした後、衛は顔を黒板に向け直した。

式章／必定の遭遇

「……複雑な心境だけど……でも授業が半日で良かったね、祥くん」

「正午を過ぎた狭峰^{はざまね}の市街地。商店街と言うべき大通りは夕方こそ一番の活気を見せる場所なのだが、平日だと言うのに学生達の姿で溢れ返っていた。中には既に私服に着替えを済ませた者の姿さえ見受けられる。」

青々と茂る街路樹には早くも夏の虫が張りつき、喚声を辺りに響かせている奴も幾つか見られた。直射に加えて硝子張りのビルやアスファルトの照り返しが、周囲を一気に灼熱へと変えていた。道の端では早くもアイスクリームの屋台が開かれている。

「でも、それだけ外は危ないって事なんだよね」
夢生^{むじう}がにこやかに声を掛けてくるのに対し、祥^{さち}は苦笑を滲ませながら諫めるように応じる。

学校は半日で生徒を帰宅させた。その理由は連続殺人放火魔が未だに捕まらないとか、犯人が挟峰の市街にいないのではないかと噂が立っているとか、学校に脅迫文が届いたとか等々（エトセトラ）。様々な憶測が飛び交っているが、学校側からは『現在の挟峰市は危ないので、皆自宅で待機しなさい』と一方的な通達^{モリ}で、よほどの優等生で無い限りその忠告を聞く訳が無かった。学生にとっては降って湧いた絶好の遊び日和なのだから。

「祥くん？ そんな心構えじゃ人生楽しく生きられないよ？ もつと良^{ポジティブ}好的に物事を考えなくちゃ」

家庭教師のような態度で窺^{たしな}める夢生に、祥は、あははと更に苦笑を濃くするだけだった。

まるで気にしない彼の態度に、むう、と頬を膨らませて夢生は不機嫌そうに祥を睨みつける。

「……祥くん。まだ今朝の事、わたし怒ってるんだからね？」

「今朝の事？」

「ふうん、祥くん忘れちゃってるんだ。そつかあ、ふうん」

「あ、あの、夢生ちゃん……？」

「あーあ、わたし拗ねちゃいました。何か奢ってくれないと、とてもじゃないけど機嫌が治りそうにありません。あーあ、どうしまし
よう？」

「お、怒ってる……？」

「やっと気づいた？ わたしは今とてもご立腹です。そうねえ……
クレープで我慢してあげる。イチゴミルクの」

「……」

ふいつとそつぽを向いて振り返ろうともしない夢生は、こうなる
ともう梃子^{テコ}でも動かない事を祥は知っていた。洪々と財布の中を検
めて、何とか窮地は切り抜けられる事を悟る。

「噴水広場で待ってて、すぐに買ってくるから！」

そう言つて駆け出す祥をヒラヒラと手を振つて笑顔で見送る夢生。
その瞳が細く鋭く眇められる。

周囲に意識を張り巡らすと、自身を環視の眼から抹消するように、

詠む。

「《転界^{てんかい}》」

言葉を発した刹那、夢生の姿はその場から掻き消えた。……まる
で透明な塗料^{ペンキ}でもブツ掛けたみたいに、瞬間的に夢生の姿は消失し
ていた。

その姿が次に現れたのは先程いた場所からは数キロ離れている、
祥が指定した場所とは別の広場。制服を着た大勢の若者や、昼の休
憩時間と思しきサラリーマン風の男達、子連れの老婆の姿などがあ
ちこちに見られる。広場は大きな自然公園の一部らしく、辺りには
樹木や草花以外の視覚的な物体は見受けられない。色取り取りの草
花を觀賞するためか、白い塗料を塗りたくった木製の長椅子^{ベンチ}が幾つ
か設けられているだけだ。

その長椅子の一つに一人の女が座っていた。眼前に突如として現

れた制服姿の女子高生を見て、その瞳　深い闇を湛えたような禍々しい感情が渦巻く瞳が喜色に眇められる。

今朝の、紅いコートの女だった。

「ほオ、ここにやア《間術師》^{まじゅつし}もいんのか。クソヤベエ《歪》^{ひよみ}でも見つかったか？　或いは《屠鬼》^{とぎ}でも見つかったか？　……何だア？　オイラが逃げるとでも思つて飛んで来たつてか、あア？」

「……《殲滅屋》^{せんめつや}風情がこの程度で尻尾を巻いて逃げると言つなら、とんだ三流以下の紛い物だわ。　警告に来たの」

紅いコートの女は長椅子に腰掛けたまま夢生を見やり、皮肉った憫笑を刷く。同時にその笑みには隠しきれない程の寧猛さが滲み出ていた。

そんな表情の委細には構わず、夢生は先を継ぐ。

「今朝の少年を憶えてるわね？　彼は殺さないで」

「今朝ア？　……あア、あの面白エ眼エ持つてる奴の事がア。……

へエ？　因みに訊いとくが、理由は？」

「わたしの彼氏だから」

「ぼかん、と女は呆然と夢生を見つめていたが、やがて、

「　ヒヤハハハハ！！　あーあーナルホドナルホドオ！　そりや殺されたら堪ンねエ訳だ！　ヒヤハハハハ！」

「そ。分かつて貰えたかしら？」

「ざけてんじゃねエぞクソガキ」

全く間を置かず吐き捨てる女に、併し夢生は表情をピクリとも変えなかった。

醒めた眼光で夢生を射止める女は、はアーと重たい息を吐き散らし再度睨み直す。

「オイラはオイラのやり方で仕事やってんだ、テメエに文句を言われる筋合いはねエな。それとも何かい？　テメエがここに《檻》を張れるとでも吐かしやがる気か？　テメエがオイラに依頼するつっぴんなら、話は別だが？」

「ま、端から期待はしてなかったんだけど。……はあ、分かつては

いたんだけどね、この結末」

「あアん？」

煮えきらない返答に、思わず女が苛立ったような声を上げる。

腕を組んだ体勢で、ふう、と嘆息を零し、遠い空を見上げる夢生。その視線の先には虚空しかなかった。

「……でも、可能性が在る限り夢見ちやうじやない。実現不可能を」
ポツリと零れた独白に女は一瞬の空白を空け、容赦無く嘲笑

を返す。

「アハハハハ！ 可能性は信じるに値しねエぜ嬢ちゃん？ 助かる
かも知れない、死ぬかも知れない、どっちも《地獄》じゃ等しくお
陀仏だ。《地獄》に在るのは、死だけだ。灰色は有り得ねエ」

再び哄笑を上げる女に夢生は苦々しい表情を滲ませ、背を向ける。

「……《殲滅屋》がいなければ《地獄》が浄化されないのは分かつ
てるから、アナタを殺すつもりは、現在に限ってないわ。……但し、
今朝の彼 祥くん^はに牙を剥いた瞬間、その首刎ね飛ばしてやるか
ら、そのつもりで」

そう言つて姿を消す夢生を見送り、女は長椅子から腰を持ち上げる。

「さっ、てっ、とっ。へっへっへ……こーりや面白くなってきやが
ったぞうっつ」

胸の前で蠅^{ハエ}のように手を擦り合わせ、唇を舌で舐め回す表情は実に恍惚と輝いていた。

「よお、その姉さん」

そこに突然無粋な声が湧き上がり、一気に意気が消沈してしまつた女は辟易とした表情を刷いて面倒臭げに振り返った。そこには想像した通りの無粋な連中の姿。

大学生だと思われる四人組みは、一見すると優しそうな形^{ナリ}をしているが、……その奥底に秘める内情をそれと無く悟つた女は露骨に辟易と返事を寄越す。

「ンだよ、オイラに何の用だ？」

「お、キミ変わった娘だね？ それって漫画のキャラか何か？ その辺の話、俺らに聞かせてくれねえ？」

ヘラヘラとその気も無いくせに話し掛けてくる男に苛立ちを感じ、紅いコートの女はせせら笑いを刷いて吐き捨てるように告げる。

「あんな、いつこ言つとくぞ？ オイラはなア、テメエらみてエなクソ弱エ奴らにやア欠片も興味湧かねェんだ。分かるか？ 害虫にどうしたら興味を持てるか是非とも教えてくれよ？」

「……おい、あんま巫山戯^{ふざけ}た事吐かしてんじゃねえぞコラ？ 幾ら温厚な俺でも怒るとマジヤベエからよお」

凄味を利かせているのか、男が顔を険しく歪めて擦り寄ってくる。周囲の男達は表情こそ変えていなかったが意志は同じらしい。

「古典的っつーかよオー、もつとマシなゴミはねエモンかなア。ま、また後で遊びに来いよ、その時や遠慮無く喰つてやつからさ」

「はあ？ おい、この女電波系か？ さつきから全ツ然会話通じねえーんだけど」

「今ならまだ間に合うぜ？ サツサとこの町から遁^{とん}ずらした方がいいと思うぜエ？」

女は凄絶な笑みを浮かべるが、男達は顔を見合わせて失笑を浮かべるだけで取り合おうとしなかった。

「分かった分かった。何でもいいから来いよ、一緒に遊んでやつから」

そう言つて手を引こうとする男だったが、刹那に股間を蹴り上げられ、豚の鳴き声のような呻きを漏らすと糸の切れた人形のよう^{ひなま}に跪く。

思いつきり股間を蹴り飛ばした女はニタニタと下卑た笑みを刷いたまま、リーダー格と思しき股間を蹴り上げられた男の髪を掴み上げ、無理矢理視線を合わせるように立ち上がらせる。男が痛みで呻き声を発する。

女は顔を近づけ、猥染みた眼差しで男の瞳孔を射抜いた。

「だアから言つてんだろ？　まだお遊戯の時間じゃねエんだよ、鐘が鳴ったら遊んでやるから、それまで我慢しやがれ。……ま、長生きしてエんなら、オイラから可能な限り遠くへ逃げるこつたなア。そしたら、ちょこーつとは生き延びれるかもよオ？」

ヒヤハハハハ！　と眼前に哄笑を浴びせ掛け、髪を離れたその手で鼻頭に正拳突きを叩き込み、男を殴り倒す。

男は鼻血を出しながら蹲り、すぐには動き出せそうに無い。取り巻きの男達も即座には手を出そうとせず、何の後腐れも無く立ち去る女の背中　巨大な大蛇を見送る事しか出来なかった。

「ぐ、くそ、許さねえ……！　おい、あの女追うぞ」

蹠踉めいりやういて鼻を押さえながらも立ち上がるリーダー格の男に取り巻きの男達が群がる。

男の優しそうと表した顔は憤怒に燃え上がり、同時に羞恥で真っ赤に染まっていた。

「仲間を呼べ、全員だ！　……あのアマ、一人になったら襲うぞ。二度と外を出歩けねえようにしてやる……！」

噴水のある広場の近くにある繁華街で祥は頼まれた品を買うべく、夢生の好きなクレープを販売している屋台を探していた。森ひしめく人の群れは平日の昼間とは思えない程に多い。制服を着たままの学生が多いが、このまま教諭にでも見つければ大変な事になるまいか、と祥は思うのだが、自身も帰宅せずにそのまま繁華街に繰り出しているのだから人の事を言える義理は無かった。人込みの発する熱気と頭上から照りつける太陽熱で、少し思考が鈍ってきたようにも感じる。

夢生が無類の甘い物好きと知っている祥は、彼女と付き合い始めた頃からちよくちよく甘味類を販売している店を探し歩いていた。この繁華街も実は歩き慣れた場所である。屋台の場所も正確に把握しているので歩みに澱みは感じられなかった。

「……うん？」

不意に視界に飛び込んできた奇怪なモノに一瞬祥は眼を奪われた。初めて見る格好をしている、親子と思しき人影。一方は大人……少なくとも中学生ではないだろう、祥の身長よりもまだ頭一つ分ほど大きい長身の人物。もう一方はその腰程しかない小柄な矮躯わいくの人物。彼らが身に纏まとっている物は全身を覆い隠すような暗色系の外套と、それに付属する頭巾フードだった。

漫画の中で見える事の無かった格好をした人物を垣間見て、祥は小首を傾げた。仮装でもしているのかな？ とそこで思考を打ち切ろうとして、幼い方の人物が不意にこちらへ視線を向けてきた。

「え？」

頭巾の影に隠れた瞳は猛獣染みた輝きを宿しており、まるで怪物に睨にらまれたように祥はその場に縫い止められてしまう。足が竦む程に獰猛な眼差しを向けられ、呼気が急停止した。

意識が完全に幼い影に縫いつけられると同時に、幼い影が瞬間移動でもするかのように飛ぶように駆けて来た。

息つく暇など皆無で、刹那的に距離を殺して接近した影にそのまま鳩尾みぞおちに強烈な殴撃ブローが喰い込まれると祥の意識は暗転した……

「……おやおや、束子たばねくん、この子どうやら民間人みたいだけど……

……」
「本気マジかよ！？ えー……兄貴どうしよう……？ ……で、でもいいよな？ どうせ最後には《殲滅屋》に狩ヤられちまうんだから、今ここで死んじまっても……」

「……束子くん、私達は《殲滅屋》じゃないんだ、幾ら私達が裏方とは言え何の罪も無い人間を襲うのは……」

「あつ……じゃ、じゃあオレ、罰せられるのか……？ 嫌だつ、嫌だぞ兄貴い！」

「……？」

祥が意識を覚醒すると、視界に心地良い程の晴天が映り込む。夏

を予感させる少し熱っぽい風が通り抜け、髪がさら、と揺れるのを感じた。晴天が少し窮屈そうなのは、どこか建物と建物の間……路地にもいるせいだろうか。その視界にぴよこつと幼い女の子の顔が入り込んだ。

「あ、気が付いたみたいだぞう！ 兄貴、良かった、コイツ生きてる！」

「うん、さつきから生存は確認してたんだけどね……。大丈夫かい？ 動ける？」

「あ、えと、 はい」

視界に映り込む心配げな少女の顔から一旦視線を逸らし、身動きして 腹部に鈍痛が響いた。

「つつ……あれ、何かお腹が……？」

撫でるように臍へしの上辺りを摩つたら再び鈍い痛覚が蘇り、祥は顔を顰めた。額に脂汗が浮かび上がってくる。

痛みに堪えながら起き上がると、そこがどこなのかすぐに判った。先程までいた筈の繁華街の路地裏だった。人通りのあまり無い、夜には出来る事なら近づきたくない場所である。確か野良猫の溜まり場でもあった筈だと、祥は起き抜けの思考で想起する。饅すえたような臭いが辺りに漂い、長時間いたら気分が悪くなりそうだと感じる。頭上の晴天を裂くように配線があちこちに伸び、換気扇が回る羽虫が飛ぶような音が腹の底に響いている。

どうしてこんな場所トコロに倒れていたんだ……？ と現状を思い出そうとして、 ふと、その場にいる人物を見やった。

二人とも暗色系の外套を纏っているが、今は顔を隠していた頭巾を外し、その容姿が窺えた。

一方が上背のある、女性とも男性とも取れる中性的な、20代前半と言った若く精悍な顔立ちの人物。群青色の髪はうなじが見える程に短く切り揃えられ、一見しただけでは性別が判然としない。外套を纏っているために体型も判然とせず、何とも掴みどころの無い人物だった。祥は何故か既視感を覚えたが、どこで見たのか即座に

は思い出せなかった。

もう一方が対極のように小柄な矮躯の、ハツとするような可愛らしい顔立ちをした幼い少女。その容姿は10代にも満たないようで、小学生だとしても低学年に達しない幼さが見て取れる。色素の薄い灰色に近い髪は腰に届きそうな程の長さがある。日本人離れした整った容姿に加え、瞳は翡翠色というまるで外国の人形を連想してしまふ風貌だった。……何故か首には動物が付けるような首輪が鈍い輝きを発していた。

「まずは謝罪をと思う。本当に済まない事をした」

そう頭を下げたのは中性的な人物　声を聞くに女性のような感じだったが、

「兄貴は謝らなくてもいいつ。えっと、ごめんな？　オレが勘違いして殴っちまって」

……男だったのか、と即座に考えを改めて、慌てふためく女の子を見据えると祥は数瞬惚けた顔をしていた。　うん？　と小首を傾げて不思議そうな表情に移ろう。

「えっと……僕、キミに……殴られたの？」

「おう、そうだ。本ッ当済まねエ！　《狂徒》^{きやうと}だと思っちまってさ

……」

思わず少女に視線を定めて考えてしまふ。園児と言われても通用しそうな程に幼い女の子……外套のせいで体型は判らないでも、その身長からして祥の胸程しかないのだ。そんな女の子に殴られて、併も気絶までしてしまう……

……僕、今もしかしてメチャクチャ情けなかったりする？

ガックリと肩を落とした祥を見て少女が慌てて顔を覗き込んでくる。

「だ、大丈夫かつ？　い、痛むか？　オレ本気でやっちまったから、肋骨破損してるかも……」

……どんな力を持つてるの、この娘？

ぽかん、と女の子を見つめる祥に気づいたのか、女の子は、あうー、と視線を逸らして、へへへ、と鼻頭をポリポリ掻き、《兄貴》と呼称した方へ顔を向ける。

「兄貴、どうする……？」

「……そこで私に振るのかね。……そうだね」

《兄貴》は祥を見ると夜の海原のような瞳を眇め、意味深な微笑を浮かべる。

「私も興味深いと思っていたところだ。私達の事を話したところで、信じる信じないは相手次第だ」

「じゃあ決まりな！」

「えっと……何の話を……？」

キョトンと一人話に付いていけない祥が質問を上げると、女の子がくるつと振り向いて可愛らしい顔に真剣みを帯びて言葉を紡ぎ始めた。

「自己紹介が遅れたな。オレは《魔狗》^{ヘルハウンド}の束子^{たばね}。名字はねエから、束子^{くわい}ってそのまま呼んでくれよ。で、こっちの兄貴が」

「玖領^{くりょう}檻雅^{おりのま}だ。……あーっと、いきなり言われても混乱するかな、

《魔狗》って言われても何の事かサッパリだろうし。……まあ、かと言って説明が要るかと言われればそこまで必要性も感じないし……

……

「兄貴、ストップストップ！ また勝手に自分の世界に入るなよっ！」

幼い女の子 束子が慌てて《兄貴》 檻雅の外套の裾を引っ張り、彼の意識を現実に戻した。

檻雅はハッと我に返って祥を見やると、あはは、と微笑を刷いた。

「済まないね、私の悪い癖なんだ。ついつい人前でも没我してしまう。……まあそれはさておき、キミ、時間は大丈夫かね？」

「時間……？ あ」

はたと思い出す。夢生ちゃんのイチゴミルククレープ！

慌てて駆け出そうとする様を見て、檻雅は片眉を上げて驚いたような仕草をする。

「急用かね？」

「あ、その、彼女を待たせてるんでっ。済みません、これで失礼します！」

そう言っ腹を押さえながら走り去る様を見送り、檻雅はポツリと独白を零した。

「……彼女持ちか。とても残念だよ、少年。せめて　少しでも長く生き延びられますように」

檻雅がいる場所の更に奥まった場所にある、似たような場所に思える路地裏では、一人の少年を囲んだ三人の青年が下卑た笑みを浮かべて、少年の腹部を蹴り上げていた。人気の薄い路地裏ではその音はやけに重く響く。

「げ、ふ……ッ」

左眼を包帯で覆った少年は涎ヨダレを吐きながらその場に屈した。膝から力が抜けていき、立ち上がる事もままならない。

「おーい、蛆虫うじちゃん？　俺言わなかったっけ？　オマエ借金30万もしてんだぜ？　俺達全員にさあ」

主犯格リーダーの青年　野球帽を被った男は、ニコニコと仏のような顔をして少年の顎に蹴りを突き込む。

少年は喉を押さえて咳き込み、そのまま蹲って動かなくなる。

「何でオマエ一円も持って来てねえの？　おかしいよなあ、おかしいよねえ？　どうしたのかなあ、何で俺に逆らってんのかなア！？」

蹲る少年の頭に蹴りをブチ込み、少年の体が再び地面を転がる。痛みは生じている筈だが、最早呻き声すら上がらない。

ニコニコとした仏のような顔に青い血管を浮かび上がらせ、青年は少年の胸倉を掴み上げて引き摺り起こす。

引き摺り起こされた少年は併し恐怖も怯懦きょうだも感じさせない眼差しで青年を見据える。そこには一切の気後れも無かった。

その眼差しを睨みつけられたと勘違いした青年は気分を著しく害する。

「蛆虫ちゃん？ 何かなその眼は？ 折角片眼だけは放置しておこうと思つてたのになア。 潰しちゃう、か、な、あア！？」

青年が仏のような顔のまま拳を振り上げ 少年はその僅かな空隙を縫うと、胸倉を掴んでいた青年の腕を隠し持っていた短刀ナイフで切りつけた。

「いぎッ！？」

ぞ、と怖気が腕から全身に走り、青年は短い悲鳴を漏らし、遠ざかるように少年の顔を殴り飛ばし、顔に憎悪を孕ませる。

「て、ん、めエ……！ ンなモンで俺が引き下がると思つてんのか、おオ？ やれ！」

取り巻きの一人が持ち出したのは、少年の持つ短刀よりも長さ（リーチ）がある木刀だった。

肩でトントンと木刀で音を立てると、見せつけるようにゆっくりと振り上げ

鈍い破碎音が弾け、少年がその場に頽たふれる。

木刀で少年の頭を殴りつけた青年は引き攣くわった哄笑を上げ、主犯格の仏顔の青年へ振り返る。

仏顔の青年は苛立たしそうに頭部から出血している少年を見下ろし、はぁ、と重たい嘆息を漏らす。

「ったくよお、いいか、よく聞けよ蛆虫ちゃん？ 今も授業料で請求するからな。 そうだなあ……合計で50万つてトコか。 分かったか？ もし次持つてこなかったら、オマエん家行くから」

「……、」

少年は蹲ったまま何事かを呟き、ゆっくりと立ち上がる。

その様はまるで亡者が亡霊だった。 陽炎のように実体を伴わない、そこに少年がいるのにそれが少年ではないような、そんな印象を与える光景が青年達の前に広がっていた。

「……何だつて？ よく聞こえねえーよ、ハッキリ言えや、蛆虫ち

やん」

「……ない、……だ、……りない、……まだ……足りない……まだ、足りない……」

独り言なのかブツブツと意味が解らない事を呟き始める少年に、青年達は顔を見合わせて面倒そうに嘆息を零した。肩を竦めて残念そうに眉根を寄せる。

「壊れちまったか？ ま、いいか。どうせならここで服剥いでみるか？ そしたらもつと面白くなるんじゃないかね？」

「違えねえや！」

アハハハハ、と笑声を上げる一同だったが、不意に仏顔の青年が腕に痛みを感じて呻き声を上げた。

「どうした？」

木刀の青年が歩み寄って来て、その異常に気づいた。

先程少年が切りつけた傷。裂傷が走ったそこから 大量の蛆虫が湧いて出てきていた。

「ひっ

」

木刀の青年が驚いて悲鳴を上げると、それに気づいたもう一人の取り巻きも異常に気づき、仏顔の青年から距離を取る。

「な、何だよこれ……！？ お、おい、ざけんな、何だこれはよお！？」

仏顔の青年が腕を押さえて絶叫し始める前で、少年は構わず呟き続ける。

「……足りない、もつとだ、もつと力が在れば、まだ、足りない、もつと……」

「お、おい！ オマエ、何しやがったんだよ！？」

木刀の青年が再び木刀を振り上げて少年の頭蓋を殴った時、それは露呈された。

はら、と左眼を覆っていた眼帯が外れ、眼孔から大量の蛆虫が噴出した。

ぼとぼと、と音がしそうな量の量の蛆虫が地面に落ち、少年の周

囲だけに白い湖が出来上がる。まるで少年の眼孔が源泉とでも言わんばかりに無尽蔵に蛆虫が湧き、地面を白く染め上げていく。

「ば、化物か……ッ!？」

一見して分かる程に怯え始める青年達に対し、少年は構わず呪文のように同じ単語を吐き続ける。

そう、まるで魔女が呪文を詠唱し続けるみたいに延々と同じ単語を吐き続ける。

「足りない、もっとだ、力が在れば、もっと、まだ足りない、足りない、力が在れば、まだ、もっと、足りない、もっと、力が在れば、まだ足りない」

不気味な詠唱を唱え続ける少年に青年達が怯えて腰を抜かす中、それは発現した。

午後一時になろうという頃、全てを破壊せんばかりの大地震が挟峰の町を襲った。

この大地震こそが挟峰の人間が気づけた最初の異変だったのだが、これより《地獄》が始まるなどと誰も予想すらできなかった。

参章 / 〈地獄〉

挟峰^{はさみね}を突如として襲った大地震はとても立っていられるような震度ではなかった。

祥^{さち}は屋台に辿り着く前に地震に襲われ、転がるようにその場に倒れた。あちこちで硝子の破碎する音や建物が倒壊する音が鳴り響き、すぐに動ける状態ではなかった。

視界がブレ、自身を中心に世界が壊れるような錯覚が生じ、そこを動かないようにする事だけで精一杯だった。悲鳴も混じり始め、視線を地面から上げられない。阿鼻叫喚が響き渡り、祥は耳を塞いで蹲^{うすくま}りたかったが、手で体を支えていたためそれは叶わぬ夢となった。

どれ程の時間揺れていたのか祥には分からなかった。たった数秒の事のようにも思えるし、何十分も続いたようにも思える。時間の感覚が麻痺し、気づいた時には辺り一面瓦礫の山が広がっていた。余震は無く、まるで大地が激怒したような一時的な地震だったらしく、一瞬にして辺りが沈黙に覆われた。阿鼻叫喚の世界が嘘だったように、深、と静まり返る。

恐る恐る祥は立ち上がり、辺りに眼を向けた。

建物はまだ残っている物も多かったが、殆ど 否、ほぼ全ての建造物に亀裂が走り、いつ倒壊してもおかしくない状態だった。地面にも亀裂が走り、道が分断されてしまっていた。建物の一部が倒壊した残骸だろう、岩のような大きさのコンクリート片が路上にゴロリと転がっているのも見えた。

あまりに凄惨な状況を目の当たりにして、祥は咄嗟に夢生^{むい}の事を想起する。彼女は無事だろうか？ 彼女が今どこにいるのか、そして無事でいるのか気が掛かり、すぐに制服のポケットから携帯電話を取り出し連絡を取ろうとした。

震災に見舞われた時、一時的に携帯電話などが繋がりに難くなる事

は承知の上で、アドレス帳の中から《夢生ちゃん》を見つけて、掛ける

ブツ、とまるで通話が切れるような音がした後、何の音も聞こえなくなった。

訝って携帯電話の液晶画面を見ると、

「……圏外？」

アンテナが一本も立っていないかった。先程　ほんのついさっきだ、夢生に電話を掛けようとしたその時まで確かにアンテナは全て立っていた。なのに、……どうして？

訳も分からず、どこかアンテナの立つ場所を探そうとして、悲鳴が^{した}耳朵を打った。

誰かが何かの下敷きになったのかと思って周囲を見回し　異常に、気づいた。

周囲にいた人間も徐々に悲鳴を聴いて周囲を見回し始め、そのあまりに怖気を走らせる光景に気づき始めた。

それは初め、鉄筋の一部、或いは壁の一部が剥がれたモノかと思われた。だが、違った。

ビルに走った亀裂から、ボタボタと音がしそうな程に湧いて出てくるそれ　それだけで人を覆い尽くせる程の量の、^{うじ}蛆、だった。

ビルだけではない。亀裂という亀裂……祥の立っている場所から見える全ての亀裂から白い蛆虫が溢れ出て、アスファルトを白く染め上げていく。

思わず吐き気を催す光景に祥は口許に手を当てて後退り、　見てしまった。

それは道路を分断した、亀裂。地面のまだ下　底には、泉のように蛆虫が溢れていた。

「　　ッッ」

あまりの狂景に祥はその場に頽^{おすく}れ、本能のままに吐瀉した。胃からせり上がってくるのは今朝に納めた食パンや腸詰^{ソーセージ}の残骸だった。

体が痙攣^{ケイレン}して、動こうという意志が全く湧かない。

蹲^かった視界の隅で地面の地下が映り込む。源泉のように蛆虫の嵩^{かさ}が増している事に気づき、更に胃が縮み上がる。

右眼が、疼く。

吐き気が酷くなるのも構わず、右眼だけは独立した生物のように蠢^蠢き、右眼だけ、左眼とは別の映像を映し出した。

右眼が映し出した映像は先程眼を覚ました路地裏と似ている別の場所と、数名の人間。祥と同年代くらいと思しき少年が一人と、大学生と思しき青年達が三人。少年が短刀を握って肩を震わせていた。青年達は皆体のあちこちから蛆虫を噴き出して、倒れて動かない。

『奴を殺せば、この狂状は一先ず落ち着く』

脳髓にのみ響く、声無き声。

祥は何が起こっているのか理解が追いつかず、胃の中身を全て吐き散らした後に時間を掛けて立ち上がった。左眼が映す世界は地面の底から徐々に湧き出す蛆を捉えている。

「夢生ちゃんを、助けなきゃ……！」

確かめるように独りごち、祥は歩き出した。目指す場所は 嘔
水広場。

そう思つて足を向けようとして、絶望が鎌首^{もた}を擡^{もた}げた。

「道が……」

儚い希望を断ち切るように道路が引き裂かれ、その間に蛆の海が広がっている。走り幅跳びの選手でさえ越えられそうに無い距離が、蛆の海として広がっていた。

『一先ず奴を殺せ、小僧。然も無くば貴様も蛆に吞まれるぞ』

「一体誰なんだ、キミは！？ どこから話し掛けてるんだ！？」

頭に響く声だけの存在に問いを発するが、嘔^{しわが}れた声は構わず先を続ける。

『惑つてる暇は無い。生き残りたくば、私にその体の主導権を譲るか、奴らを殺し尽くせ』

「何の事だよ！？ サッパリ訳が分からないよ！ ……う、ぐ」

まだ吐き足りないのか、再び膝を突いて胸を押さえる祥だったが、

『貴様が惑えば惑うだけ、貴様の女の身が危険に曝されるだけだぞ』

「……………どういう、意味……………？」

吐瀉する姿勢のまま祥はひり上がる喉を震わせて、嘎れた声に言葉を返す。

『貴様には、現状を打破する力が在る。……………私の力を貸そう。ここで貴様に死んで貰っては困るのだ。貴様には這ってでも生き延びて貰わねばならん』

「現状を……………打破？　これがどうにかなるの！？」

脳髓に響く声の言葉は絶対に実現不可能と、祥でも分かる嘘だった。

だが、このあまりにも常軌を逸した光景を目の当たりにして、祥の思考も正気ではなくなってきた。

頭の声……………この際神でも悪魔でも構わない、それが現状を変革せしめる力を持っているのなら、惑うよりもまず縋るべきだと祥は咄嗟に判断を下した。

『貴様の働き次第だ、小僧』

そう返してくる脳髓に浸透する声は幾分かの冷笑を湛えていたが、祥にはそれが相応の自信がある事の裏返しにも思えた。

どうにかしなければならぬ。何より今も自身を待っているだろう彼女のために。

祥は生唾を嚥下し、屹然と立ち上がる。まだ胸が重く、喉がひり付いて痛かったが構っていらなかった。左眼には微かに涙が滲んでいたが、それでも祥は震える体を押して歩き出す。

「どうすればいい？　時間が無いんだろう？」

く、と短い憫笑が聞こえたと思うと、声が頭の奥で響いた。

『なに、至極明瞭だ。この《地獄》を現界した《狂徒^{きやうとこ}》を、殺せ』

女が向かった先は挟峰の山手にある高台だった。隣の市と分け隔てる山の中腹にある人気の絶えた展望台で女は一人、散策を続けている。人氣が無いのは単に平日の昼間だという事もあるが、それとは別にとある人物が人払いを済ませたからでもあった。展望台と言っただけで物が置いてある訳ではなく、見晴らしのいい光景が眺められるだけの場所ではないため、ここはあまり人が寄りつかないものである。

女の後を隠れて追う姿が在った。先程伸された男が集めた、野蛮そうな男達の集団だった。その数は倍以上に膨れ上がり、十人近くの男達が女に見つからないように追跡していた。女に気づいた様子は無く、振り向く事も走って逃げる事も無い。彼らが先回りするように人払いを済ませたのだが、そうするまでも無く始めから人は殆どいなかった。無人の展望台には女と、そして十人近くの男達しかない。

男達は自身の隠密行動がバレていない事にほくそ笑み、人氣が無くなった今、ゆっくりと二人の男が後ろから近づいて行く。その手にはこの場にはそぐわないような物 金属バットが確しかりと握られている。若干あちこちが凹んでいるのは今までにもこういう事があった事を示していた。

主犯格の男がやれ、と短く命令を飛ばした、その瞬間だった。
地震。

とても立っていられる状態ではなくなり、男達は地面に縫いつけられたように動けなくなり、奇襲は失敗に終わったように思えた。そうしてどれ程の間、揺れていたのだろう。気づくと周囲から音が消え去り、震動が納まっていた。

周囲では地割れや土砂崩れが起こったようだが、幸い怪我人は一人もいなかった。皆が無事を確認し合い、全員が無傷だった事を知ると、女に眼が向かった。

当然のように無傷で立っている女が背を向けていた。女の視線の先には、崩れた町の姿が映り込んでいた。展望台から望める挟

峰の町は、一瞬にして荒廃した様相を表した。怪獣が暴れ去った後、
と言うような感想を懐ける光景だ。

「……………今だ、やれ！」

茫然としている女が隙だらけだと悟ったリーダーが叫ぶと、金属
バットの二人組みが駆け出し、女の頭蓋を^か搗ち割らんと殴りつ
ける。

ばぎんツ、と鈍い破砕音が響き、一撃で頭蓋を割った事を二人の
男は確信した。

これでもう女に意識はあるまい。男達はそう認識を統一した、の、
だが。

女は躓^{つまず}いただけで、倒れなかった。

だがまあ、石頭なのだとしたら有り得ない話ではない。男達は別
段異変は感じなかった。何より一撃でも頭にバットを叩きつけたの
だ、最早^{マトモ}普通には動けまい。そう認識を改め、もう一方もバットを
振るう。今度は足を狙って叩き下ろす。

ばぎんツ、と今度は確実に足の骨が折れた音が響き、集団の一部
から口笛が流れる。

もう逃げられない。後は男達の欲望のままに

ごおーん……………

と、不意に奏でられる、胸に重く響く音。

一瞬彼らには何の音か認識できなかった。あまりに場違いな音に
認識が遅れる。

ごおーん……………

その内男達も気づき始める。腹の底に重たく響くその音は、
鐘の音だ。同時にその音源が女の許だという事にも。

ごおーん……………

男達が無言で見守る中、女が折れた足を無視して立ったまま、紅
い丈長のコートの裏地に手を伸ばす。

「……………あーあー、オマエらバカだなア。わざわざ喰われに来やがっ
てよオ」

眩きながらゆつくりと裏地から取り出したのは、
黒一色で統一された携帯電話。

「ごーん……」

音源は、それだった。携帯電話の着信音が、先程から腹の底に響き渡っている鐘の音だった。

ぴつ、という電子音で鐘の音が断ち切られ、携帯電話を耳に近づける女。

男達は黙って見ているしかなかった。否、あまりに異常な光景に誰も口が利ける状態ではなかった。

「おりまさ 檻雅か。……ああ、やっぱりなア。今回ばかりは待たなくてもいいぜ？ 何せ もう《檻》の中だ」

ぴ、と通話を切断した女は、携帯電話をコートの裏地に仕舞い込むと、背中に吊った巨大な大鉈へと指を這わせる。

「でもオマエら良かったなア。何せ この《地獄》で一番に昇天できるんだからよオ」

男達は女から一秒たりとも視線を逸らせなかった。

先刻からその異変には気づいていた。だが誰も口に出せなかった。誰もがその現象を理解できなかったのである。

女の折れた足は、再生していた。

ボギゴキと骨が唸る音が響き、あつと言う間に元通りになってしまった。既に何の外傷も無い綺麗なおみ足が、はためくコート

の下から見えている。

金属バットを握っていた男の一人が怖気に駆られ、再び女にバットを振り被る。それは未知なる存在モノに対する恐怖だったのかも知れない。怖さのあまり、そこには相手の死さえ厭わない意志が表出していた。喚声を上げて、女の顔面にバットを叩きつけ

だが、その金属バットが女を殴りつける事は永遠に無くなった。

何の音も無かった。

気づくと女が大鉈を振り下ろし、遅れる間もなく男が体を縦

に両断され、赤い飛沫が切断面から噴き出すのが見えた。

「ばしゃッ、と左右に別れて地面に倒れた肉塊の奥に立つ女は獣染みた薄笑いを浮かべ、大銃を肩に載せて男達を睥睨する。

「ほらほら、どした？ 来ねェんなら、 オイラからそっちに行つてやるうか？」

「 ツッ！？」

戦慄が電流のように男達を走り抜ける。

あまりに凄惨な光景が眼前で展開され、男達は一様に正気を失っていた。現実とは思えない非日常の具現に事態を把握する余裕すら削られていく。

男達は銘々に悲鳴を上げ、展望台から尻尾を巻くように逃げ出していく。その内金属バットを持つていたもう一人の男が、狂気の具現があまりに近過ぎたために腰を抜かし、あわあわと口許を引き攣らせて動けなくなつた。

その様子を眺めて女は、はァー、と心底辟易したような嘆息を零し、大銃をその場に突き刺して置くと、紅いコート裏地の裏地から、

二挺の拳銃を抜き出した。

拳銃という種類には違いないのだが、あまりに大きかった。女が辛うじて握れる程の太さを誇る銃把に、砲口と形容しても差し支えないだろう巨大な銃口、同じく砲身を連想するような長さを有する銃身と、全てに於いて巨大な代物だった。

小型の大砲と見紛うばかりの鈍色の拳銃を両手に握り締め、女はペロリと唇を舐める。

「そ、そりゃあ……？」

間近で腰を抜かしている男が発した声を聞き取った女は、可愛く小首を傾げる。

「オマエ知らねェの、これ？ これな、拳銃つ言つてよ、こつやつてエー」

引鉄が絞られ、^{トリガー} 獣の咆哮とでも言うような銃声が迸り、逃げ惑う男の頭蓋を吹っ飛ばした。

風穴が穿たれる、という次元^{レベル}ではない。完全な破壊　首から先がごっそりと消失し、男の体はそのまま前のめりに突っ伏す。生きているか否かなど愚問も甚だしかった。頭部で無くとも、穿たれれば一撃で生命の終焉を迎えるだろう。

「みてエに、鉛の弾アブツ放す代物なんだぜ？　オマエ良かったなア、最後にイイ事知ったな！」

心底楽しそうに告げる女に正気などある筈が無かった。狂気の沙汰とか、そんな次元でもない。彼女は嬉々として殺人を行う、人の形を模した怪物

「っと、サツサとこの《鹿狩り》済ませとくか。後から捜し出すの面倒臭エし」

始まった殺戮劇は、虐殺と呼ぶに相応しい一方的な狩猟だった。

小型の大砲のような拳銃が咆哮を猛らせ、確実に男達を喰らって屠っていく。

十人もいた男達は30秒も経つ前に悉く肉塊^{にくくわい}と化し、動かぬ骸として辺りを内臓と共に濃い紅で彩る。

紅い湖を創った女はと言えば、最後まで撃たれる事が無かった、金属バットを握り締めた男を見下ろし、無邪気に笑み掛ける。

「で、オマエはどうなんだア？　掛かって来るならぶった斬るし、逃げるんならブツ飛ばすし。サツサと決めるよ？　オイラこう見えて予定ビッチリ詰まってるんだからなア」

「……は、はは、はははは」

男は放心状態の顔で涎を垂れながら笑い掛ける。　既に正気な

ど、微塵も残されていなかった。

「何だこれえ？　有り得ねえよ、絶対有り得」

声が体ごと両断され、男は縦に別れて血の海に沈んだ。

塵のようなそれらを見晴らして、女は再び町を一望できる展望台の縁へと移動した。

荒廃した……瓦礫で埋もれる町を眺めて、女は、にい、と三日月

型に歪んだ笑みを口許に刷いた。心底からの笑みだと分かるくらい、体が小刻みに震えている。

「ひやあーは、は、は。……今回はどれ位の遊技場アリーナなんだろうなア、広けりやいいなア、遊び尽くすのが長くなりそうだけどオ」

呵呵と笑声を上げ、女は屠殺場と化した展望台を後にする。

その顔には残虐を尽くす悪魔めいた笑みが宿っていた。

通話を切り、外套の中に携帯電話を戻した。

「……《殲滅屋せんめつや》はどうやら既に入獄を果たしているようだよ。私達も急がないとね」

「ええ！？ え、で、今回は誰なんだよ、担当の《殲滅屋》は？」

「勿論、狛子りょうこくんだよ」

「えー、また狛子かよオ？ アイツの事あんま好きじゃねエんだよなー」

後頭部に手を回して愚痴り出す束子たばねに、檻雅は柔らかな微笑を返す。

「《殲滅屋》に人格を要求するのはお門違いさ。彼らはそれを生業としているのだから」

「……でもよオ、狛子みたいになっちまったらもう終わっちまったも同然だろオ？ あんなの、生きた人間が出来る所業モンじゃねエぜ。

……オレが言うのも何だけどよ、ありゃ《狂徒》以上の化物だぜ」

怖い顔をする束子に檻雅は若干苦笑の度合いを増した微笑を滲ませて、すぐに真顔に戻す。その視線の先は既に束子ではなく崩壊し掛けた路地裏の道を射抜いている。

「お喋りはここまでにして、主目的メインの《歪ひずみ》探しを始めよう。《檻》は狂気に合わせて市全体を囲ったし、そうだね……《歪》探しの前に、この《地獄》を形成した《狂徒》を叩くべきかな」

檻雅の視界に映る《地獄》 亀裂という亀裂に蛆が湧いているこの光景を見て、内心心穏やかでいられる訳が無かった。先程の場所から動いていなかったが、あまりの変貌ぶりに慣れているとは言

え気分が良くなる訳ではない。

束子もそれには同調するらしく、すぐに自慢の鼻を動かす。すんと犬のように匂いを嗅ぎ始め、すぐに不快気に顔を顰めた。「うえ、無理だ兄貴、この辺一帯蛆の臭気が濃過ぎてちつと匂いじや追えねエ……」

「参ったね、キミの鼻を頼りにしていたんだが……。……あまり得意ではないが、《間術》まじゅつを使わねばなら……」

檻雅が瞼を下ろして精神を集中させようとした、その瞬間。檻雅の視界に路地裏を横切る影が見えた。それも見覚えのある少年。先程束子が気絶させた少年だった。

始めは何かから逃げているのだろーかと思った檻雅だったが、少年の手に握り込まれている品を見て考えを改めざるを得なかった。

一見してそれは刀剣。刀身が反った形の湾刀のように見えた。のいざつ鋸染みた刃毀れをした、まるで拷問器具のような刃を一メートル前後の反った刀身に付けた湾刀を携え、少年が駆けて行く。

一瞬映ったその姿を見て檻雅は冷たく瞳を眇め、更に一瞬の沈思を加え思考を纏める。思考と結論の早さは迅速な行動に繋がる。《檻飼い》おりかとして何度も言い聞かされてきた事だった。

「束子くん、彼を追うぞ」

「へ？ って、さっきオレが勘違いしたアイツを？」

キョトンとする束子に意味深な微笑を返すと、檻雅はもう振り返る事無く駆け出す。

束子は檻雅の思考を理解する間も無く、置いて行かれると思って慌てて後を追いはじめた。

先程逢った時から彼には違和を感じていたのだが、どうやら勘違いではなかったと檻雅は既に確信していた。それは同時に、信頼のおける束子の鼻が間違っていないかった事の証明にもなる。

（……あの武装は《狂徒》の《顕界能力》けんかいに非常に酷似している……それとも彼は狂気を隠せる《狂徒》なのか……？）

疑問が疑問を塗り替え、檻雅は再び思考の坩堝るつぼに嵌まり掛けたが、

それも直に止む。

少年を追って亀裂から蛆が湧き出す路地を抜けた先 そこには、

「……これは、」

地獄化が爆発的に進行しつつある現状を鑑みれば、現状がどれ程異質であつてもそれは狂気を帯びて変質したモノだからとすぐに分かる。そして今檻雅が見つけた光景も、それに付属するであろう狂状だつた。

肆章 / 〈狂徒〉

……………ご、ぼ……………

声に導かれるまま、先程右眼に映り込んだ映像の場所　先刻とは別の路地裏の一角へ辿り着いた祥は、さちその惨状を見て再び嘔吐感に襲われた。

腐臭　肉や卵が腐ったような臭いが立ち込めており、且つ地面には白い湖のように蛆うじが湧いていた。真っ白な湖の上には島のように人の体が蹲つづくまって、まだ動いていた。

……………ごぼ……………

顔だけが僅かに湖面に浮かび上がったまま、口の中から、眼球の裏側から蛆が湧いて、その度に水槽に空気が入るような、肉の内側から空気が抜ける音が漏れ出ている。

併も最悪な事にその人間はまだ生きているようで、口から蛆を嘔き出しながらも必死に伝えようとしている。微かに口が動いて、言葉を無声で伝えてくる。

……………ご、ぼ……………

『タスケテ』と。

「ッッ」

既に助かる見込みが無い事は明白だった。そもそも体が見つからない。この白い湖の底がどうなっているのか判らないが、頭だけ覗かせている人間の頭部の角度からして、体はアスファルトよりも下にあるのは間違いない。……………併し穴が開いていない限り、あの首の下は……………

……………ごぼ……………

「刻木、くん……………」

え？　不意に名前を呼ばれて顔を向けると、そこには虚ろな顔をした少年が佇んでいた。

一瞬誰か分からなかった。左眼から蛆が溢れ出し顔の半分を白く

覆っていたが、それでもその顔の作りと制服が同じ高校の物だと気づき、やっと祥はその人物を思い出せた。

「葦崎くん……？」

葦崎と呼ばれた少年は、確かに祥と同じ学校に通う、クラスメイトだ。その姿はここ最近見掛けなかった。噂で卒業生から暴行を受けて入院しているという話を耳に挟んだ程度だ。

病的なまでに白い肌にはあちこちに亀裂が走り、その間隙から湧き出す蛆の白い体で、その体は真っ白く塗り潰されていた。

「どうして、葦崎くんがここに……？」

躊躇ちゅうちうが生まれ、歪な形をした刀を手にしたままその場に足を縫いつけられてしまう。

対する葦崎は祥を見てゆっくり驚きを消し去り、冷然とした空気を戻し始める。

「刻木くんも、力を手に入れたんだ……？」

「力……？ あ、」

不意に思い出して禍々しい刀身を懐く湾刀を持て余すが、葦崎は構わず言を継げる。

「俺も、やっと奴らに抗える力を手にしたんだ……俺でも世界を変えられると証明できたんだ……！ 見てみなよ、この世界の在り様を。俺が、変えたんだ」

陶醉するように葦崎は肩を震わせて呟き続ける。その顔には酒気染みた赤さが混じり始め、興奮している様がよく判る。その視線の先 人の頭部が浮かぶ白濁した湖では、未だに懇願する音が囁かれていた。

………う、………ぼ

「………やっぱり、これは、………キミが………？」

祥は心底無念そうな表情を浮かべ、沈痛な声を質問に載せ、唇を噛み締めた。

ゆっくりと澱んだ隻眼を持ち上げ、禍々しい色に染まる右眼で祥を捉える。

「そう、ここは俺の世界だ。俺の存在を否定する奴らを全て 消し尽くす、この力で」

「否定……？」

誰が葦崎の存在を否定したの？ そう訊こうと口を開いた刹那だった。

葦崎の瞳に熱っぽい、だが同時に酷く醒めた光が点るのが判った。「皆否定しているじゃないか、俺の存在を、悉く。誰かが気に掛けてくれたか？ 誰かが手を差し伸べてくれたか？ 誰かが俺を助けようと働き掛けたか？」

引き攣った笑みを浮かべて告げるそれは、酷く痛ましげな独白だった。

イジメをなまじ目の当たりにした事がある祥に、その言葉は重く感じられた。

彼ら 苛められっ子はいつだって周囲に助けを求めている。誰かが手を差し伸べて苛めっ子を追い払ってくれるのを、絶望が半分以上確定した希望を懷いて、それでも尚待っているのだ。

別に周囲の人間は苛められている人を否定している訳でも無視している訳でもない。……確かにそういう人間も少なくないだろうが、進んでイジメの現場に首を突っ込みたがる人間がいないだけ。

それが苛められている側にはそういう風には映らないと言うのも仕方ない事だった。

「俺は、俺を否定した人間を許さない。俺の居場所を確定するには、否定する人間を全て駆逐しなければならんだ」

「……」祥は、無言。

分かっている。彼をここまで追い込んだのは、周囲の人間及び祥自身だ。

自惚れだとは分かっている、こうなる前に彼の異常に気づいてあげられたならと思わずにいられない。なまじ正気だった頃の彼を知っている分、その想いは強い。まさかあの時からこんな思想を懷いていたとは思えないし、仮にそうだとしたら……そんな思想に追

い込んだ周囲の環境及び自身が、憎らしい。

だがそんな狂れた思考に陥って尚、自身は正気だと言わんばかりの微笑を浮かべる葦崎は痛ましい位に気丈だった。

「それは、キミとて同じだよ、刻木くん。ここで、朽ちろ」

短刀ナイフを出鱈目デタラメに振り回して駆け寄ってくる葦崎に、祥は血を吐くような顔をして、奥歯を力の限り噛み締め、湾刀を振り抜く。

理解できない訳じゃない。ただ、祥は理解を諦めた。放棄した。

苛められて、迫害されて、追い詰められて、思考が狂れたのだとしても、それは理解してはならないと、祥は本能で感じてしまった。どんな思想に走ったのだとしても、人を殺していい理由にはならない。世界を狂わせていい理由には、絶対ならない。

だから祥は

「ぐ、う」

一撃で葬り去る事を、決めた。

左の肩から斬り込み、右の腰へと抜ける袈裟懸けをしてのけた祥は、その時やつと自身がやった事を自覚した。

僕、今、人を殺し

刹那にして全身に恐怖が蠢き始め、

「……これは、」

第三者の声に、全身が震えた。

向いてはならないと脳髓が命令を下していると言うのに、ゆっくりと人形染みた動きで首が回り、背後に立つ人物を瞳が捉えてしま

う。

「……………あ？」

路地裏の角から現れた影は 先程見た暗色系の外套を纏った男と少女。

見られてはならない民間人の姿がそこにあった。視界に納めた瞬間脳が急速に思考を閉ざしていくのが分かった。人殺しを見られた。それだけで充分人生は終わったと言えた。

だが、

「……間違い無く、《狂徒》^{きやうと} だな。兄貴、《檻》^{ハス}を一個、解除してくれ」

少女 束子^{たばね}が醒めた声で呟き、分かった、と応じる檻雅^{おりまさ}が彼女の首輪に触れた瞬間、祥は自身の眼がいよいよ信じられなくなった。ばちゃ、と水の入った袋が破碎するような音が弾けたと思った時には、束子の姿は視界から消えていた。因みに音源は祥の背後。振り返ると、そこに葦崎の姿は無く、壁面一杯に広がる白い蛆の屍骸が映り込む。

そして、それが何であるかも、理解してしまう。

吐き気を催す真っ白な壁面から視線を逸らすと、猥染みた仕草で檻雅の許へと歩み寄って来る束子の姿が見えた。手には、ベツタリと白い蛆の屍骸が付着している。

「……っ」

どこにも葦崎はいない。先程まで湖に浮かんでいた首も、もうそこには無かった。今まで活発に動き続けていた蛆も、今では見る間に精力を失い、屍骸ばかりがそこに広がっていた。

一つの世界^{いのち}が終わったのだと、祥は理性ではなく本能で感じ取っていた。

「で、オマエは何者なんだ？」

突如として眼前に幼い顔が聳^{そび}えた。

祥が思わず湾刀を振り抜こうとして、
てしまう。
鳩尾^{みぞおち}に一撃拳を喰らっ

明らかに性能^{スペック}が違い過ぎた。動きがまるで別物。祥は宣伝用紙が無造作に貼られた壁に背中から激突し、意識が前方に投げ出されるような衝撃を受けると、蛆の湖^{ひこみず}に跪いた。倒れる事無く膝を突くだけで耐えられたのは、奇跡と言えた。

ただ跪くだけでとても動ける状態ではなかった。意識が中々肉体に戻ってこない。まるで幽体離脱でもしたみたいに、意識が白熱する。体が自分のモノじゃないみたいに動こうとする意志が霧散していく。

再び眼前に幼い美顔が聳えた。

「……人間か？」

恐怖が臓腑を締め上げ、吐き気すら超越する得体の知れない感情が胸の底より湧き出し、咄嗟に手が、動いた。

繰り出した斬撃は通らず、直前に束子の手が動き、湾刀の刃を片手で握り取る。

『此奴、』

ふと脳髓に声が響いたが、すぐに止んでしまう。

幼い顔の背後から伸びてきた手が祥の右眼の瞼に触れ、そのまま閉ざされる。

すぎ、と右眼に激痛が走り、祥は呻きながらその場に崩れた。

「が、アあ、ああああああ

アツツ！！」

「……何を封じているのかまでは分からないけど、一応《檻》で囲わせてもらうよ。……どうやら、右眼の異能らしいね、その力は」
女性のような声　檻雅が呟いたのと祥の手に納まっていた刀の感触が消えるのは同時だった。右眼が焼けるような痛みを発していたために、祥は殆ど聞く耳を持たず、呻きと喘ぎで声は届いていなかった。

やがて激痛が落ち着く頃、祥は顔をゆっくりと持ち上げた。

憔悴しきった、一気に老成したような面で檻雅を見つめる。右眼の視力が一切失われ、世界が平面化したように映る。

「僕、は……？」

何を質問しているのか分からない。あるのは惑いと怯え、そして怖気。それらで口が塞がれて、喉から幾ら声を絞っても音になる事は無かった。

体を震わせている祥を見つめ、檻雅は小さく吐息を漏らし、醒めた微笑を浮かべた。

「……ようこそ、
《地獄》へ」

伍章 / 〈層鬼〉

《地獄》。

それは人の狂気が具現化した世界の総称。《檻飼い》が困うべき異界。《殲滅屋》が滅ぼすべき異次元。

《地獄》が形成される原因は一つ。《歪》の悪化　つまり《司狂》の出現である。

《司狂》とは《狂皇》の力　狂気を具現化する力、即ち《顕界能力》を懐くと同時に《顕界能力》を近辺に撒布する状態になった者を差す。狂気の源　《顕界能力》が蔓延した世界の事を《地獄》と呼称する。

地獄化した世界で《顕界能力》を意図せずとも懐いてしまった者は《狂徒》と分類され、彼らは《司狂》程ではないにしろ自身の願望を具象化する力を使役する事が出来るようになる。

《歪》を《檻》で囲わない限り狂気　《顕界能力》の跋扈は留まらない。《歪》がある限り世界の地獄化は確実に進行する。地獄化に際限は無く、《歪》が《檻》で囲われるか或いは《間術》で修正して初めて地獄化が止まり、《狂徒》の《顕界能力》も効力を失う。その地獄化を喰い止めるのが、《檻飼い》と呼ばれる特殊な人間である。

《檻飼い》は眼に見えぬ《檻》を身に宿し、自在にそれを具現化する事が出来る。その不可視の《檻》によって《地獄》の源……狂気を囲い、地獄化の拡大を防ぐ事が出来る。古来より世界の地獄化を未然に防いできたのは、偏に《檻飼い》と彼らを支援してきた現在では決して表には出てこない組織　【境会】があったためである。《檻飼い》を率いる【境会】は常に世界の《歪》　《狂皇》が現出し得る場所を特定し、そこへ《檻飼い》を派遣し《歪》と呼ばれる特殊な孔を《檻》で囲う……それにより未然に《司狂》の発生を防ぎ、世界の秩序と安寧を護り続けている。

だが、時に《司狂》が生まれ世界の地獄化が進行を始めてしまうと、《檻飼い》だけでは太刀打ちできない。彼らはあくまで《歪》を《檻》で囲うのが本業であり、《司狂》や《狂徒》と争えるだけの力を持たない。そんな時《檻飼い》とは別の特殊な人間が《地獄》に赴く。

《司狂》及び《狂徒》の他にも一般市民などの《地獄》に存在し得る全てを滅尽^{めっしん}する、撲滅を主とした殺戮を専門に行う人間 《殲滅屋》。

全てを破壊、蹂躪^{じゅうりつ}、崩落、殺戮し尽くすという殲滅の専門職者……故に《殲滅屋》と呼ばれているのだが、彼らは時に《忘却屋》、《掃除屋》、《浄罪屋》などとも呼称される。何故か。……一度《殲滅屋》が繰り出されると《地獄》だった場所には何も残らないからである。草の根一つ残さず完全に全てを消失し尽くすために、仮に町が丸々《地獄》と化していたなら町が地図上から消え失せる……それ故付いた諱名^{こト}が《殲滅屋》。

一度地獄化を始めた地では、《司狂》だけでなくその場に居合わせた全てを殺す必要がある。

一度《檻飼い》の扱う特殊な《檻》に囲われると、《檻》の外の人間は《檻》の中の全ての存在^{モノ}を記憶から忘却する。結果《檻》の中は完全に忘れられた地となる。記憶を消されるのではなく、《檻》の中を理解及び知覚できなくなるのである。ならば記憶から消失した存在が出現すればどうなるか。……記憶に混乱が発生し、再びそこに《歪》ができ易い環境が出来上がってしまう。

そのために日夜《檻飼い》は《狂皇》が現界するとされる《歪》を探して各地を回っている訳である。

「……つまりオマエは、この町に既に《檻飼い》が来ていると、そう言いたいのか？」

祥^{さち}と同じ高校の制服を身に纏った少年が、学校の屋上の縁に腰掛けて、空中へと声を投げる。

少年の声に相對するのは、
宙に立ち尽くす大蛇染みた面の男
の冷やかな声。

「此度の《司狂》は理解が早くて助かる」

「……だとしたら、オマエは何者なんだ？」

続け様に放たれる質問に、学者然とした男は悠然と腕を広げて応
じる。

「私の俗称は《檻破り》おりやぶ 過去に《檻》を破った元《司狂》だ。

偶然にも《歪》を探している途中にこの忌々しい《檻》に囲われて
な。興味本位に此度の《司狂》がどんな輩か見に來ただけだ」

……つまりは過去に《檻飼い》を殺した、という事が……？

灰色の膜を張ったような太陽を背に、学者然とした趣を感じさせ
る、どこか爬虫類 蛇染みた相貌を持つ男は、少年よりも僅かに
上の高みから下界を見下ろすように三白眼を眇めている。……異常
性は認めるが本当にそれだけの事をやれたのか、その辺には疑問を
禁じ得なかった。

少年は屋上の縁に座り込んだ姿勢で片膝を曲げ、膝の皿の上に片
腕を置き、宙に立つ男を見やり、問いを続ける。

「……オマエは俺に力を貸すのか、否か。……どうなんだ？」

くっ、と陰鬱な冷笑を吐き、男 《檻破り》は醒めた表情のま
ま、凶悪さだけを表面に滲ませる。

「厭に挑戦的だな？ 断ればどうするつもりだ、《司狂》よ。この
《檻破り》の私を滅ぼし尽くす力を、貴様が備えているとでも？」

「断るなら好きにすればいい。俺は何もオマエを頼るつもりは更々
無い」

吐き捨てるように告げる《司狂》の少年に、《檻破り》は侮蔑を
込めた冷笑を滲ませると即座に表情を切り替えて、感情の乏しい能
面のような顔に戻る。

「《顕界能力》を得た貴様が私に何を望む？ 更なる力か？ 飽く
無き願望か？ 果て無き欲か？ それとも、」

「どれも興味深いが、それは後回しだ」

少年は立ち上がると、屋上を埋め尽くす焼死体を振り返る。全てが限界まで殴り続けられ、果てに力尽き、生きたまま焼かれる地獄の苦痛を満面に受けた、人の成れの果ての群れである。

学校にも亀裂が入っていたが、そこには既に蛆虫の姿は無い。一人分の狂気が消えた少年が感知したと同時に蛆虫もあつと言う間に消滅していった。

「ほう？ では貴様は一体何を希う？^{こいねが}」

「……今話を聞くに、俺が源泉の《地獄》には既に《檻》が張られているんだろう。《檻》の中には《檻飼い》と、喚^よんでいれば《殲滅屋》もいるだろう。《殲滅屋》が殺戮を主とする殺人狂なら、俺としても興味深いが今回は辞退^{パス}だ。最善を尽くすとなれば《檻飼い》を単騎狙い。この際《殲滅屋》は放っておくとして、この《檻》を出るためには《檻飼い》を殺す他無いんだろう？ ……《檻》から出られる方法をオマエが俺に教授してくれるのなら、話は別だな」

台本でも読むかのように朗々と詠まれる声がそこまで紡がれると一旦濁った黒瞳を眇め、男 《檻破り》に振り返る。

「……在るのなら知恵を寄越せ。然も無くば力を貸せ。それ以外にオマエに興味は無い、 《檻破り》」

厳然と吐かれた言霊の強さに、《檻破り》の冷笑 酷薄とした笑顔が歪み、理知的な顔に極寒の彩りが刷かれた。

「……く、此度の《司狂》は中々にして興味深いな。存在が普通^{マトモ}でないのは当然だが、貴様は狂気……力に溺れぬ狂人、という型^{タイプ}なのか。言わば《考える狂人^{マッドシンカー}》か」

「どういう名称を付けようと勝手だが、俺の質問に応える。肯^{イエス}か、否^{ノー}か」

凍てつきそうな眼差しを向けてくる《考える狂人》に、《檻破り》は静かに笑み、やがて応じる。

「《檻》を直接破る事は、我らの狂気を以てしても不可能だ」

「……《檻飼い》を殺せば、《檻》は破れるか？」

「それには肯と応えよう。現に私は《檻飼い》を滅して、今こうして《檻》の外へと出られた訳だからな。……だが《檻飼い》も馬鹿じゃない。《檻》の中は狂気の蔓延……《地獄》なのだから《檻》が使えるだけでは生き残れない。自身の《檻》で囲った領域からは出られないという制約を掛けられる《檻飼い》は強靱な近衛を率いる。或いは《式神》、^{ゴレム}、或いは《生屍》、^{リビングデッド}、また或いは《魔狗》……何にしる《狂徒》や《司狂》を相手にするのだ、普通の人間では歯が立たぬのは分かるだろう？ それに抵抗し得る戦力を備えていると思えばいい。……《殲滅屋》には遠く及ばぬがな」

……近衛か。

確かに《檻飼い》が何の戦力も持たない人間だとは思えなかった。ただ、今の《檻破り》の話を聞いて《司狂》の少年は光明を見出していた。

「……要するに近衛には力が在るが、《檻飼い》には《檻》という特殊な異能以外の力はないんだな？」

そうとは思えなかった。《檻飼い》に戦う力が宿っているなら近衛を雇う必要は無いのだから。それは要するに《檻飼い》には近衛の持つような異能……戦えるだけの力が無い事を意味する、と《司狂》は考えたのだ。

蛇染みた顔を歪ませ、《檻破り》は薄っすらと冷笑を刷いた。

「……聡い^{さとし}な。……確かにそうだ、《檻飼い》は《檻》を繰る以外に特殊な技能は持ち合わせておらぬ。……だが忘れるな、《檻飼い》の繰る《檻》は、何も《地獄》を囲うためだけに在る訳ではない」「勿体振るな。俺は知恵を寄越せと言ったんだ、知っている事は全て話せ。それを吟味してから作戦を立てる。……続きは？」

「……と、まあ民間人に話したところで信憑性が皆無な話だったんだけど……どこまで理解できたかな？」

あちこちに亀裂の入った路地裏で祥は茫然とした表情のまま力無く俯^{うつむ}いていた。先程の場所から幾分か離れた場所とは言え、路地裏

と言う場所柄、一見して変わったような感じは無く同じような場所にも思える。取り敢えず例の蛆の湖が無い場所に移動していた。おりまさ檻雅が話した内容を何度頭に刻みつけても、確かに信じられない話には違いなかった。

幻想としか思えない狂気と《地獄》の話に、祥は愕然としたまま生唾を嚥下する。

……信じられる訳が無かった。否、信じたくなかった。

「一度狂気に走った人間は二度と正気マトモには戻らない。この町は既に《地獄》に覆われてしまった。故に 私はついさっき、《檻》を張った。つまり（イコール）、この町に在るモノは全て消される運命にある」

「……」

「《殲滅屋》が入獄した時点で、この《檻》の中で生き抜く術は消失した。キミはこのままだと消される運命にある。……とまあ、ここまでで何か質問は在るかな？」

質問という単語に嫌気が差す。在ったとしてもそれは自身の絶望を克明に彫り出す行為と何ら変わり無い。自らを絶望の淵へと追いやるその行為が祥は嫌だった。併し、それを利用してでも現状を打破する方法を考えていた。

このままでは夢生むつを助け出しても《檻》から出られずに死んでしまふ。それではダメなのだ。真に生き残りたいのならこの現状を別の方法でどうにかするしかない。

祥は檻雅の話を黙々と頭の中に刻み込み、更に練り転がしていく。どこかに綻びは無いか必死に探し続ける。

「……思っ たんですが、」

と、祥は顔を持ち上げて切り出した。檻雅も真顔のまま、祥の顔を見返す。

「檻雅さんや、束子たばねちゃんはこの《地獄》を留めるために、《歪》を探しているんですよね？」

「ああ、そうだよ。《歪》には特殊な《檻》を使って囲み、二度と

狂気が漏れ出さないようにする。それが私の家業であり、生業だ」
「……じゃあ訊きますけど、その後は一体どうするつもりなんですか？ 《檻飼い》である檻雅さんは、《殲滅屋》がいる《檻》の中から出られないんですよ？ ……まさか死ぬ気ですか？」

焦点はそこだった。檻雅の話によれば《殲滅屋》は《檻》の中の《地獄》を全て殲滅するという。《司狂》も《狂徒》も況^ましてや人間も草木さえも残さないという徹底した仕事らしい。ならばその中にいなければならない《檻飼い》は一体どうなるのか。

祥の質問に檻雅は暫く真顔で見つめていたが、不意に柔らかな笑みを浮かべ、呵呵と笑声を漏らした。

「檻雅さん……？」

「はは、いや、済まない。……素晴らしいね。この極限状態でその点に気づけるとは。……まあ、こんな状態でなくとも気づく者はあつさりと気づくものだが。さて、質問に応えようじゃないか。

答は、死ぬ気は無い。また《殲滅屋》は私を殺さない」

澄んだ微笑を浮かべて応じる檻雅に、祥はえも知れぬ悪寒を感じつつ先を促した。

「……それは、何故ですか？」

「《殲滅屋》は《檻飼い》を識別できるから、だ。……とは言つものの、殆ど彼らの識別は感覚だ。分かり易く言うと、匂いや色、雰囲気などの無意識に寄るものを頼っているらしい。ともあれそれ故に私は殺される事が無い」

「……束子ちゃんは、どうなるんです？」

最後の詰め、とでも言うべき質問に檻雅は満足そうに頷^{うなづ}く。

「私が《殲滅屋》に口添えすれば殺される事は無い」

「では檻雅さんの口添えさえあればこの《地獄》を出られるんですね！？」

光明が見えた　と心の中に温かな光が宿った刹那、檻雅が厳格な声で応じる。

「ああ、私が口添えしたら、　ね」

「……助けて、貰えないんですか……？」

崖下へ放り出されたような一拳に押し寄せる絶望に耐えながら、祥は呻くように返す。

檻雅は醒めた眼差しで祥を捉え、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「キミは、自覚してるかはさておき得体の知れない存在だ。何も分らないまま命を救うのは、善良な愚者のする事だ」

「……どうすれば僕が危険じゃないと証明できますか？」

「それは自分で考えるべきだね。……だが、そうだね。私の質問に幾つか応えて貰おうか。返答如何では、手を貸してあげてもいい」

質問？ と祥は小首を傾げてしまう。自身に質問する意味が理解しかねた。

そう思っていると、早速檻雅が口を開いた。

「その右眼は、何だね？」

「これ、ですか」

自分でも瞼の上から押さえるが、……視力は結局、戻らずじまいだった。何も映らず、今はただの物として右の眼孔に納まっている《それ》。

先程は右眼に見えた不可視の剣を掴んで現実の世界に引き摺り出す、という荒業を成し遂げたのだったが、自身のやった事は未だに理解できなかった。脳髓にだけ響く声もその時に生じた産物だ。

自分でも何が何だか分からない。それを説明しろと言われても祥には困惑以外返せなかった。

「……僕にもよく分からないんです。ただ、今は見えないんですけど、右眼に見える世界ってここじゃない別のどこかのようなでした。

……現実じゃない、まるで現実を別の視点から見たような……」

「質問を変えよう。あの剣はどうやって出したんだい？」

檻雅が即座に質問を変更したのに合わせ、祥も思考を切り替えて返答する。

「右眼には映っていたんです。映った……と言うか、出現したと言うか。その、右眼だけに見える剣を手で掴むと、現実の世界に引き

摺り出せた、と言うような感じで……」

「ふむ。もしかすると《創眼^{そうがん}》の類かも知れんな」

「《創眼》？」

先程から《狂徒》や《檻飼い》と言う単語を聞いていた祥だったが、その単語は初耳だった。

「狂気とは別種の異能と考えられている。だがその力は限り無く《司狂》が用いる《顕界能力》に近い。《創眼》とは《創造の眼》の略であり、あらゆる物体を具現化する眼の事だ。この異能は《地獄》に関係無く扱う事が出来るとされる。故に狂気とは別物と考えられているのだが……そもそも片眼だけに発芽するなどかなり変わった……」

ブツブツとまたも没我してしまった檻雅を、束子が大声を上げて覚醒させる。

「兄貴ーっ！ 戻れーっ！」

「……と、済まない。……で、だ。仮にキミの眼が《創眼》だとして、何か転機^{きうかけ}が無ければ発芽しないと思うのだが……心当たりは無いかね？」

「心当たり……」

と言つても昔事故に遭ったとか傷つけたような思い出は全く記憶に無かった。

ただ、祥にはそれとは別の心当たりがあった。

「……そうだ、どこかで見た事が在るような気がしてたんだけど……」

……

「？ 何の話かな？」

「檻雅さん、これって転機になるんでしょうか？ 僕、檻雅さんを夢で見た事があります」

夢。そう、今日も見ってしまった、時折見てしまう夢。……祥自身が化物に殺されてしまうという、分かり易く単純^{シンプル}な内容の悪夢。その夢に何の因果か、今日に限って新たな登場人物が姿を現すではないか。檻雅に似た雰囲気を持つ、女性が。

檻雅は一瞬驚いた表情を刷いたが、すぐに隠すように硬い表情を塗り直すと、顎に指をやってブツブツと再び没我したようだった。

「……それは、本当に私だったかね？　そもそもその夢の中の人物と私はどういう点で似通っていた？」

真に受けてくれるとは思っていなかった祥は若干面食らい、しかし的を外していなかったのだと少し自信が付き、すぐに思考を回転させる。

「えっと……そうですね、雰囲気と言うか……何て言うか、こう言う失礼に当たるかも知れないんですが……」

ちら、と檻雅に視線を向ける祥。

「構わないよ。先を続けてくれ」

にこ、とお人好しな微笑を返す檻雅に祥は惑ったが、決心が鈍る前に告げた。

「ちよつと言葉で表し辛いんですが……その、男性のような女性、という感じがしたんです。中性的って感じがして……背が高かったから大人って判る体型だったんですけど、何だか視界がぼやけてたせいか有耶無耶で……ただ声や口調を聞いた感じじゃ、女性だと思うんですけど……」

「……仮にその人物が私だとして……私は何をしていたんだね？　キミの視界がぼやけていたという事は、泣いているキミの枕許にでも立っていたのかな？」

「あ、いえ、そうじゃなくて……何て言うのかな……」

ふと、祥が檻雅から視線を外して思考を練ろうとした時、視界に世界の惨状が喰い込んできた。

亀裂の入った建物。あちこちに散らばる大小様々のコンクリートの塊。もう屍骸と化して姿は殆ど見せないが、溢れ返る程に散乱していた蛆。《地獄》と化した世界の片鱗。

祥の脳裏に新たな破片が突き刺さる。

「そう、こんな感じの《地獄》でした。……何だか町が崩壊していて、あちこちに火の手が上がっていて、それで……！」

「焦るな」

熱に浮かされたように語り始めた祥の機先を制し、檻雅は落ち着かせるように祥の肩に手を置いた。

ハツと我に返り、祥は自分でも冷静になるように深く息を吐いた。何が自身を突き動かしたのか判らないが、先程の状態は自分でも何か危うかったと自覚できた。

「……キミが見た夢の中の世界は《地獄》だった。そこでキミは、何を、見た？」

噛み締めるように言葉を選ぶようにゆっくりと質問を紡ぐ檻雅。それに倣うように祥はもう一度昂りそうになる心を落ち着かせ、始めた。

「人の形をした《何か》がいました。……《それ》は人を殺していました。何て言うんだろう……化物と言うより、僕にはアレが《鬼》という印象を受けました。人の次元で捉えていいような、そんな存在じゃないような……《それ》に僕は殺されるんです」

ゆっくりと自制して話している筈なのに、感情の昂りがそれを妨げようと話に熱が帯び始めるのが自覚できた。それでも祥は努めて冷静に語ろうと先を続けた。

「ただ、今日の夢は違ったんです。その先が見られたんです。……そこに檻雅さんに似た人が出てきました。確か……^{かあり}華檻さん、って呼ばれていました」

「
祥はハツとする。檻雅の表情が今までに無い驚愕に彩られたからだ。

信じられない、と顔に張りつけ、隠そうとすらしない。それは束子とて同じだった。

「……何で、先代の事をオマエが……？」

束子は思わず呟いてしまったらしく、我に返って慌てて口を塞ぐが既に遅かった。

檻雅もそれに続いて我に返り、表情を取り繕おうとしたようだが

手遅れだと悟り、すぐに、はは、と微笑を浮かべた。遅れて真顔に戻る。

「続きを、聞かせて貰えないかな？」

「あ、えっと……その、華檻さんって人が現れて、視界が真っ黒になるんです。夢の中の僕は死んだんだと思います。……で、片目だけが開いて、……何かを、突き入れられました」

「右眼に、かい？」

はい、と苦しそうに応じる祥を見て檻雅は思案顔になり、束子にも視線を向けた。

束子は困った顔をして檻雅を見つめ返す。

「……兄貴。……でも、だとしたらコイツは……」

「……だが、そうとしか考えられない、な。私と似た人物、そして華檻。……恐らくはその《鬼》と言うのも強^{あなが}ち間違っていない」

束子と檻雅が何やら密談染みた会話を交わすのを見て、祥は自分の言った何かが問題だったのかと心配になり、慌てるように声を掛ける。

「あの、僕はやっぱり《狂徒》なんでしょうか……？」

「……その可能性は否定できないが、その前に一つ分かった事がある。……キミの見た夢は、夢幻^{ドリーム}でも虚構^{フィクション}でもない。過去に確かに存在した出来事の残像だ」

過去の出来事？

祥は檻雅の言葉がすぐには理解できず小首を傾げるが、徐々に思考が現実を追いついてくる。

……アレが現実にあつた出来事だって言うのか……！？

「そんな……有り得ないですよ、そしたら僕、死んでますし……」

「……その辺は解明できないが、キミが語った夢の内容は確かに現実起こった出来事なんだよ。……そう、丁度十年前の出来事だ。とある地方でね、現在進行形で発生しているこの現象が発生した。

《地獄》が形成されたんだよ。併しそこに現れたのは《司狂》ではなかった。《狂徒》もない。《地獄》は自然に形成された訳

ではなく、人為的に引き起こされたんだ。……一人の、《屠鬼^{とき}》という名の《鬼》に因って」

訥々と語られる昔話に祥は既視感を覚えずにいられなかった。先刻自身が語った内容と符合する点が確かにあったからだ。十年前：確かに夢の中の祥はその位の年頃だ。《地獄》……現状を鑑みて夢の光景は確かに《地獄》染みていたと言わざるを得ない。そして《鬼》。《アレ》は祥の主観的な表現であったが、《アレ》は確かにそう呼べる存在であるように感じられた。

即興で檻雅が創り出した虚構だとしても、この時点で語る意味が分らない。祥は檻雅の話に真剣に耳を傾けた。

「……この話が事実だと仮定するなら、キミの右眼には恐らく……《屠鬼》が封じ込められている」
どくん。

言葉が頭の中で反芻するように夢の情景が蘇ってくる。

怪物 《鬼》と形容した、禍々しさの限りを尽くしたあの存在が右眼の中に……？

ふと、声が蘇った。脳髓に響いた声無き声が。

あれこそが……《屠鬼》の発していた声なのか……！？

愕然とする祥に対し檻雅は考える仕草のまま固まっていた。何かを黙想しているようだったが、それに気づいた束子が声を掛ける。

「兄貴、コイツの正体は何と無く分かったけどよ、どうするんだ？

殺すのか？」

戦慄が背筋を駆け上り、祥は思わず身構えた。束子に視線を向けるが彼女の視線の先には檻雅の姿しかない。それだけでも酷く安堵できた。あの少女は言っていた。《魔狗^{ヘルハウンド}》……葦崎^{あしざき}を姿諸共消し去る^{パワー}勢力を持つ怪物^{モンスター}……！

逃げなければ、と思った。ここにいたら殺される。彼女のあの強烈な一撃……先程喰らった打撃の更に何倍も威力を持つ一撃で、体を抉り消されてしまうに違いない。だが祥は即座にそれも無意味なのではと気づいた。

現在、この地は何という場所だ？ 挟峰市？ はさみね その路地裏？ ……

…違う。ここは 《地獄》 なんだ。それも《檻》に囲われてしまった、逃げ場の無い屠殺場。どこに逃げてもきつと助かる見込みなんて無い。生き残れる要素なんて、皆無だ。

「……いや、彼は生かすべきだ」

絶望の淵に立たされていた祥に、思わぬところから救いの手が差し伸べられた。

檻雅は顎を摘まんだまま祥の顔を覗き込んでくる。その様子に束子が疑念を発する。

「どうしてだよ、兄貴？ コイツ、《屠鬼》を中に封じ込めてんだろ？ 危な過ぎるだろつ。ここで殺^ヤっちゃった方が後々安全じゃねエの？」

「安全面で言うなら束子くんが言うとおり、ここで始末しておくべきだろう。だが、私の目的を忘れたのかい、束子くん？」

凧いだ水面のような微笑を浮かべる檻雅に、束子は一瞬何を言っているのか理解できなかったようだが、徐々にその意図を掴めてきたのかゲンナリと肩を落とした。

「そりゃア、まア、兄貴はそのために《檻飼い》やってんだろっけどさ……でも、コイツ、先代の手掛かりになるのかア……？」

「それは調べてみるまで判らないさ。……初めての手掛かりなんだ、そう簡単に手放せる筈が無いんだよ、束子くん」

「……分かったよ、兄貴の言う事にゃア逆らうつもりねーしな、オレも」

「あの……？」

祥が若干及び腰で声を発したのを見て檻雅は穏やかな微笑を浮かべた。

「この《地獄》から脱け出したいのだろう、キミは？」

「え、あ、……はい」

「では、契約を交わそう。私の手伝いをする代わりに、この《地獄》の《歪》が《檻》で囲われた時、キミをこの《檻》から解放する、

と」

契約。

その言葉が身に浸透した時、初めて祥は腰を抜かした。
やっと本当の光明が見えた、そんな気がしたのだ。闇に射し込む
一筋の光は切れそうな程に細かったけれど、ようやく閉ざされた地
表に届いた……そんな気分だった。

陸章 / 《司狂》

不意に祥は忘れそうになった彼女の事を想起し、慌てて走り出した。それを見て檻雅が思わず声を掛けて呼び止める。

「どうしたんだい？ 私との契約を破棄するつもりか？」

「済みませんっ、もう一人助けて欲しい人がいるんですっ。今連れて来ますから、待っていてくださいっ」

そう言つてすぐに路地裏の角を曲がつて姿を消そうとする祥に檻雅は意外にも慌てた。

「束子^{たはね}くん、急いで彼を追うぞ」

「え？ あ、おうっ」

檻雅に促されるように駆け出した束子だったが、その鼻に異臭が漂つてきたのを悟り、咄嗟に檻雅を引つ張つた。檻雅はいきなり引つ張られて足を止め、倒れ掛けた姿勢で何とか踏み止まる。

そんな状態になつても、檻雅は束子の行動を咎める事はしなかった。祥が曲がつた角から一人の男が現れ、それに注意を払う事に集中してしまつたためだ。

学生服を纏つた、前髪で目元を隠した少年。その先に据えられた瞳は 泥水。

「……兄貴、コイツ……！」

「《司狂》、か？」

束子の言を先回りして呟く檻雅に彼女は小さく首肯して応じた。

少年 《司狂》は喋ろうとせず、黙して二人の様子を見ているだけだった。が、その拳が握られた瞬間、歴大な殺意を二人は全身で感じ取つた。

来る！ と考えた刹那には事は始まっていた。《司狂》の少年が猥染^{わうせん}みた俊敏さで距離を殺し、あつと言う間に三人の間隙が死ぬ。

檻雅は咄嗟に束子の背後へ移動しようとして 躓くように右足

を取られた。驚いて視線を下へ向けると、いつの間にか右の足首に枷が嵌められていた。枷に繋がれた鎖は地面へと伸びている。がちやつかせるだけで外れる気配は皆無だった。

しまった　　と思った時には全てが手遅れだった。恐らく束子も咄嗟に檻雅の盾になろうと動作アクションを起こしたのだろうが、同じように足首に枷が嵌められ、その場に縫いつけられたまま手出しする事が叶わなかった。

ゴッ　　、と頬を突き刺すような捻打フックに一瞬とは言え意識を吹き飛ばされる檻雅。後頭部がアスファルトに叩きつけられ、瞳の奥で火花が散ったような錯覚が生じる。

「兄貴　　ッ！」

脳裏に届く喚声だったが、それでも檻雅は即座に行動に移せなかった。理性は既に気づいている。今死ぬ訳にはいかない。彼を殺さねば次は無い　　。だが、本能的に体が機能不全を起こし掛けていた。今までもこんな事が無かった訳じゃない、ただあまりに的確過ぎる狙いに檻雅は思考が即座に切り替わらなかった。

起き上がるうとして、　　凄まじい威力の拳が脳天に突き刺さる情景が浮かんだ。刹那、檻雅は転がるように再び体勢を倒した。直後アスファルトを砕く快音が弾け、首筋に破片が叩きつけられた。喰らってたら、間違いなく死んでたな。

冷静に脳髓の奥で呟き、　　ようやく思考が現状に追いつく。このまま戦えば死ぬのは間違いなく自身　　束子が拘束されている以上、狙われているのが自身だという現実を鑑みれば彼を屠らなければならぬ位置にいるのは　　自分だ。

咄嗟に首元に手をやる。指に触れるのは不可視の首枷。人が人外に堕ちぬために科せられた自身を囲う《檻》。それを指で撫でる。

かちり、と檻雅にしか聞こえない音が間近で鳴る。次の瞬間には敵　　《司狂》をも上回る高速度で体を叩き起こし、即座に足枷に手を触れる。

その高速な動作を見てどう思ったのか、或いは何も感じなかった

のか、《司狂》は外した拳、つまりアスファルトを貫いた拳を引っこ抜き、再び捻りを加えて檻雅に叩きつける。

「私に《枷》で挑もうとは、いい度胸だ」

その時には既に足枷は外れており、《司狂》の拳が届くよりも先に檻雅の拳が《司狂》の顔面を穿っていた。轟音が迸り、《司狂》の姿が路地裏の壁面に叩き込まれる。粉塵が舞い上がり、辺りに視界不良の領域が形成された。

一時的にはあったが《檻》を一段階解放した状態をすぐに修正自身に《檻》を囲い直し、檻雅は束子の許へ駆けた。辺りが闇に沈むような錯覚がちらつくのは、仕方ない現象だった。人間の域を超える動きをしたのだ、その分の負担は必ず蓄積される。

「が、はあ、は、あ」

息が絶え絶えのようだったが、まだこの状態は序の口だと檻雅自身自覚していた。この程度で根を上げているようでは、到底《檻飼い》の職を保っていられる筈が無い。中には《魔狗》や《式神》を連れずに《檻飼い》を熟す猛者がいる位だ、自身もこの程度の損傷で呻いているようでは、まだまだ一人前とは言えない。

束子の許に辿り着き瞬間的に足枷を外す。《檻飼い》なら《檻》に属する全てのモノが簡単に外せ、同時に修復できる。手錠を掛けられても一秒も掛からずに外してみせる自信があった。

「大丈夫か、兄貴？」

束子が体を支えるように身を寄せてくるが、檻雅はそれをやんわりと遠ざけた。束子が心配げに顔を持ち上げ、仔犬のような愛らしい瞳で檻雅の横顔を射抜く。

「……まだ、終わっていないようだ」

そう、短く、辛そうに呟く檻雅に釣られて、束子の視線が跳ねるように粉塵へと向かう。

粉塵が落ち着く前にそれは起こった。檻雅が急に体勢を崩し、後頭部を再び地面に叩きつけられそうになる。足に再び足枷が嵌められ、強力な臂力を持って粉塵の真只中に引っ張られていた。突

然の事に束子は驚き、咄嗟に動こうとするが　再び足枷が生じ、
躓くようにして動きを急停止させられる。

「くっそッ、テメエッ、汚い手エ使ってんじゃねエぞッ!!」

思わず怒鳴り、足枷を何とか叩き壊そうとするが、束子の尋常ならざる筋力を以てしても疵キズ一つ入らなかった。無理矢理引っこ抜こうとしても結果は同じだった。

「ちつくしよッ、兄貴ッ！　絶対に死ぬなよッ!!」

粉塵の中にまで声は届いていたが、檻雅は返事をする余裕など皆無だった。全身に突き刺さるような殺気を感じつつも、相手の姿が全く見えないという悪条件での戦闘を余儀無くされていたからだ。

……参ったな、完全に相手は《檻飼い》である私を狙っている……
…《司狂》は本来、私達の存在は知らない筈だ……ならば、誰かが
入れ知恵を……？

粉塵が晴れるのを待たずして、檻雅は咄嗟に再び自身の《檻》を一段階解放する。あらゆる機能が向上し、相手の居場所を感覚で悟る　併し相手は近寄って来る気配が無く、緩やかに、そして遠巻きに檻雅を観察しているように見えた。

まさか、と檻雅は怖気を感じる。

まさか私が《檻》を解放する事、剩あまつさえ解放したら副作用が出る事も知っている　！？

信じられないが、そうとしか思えない行動であった。粉塵に紛れて攻撃するのなら未だしも、粉塵の中に引き摺り込むだけで攻撃はしてこない。ただその様を見届けるだけ……。その行動の意味する事と言えば、それ位しか考えられない。

即座に《檻》を修復すれば、恐らくそこを付け込まれて　彼の
一撃の脅力ならば、即死も有り得る。だが長時間の解放は身を滅ぼす。

檻雅は思考を切り替え、自身の足枷を外した。透かさず粉塵の外へと出て　束子と合流する。束子の足枷を瞬間的に外し、粉塵の奥に佇む《司狂》を睨みつける。《檻》はまだ戻さない。

「兄貴っ、これ以上《檻》を解放したら……！」

「どうやら今回の《司狂》はその知識を織り込み済みのようだ。…

…《殲滅屋^{せんめつや}》が来るまでは、逃走も考慮した方がいいかも知れないな……！」

ざり、と壁面の破片を噛み締める音が響き、粉塵が晴れて《司狂》の姿を克明に曝け出す。《檻》を一段階解放した膂力で殴ったと言うのに、鼻が曲がるどころか、殆ど損傷は無いようだった。

ほぼ無傷の状態で《檻飼い》と《魔狗》を睨み据える。

「……《殲滅屋》が来る前に始末させて貰う。生憎俺はここにくたばる気は無いからな」

冷然とした声音で告げる《司狂》に再び檻雅は驚きを表出した。隠しきれない動揺が言の葉に載って紡がれる。

「何故生まれて間もない《司狂》が、《檻飼い》や、《殲滅屋》の事を……？」

思わず零れた本音に《司狂》の少年は柳眉をピクリとも動かさずに、感情の薄い唇だけで返した。

「……どうやら、奴が言ってた内容は虚実ではなかったようだな」

「奴？ まさか、《狂皇^{きやうおう}》が……！？ 奴がそんな知識を持つなんて話は」

「……オマエの質問に付き合うつつもりは無い。《檻》に縛られる気も無い。《殲滅屋》を待つ気も、毛頭 無い」

滑走するように瞬間的に身を寄せてくる《司狂》に、束子が咄嗟に前に出る。その直前、檻雅は高速度で彼女の《檻》をもう一段階外していた。

猋染みた咆哮が迸り、《司狂》の体が華奢そうな腕一本で拉げる様が一瞬、情景として浮かんだ

路地裏から出て表通りに戻ってきた祥は、すぐに噴水広場の方角へ駆け出す。あちこち路面が断絶し、通れない箇所や危険そうな箇所が幾つも見られたが、それを避けるように、或いは飛び越えて道

を急ぐ。

助かるかも知れないんだ　僕達はこの地獄から脱出できるんだ
その意志だけで、ただ一人愛する彼女の許へと駆ける祥。その
心に迷いは無い。ただ一心に彼女の事だけを想っていた。

絶対にこの《地獄》から出てやるんだ。そう強く願い、　噴水
広場へと辿り着いた。

大きな噴水がある、サッカーの試合が出来そうな程の広場で、休
日になるとよく路上ライブや大道芸などが披露される、色んな市民
が立ち寄る憩いの場。名称自体は挟峰第六公園となっていていい
が、使用者は愛着を込めて噴水広場と呼んでいる。緑に生い茂る樹
木が立ち並ぶ公園だった筈だが、今では見るも無残にその幾つもが
倒れ、路上にはあちこちに亀裂が走っていた。

……あれ？

一瞬時間の感覚が飛んだような気がした。それだけじゃない。さ
つき自分は何をした？　今さつき僕は数十メートル在る亀裂を軽々
と飛び越えなかったか？　それにさっきの路地裏から噴水広場まで
の距離を僕は何分で辿り着いた？

様々な疑念が浮かんできたが、　全て忘却へと捨てた。今はそ
んな事よりも夢生^{むう}を探し出さなければならぬ。その思考だけで全
ての雑念を切り捨てた。

噴水広場には大勢の人間が屯していた。被災者なのだろう、色ん
な場所から逃げて来た人々が身を寄せ合って何が起こっているのか
把握しようと躍起になっていた。助け合いの言葉や相手を労わる声
があちこちから上がっていたが、それには眼もくれず祥は唯一人の
彼女の姿を探し求める。
ただ

「夢生ちゃん！　夢生ちゃん、返事をしてーっ！」

大声で何度も呼び掛けるような人間は何も祥だけじゃない。家族
連れなのか娘の身を案じて声を張り上げる者。中学生程の少年達が
大声で叫んでいるのはもしかしたら友達なのだろうか。祥と同じよ
うに彼女、或いは彼氏の名前を喚いている者も大勢見受けられた。

「夢生ちゃーんっ！」

何度も叫んでいる内に徐々に絶望が胸元にせり上がってくる。暗い感情に呑み込まれそうになる。恐怖が全身を包み込もうと蠢き始める。

皆が恐らく同じ気持ちなのだろう。娘を呼ぶ声には嗚咽が混じり始め、少年達の喚声は徐々に小さくなり、少女が声も上げずにその場に跪く。

だが、それでも諦めない者は確かにいた。嗚咽が混じっても呼び声は止まず、どれだけ小さくなっても叫び続け、蹲ってでもその名を呼び続ける。誰もまだ本当に絶望は味わっていない。

これから、味わうんだ。

「夢生ちゃーんッ！！ どこーッ！」

泣きそうになりながらも叫び声を張り上げ、

轟音が、響き渡った。

一瞬の後、辺りに突如として静寂が涌いた。何の音も無い。啜り^{すす}泣く声も、喚き散らす声も、足音も、衣擦れも、全く、全てが、消えた。

それは、まるで西瓜^{スイカ}を割ったような音だ、と祥は思った。

視界の奥　噴水広場の入り口の辺りに紅い水溜りが出来上がっていた。水溜りを創った源泉は一瞬何か判らなかつたけど、紅い断面と、その断面の奥にある服と言う装飾品を見て、人だ、と、気づけた。

人が死んでいた。頭を吹き飛ばして。あっちこちに脳漿^{のうじょう}をバラ撒いて。生きていた証なんて、欠片も残さずに。

更にその奥　祥が今朝見掛けた、絶対に近寄ってはいけないと理解した女が、馬鹿でかい小型の大砲のような拳銃から硝煙を棚引かせて立っているのが、判った。

女は銃口を口に近づけ、ふう、と硝煙を吹き飛ばす。その唇が、三日月型に歪む。

満面の笑みだった。

「さ、て、と。　お遊戲の時間だゼイ、ベイイビイイ？」

艶めかしく唇が蠢き、言葉が吐き出されたと自覚した、その刹那、咆哮が轟く。

祥の頭の中に届く映像は、酷く滑稽だった。形が歪な人間が、幾つも幾つも折り重なって倒れていく。或いは誰かを庇おうとして、或いは形振り構わず逃げようとして、また或いは何も考えられないまま茫然自失の態で立ち尽くしたまま　体の一部を刮ぎ落とされ、人より堕ちたただの物と化していく情景。

《地獄》。その単語が祥の脳裏にちらついた。

女は唇を釣り上げて嗤い、逃げ惑うウサギ達を刈り取っていく。逃走など一人として許されなかった。遠くにいた人間から刮げ取られ、近場にいた人間は泣きながら喚く事しか出来ない惨状が、これが現実だと声高に叫んでいた。

砲声が轟き、隣を駆け抜けようとした若者の胸が、花開いた。ばしゃッ、とバケツに入った水を被せられるように、血液が祥を覆い尽くす。　酷く咽返りそうな臭いが充満する。

「う、……あ？」

女の猥染みた眼差しが一瞬だけ祥を捉える。　距離は確実に離れていた筈なのに祥はその瞬間、喰われると錯覚した。動物園の虎や鰐を間近で見ても思わなかった、捕食される概念が身に宿る。

やらなきゃ、やられる……！

思考が切り替わるのを自覚する。そこから先はもう刻木祥としての思考は無い。そんな感じがした。

ここからは　《鬼》の時間だ。そう、何かが叫んだ気がした。ぐる　、と右眼が蠕動し、視覚が切り替わる。　否、意識的に切り替えた。

時間が緩やかに流れていくような感覚だった。水飴の中を動くように時間が粘ついた動きで進む。祥の視界には先程手にした禍々しい形状の湾刀が浮かんでいた。それを　もぎ取る。

刹那、湾刀は現界し、確固たる質量を持って祥の右手の中に

納まった。

咆哮は鳴り止まないが、それでも彼女はその異常に気づいたらしく、人撃ちを続けながらも視線だけは祥に向けてきた。　　凄絶な笑顔が滲み出る。哄笑が迸る。

「キたなキたなキたなア!?　ソイツを待ってたんだよ、オイラはアアアア!」

小型の大砲をコートの裏地に戻すと、女は背中に吊っていた大銃を振り抜く。距離は50メートル近く離れていたが祥も女も同時に駆け出し、距離は五秒も経たずして死んだ。

鈴の音のような刃音が弾けた。

祥は湾刀を右手のみで振りきり、女も大銃を左手のみで振りきり衝突。凄まじい気と気の暴風が巻き起こり、二人の間に眼に見えない衝撃が走り抜ける。

「こりや参ったぜエ、テメエは最後に喰うべきだったかア?　それとも、テメエみてエな野郎がワンサカいやがるのか、今回の《地獄》にやアよオ!」

心底から歓喜を喚く女に祥は正気が殆ど消された表情で厳かに返す。

「貴様は、《狂徒》なのか……?」

「はッ、オイラが《狂徒》だとオ?　　ちッげエーよ、オイラは

《殲滅屋》ひかぎりようこ非鉤獅子。テメエら丸ごとブツ殺しにやってきた天使様さ!」

大銃を振り抜き、湾刀を弾かれるように後退する祥。だが、その間隙も許さぬと言わんばかりに接近し、女　　獅子は大銃を叩きつける。

大銃が肩を挟る直前に湾刀で切り返し、祥は地上を滑走しながらも体勢を整える。息は上がっていない。零れ落ちんばかりに見開かれた右眼の視線がめまぐる目紛しく周囲を彷徨さまよう。

湾刀に因って弾かれた大銃を再び出鱈目テタラメな構えで振り抜き、叩きつけ、斬り下ろす獅子に、祥は踊るように一太刀一太刀を綺麗に躲

していく。ステップを踏むように後退し、死体も踏まずに足を置き、突如として刃を剥く。

狛子の心臓を切り裂くであつただろう斬撃は併し、辛うじて避け躲され、コートの端を斬りつけるに留まつた。逆に祥の左手に裂傷が走る。避け様に斬りつけられたらしい。

距離を置いて、狛子が溢れんばかりの歡喜に身を打ち震わせていた。

「ヤベエって、これヤベエって……！！　オイラと打ち合える奴なんていつ振りだよ……！！　ヒヤハハハハ！！　こりや、思う存分楽しめそうだなア……！！」

「……なるほど、《狂皇》の力を借りず、また《屠鬼》^{わたし}のようでもない。《殲滅屋》とは斯くも溺れた奴とは、な。……戦闘技術に於いてのみ、褒めて遣わそうぞ」

「ヒヤッハッハ！　そつか、道理で変わつてると思やア、テメエ《屠鬼》^{とぎ}か！？　クヒヤハハハハ！！　こりやアいいぜ！　《屠鬼》なんて早々お眼に掛かれねエモンだ、真剣^{マシメ}にやらなきゃ損だぜこりやアよオ……！」

祥　否、《屠鬼》の右眼が冷絶なる殺意に踊り、狛子　《殲滅屋》の口が裂かれるように笑みを結ぶ。

二人は再び殺戮の宴を開催しようとした　刹那、祥が頭を抱えて蹲る。苦しげに喘ぎ、祥はそのまま立ち上がる事が出来なかつた。
「が、ア……！！　《間術師》^{まじゅっし}の分際で、いつまで私の邪魔をする……！！」

「《間術師》だア？」

狛子が不審げに眉根を寄せていると、何の音も光も況してや衝撃すらも無く、　狛子の首が刎^はねられた。

ごと、とボーリングの玉が落ちたような音と共に狛子の頭蓋が転がり、体もそのまま力を失って倒れ伏した。

「ぬ、う……！！　また貴様か、《断空》^{だんくう}……！！」

「　あら、憶えてたの？　ずっと祥くんの意識下で眠っていると

思ってたけど……記憶は残っていたんだ？」

革靴を鳴らして現れた影　それは祥が探し求めていた少女、夢生その人だった。

最後に別れた時と同じ学生服に身を包んだ格好で、同様にこの《地獄》に於いても落ち着いた佇まいは崩れていなかった。

いつもの口調で、いつもとは異なる言葉を吐きかける。

「その体はね、アナタのモノじゃないの。また底に戻っちゃいなさい、《屠鬼》」

「……くくく、《断空》よ、そう言っていられるのも今の内だけだ……私の力は戻りつつある……狂気に当てられ、この器はやがて朽ちようぞ！　その時こそ私は完全に肉体を手に入れ……！」

「戻れ、と言ったの」

祥の喚声が上がリ、　やがてそれも潰える。その場に横たわり、……若干の時間差の後、身を起こす祥。

「……夢生、ちゃん……？」

「気が付いた？　祥くん」

にこ、と華やぐ美少女に、祥は右眼の疼きのせいで即座には言葉を返せなかった。

脳髓に響く声は無かったが、何故だかあの唸^{しわが}れた声が聞こえたような気がして祥は心臓が薄ら寒くなる錯覚がした。体の芯から冷えていくような感覚だ。

その後ようやく視線を地上に戻して、　思わず口を押さえる。
どこにも人などいないように映った。まるで屑籠^{クスカゴ}の中だと感じた。要らない物を詰め込むだけ詰め込んだ、屑籠^{マクモ}。正常な形を保った死体など一つとして無い。何かしら決れ、外れ、穿たれた歪に破壊された人形ばかりが転がっていた。

思わず吐きそうになったが、彼女の手前呻くだけに留める。気持ち悪い。空気を吸うと咽返るような血臭が肺を融かしていくようだった。まるで棺桶の中から死した世界を覗き込んでいるような気分だった。

「……大丈夫？ 肩貸そうか？」

体を寄せるように近寄って背中を摩ってくれる女の子に、祥は数瞬何も言を返す事が出来なかった。

やがて吐き気を喉の奥へと押し込んだ後、ゆっくりと祥は呟いた。

「……《間術師》、って……何？」

記憶が、残像として蟠わだかまっていた。

自身の思考が切り替わり、人の形をした異形と刃を交え、最期を看取ったその瞬間まで祥には記憶として、否、残像として頭にこびり付いていた。

祥の質問を間近で聞いた夢生が一体どんな返答を寄越してくるのか、祥は若干怯えていた。聞いてはいけなかった質問かも知れない、聞けば酷い事になるかも知れない……それらの恐怖を蔑ろにして祥は問いを発していた。

夢生の彼氏として聞かなければならない、そう感じてしまった故に、だ。

暫くの間夢生は何も言葉を返さなかった。その沈黙こそが祥の緊張を 恐怖を、引つ張った糸のように張り詰めさせていく。

「……夢生、ちゃん……？」

身を寄せていた夢生の横顔を覗こうと顔を持ち上げようとすると、くす、と笑みが零れる声が耳元で弾けた。その瞬間、緊張が解け

「知ったら、もう今までどおりの関係じゃ、いらなくなるんだよ？」

それは紛う事無き、警告だった。

これ以上の立ち入りを禁じる、厳然たる警鐘だった。

息が詰まり、胸が痞つかえるような緊迫を以て祥は後に続く言葉を失った。

顔を持ち上げると、穏やかな、日溜りのような微笑を浮かべている夢生がいる。……否、いて欲しいと、願っているだけだ。祥は実際顔を上げられず、俯うつむいたまま夢生に体を預けていた。

面を上げるのが、怖い。

そこにいるのは間違いなく夢生だと言うのに、顔を向けた途端に事実が捻じ曲がってしまいそんな気がして、とてもではないが顔向けできなかつた。酷い緊張感が漂い、脂汗が額に滲み始める。

風が凧ぎ、血臭が辺りに蔓延する。どろ、とした水飴染みた粘っこの空気が纏わり付くような錯覚に襲われる。

酷く流れが曖昧な時間が過ぎ、……やがて夢生の小さな声が続いた。

「……知りたいよね？ わたしがこんな状況になっても平常でいられる、その訳を」

「……」

「祥くんは一途だもん。目的を持ったら、どうあっても頑張っちゃうんだもんね」

いつもの調子で、いつもの言葉を、いつもみたいに紡ぐ夢生。

……なのに祥はその語調に、吐き出される言に、怖気を感じていた。

まるで異質だ。いつもの夢生が完全に別人のように思える程何かが決定的に違う。

違和が拭えぬまま、不意に夢生の体が祥の体から離れた。

ハッと祥が反射的に顔を上げると、殆ど隙間も与えず、眼前に夢生の顔が現れた。眼と眼が合い、鼻と鼻がぶつかり掛け、吐く息が互いを濡らす。

「……助かりただけなんだよね、祥くんは。この《地獄》から生き帰りたいだけ。そのためには知らなくちゃならない、……そう、思っちゃったんだよね……？」

「……！」

感情の無い、機械染みた無機質の音声に祥は言葉を失っていた。眼前に聳える美顔が異形の形相に思えて仕方ない

夢生の顔をした《それ》はゆっくりと顔を離していく。

「……ここから出られる方法を、わたしは知ってるよ」

「 え？ で、でも、ここは《檻》で囲われたんじゃ 」

「 どこで聞いたの、それ 」

驚きに瞠目する夢生に、祥はようやくとそれがいつもの彼女のモノだと気づけたような気がして、胸を撫で下ろすと同時に安堵と共に口の錘が軽くなつてしまっていた。

「 檻雅さんって人に聞いたんだ。《檻飼い》って言っても分からな
いと思うけど…… 」

「 ……ふうん。……祥くんの浮気者 」

「 へ？ 」

「 ううん、何でもないよ ……その人、今どこにいるか、分かる
？ 」

そう尋ねてくる夢生の顔には少なからず怒りが孕んでいるようで、祥には逆らえない事が即座に理解できた。

漆章／過つ既往

路地裏は徐々に崩壊しつつあった。度重なる重度の打撃に加え、何度も何度も人が壁面に叩きつけられ、やがては壁が壁としての機能を失い、崩落。建物自身先程の大地震で亀裂を走らせる程に傷ついていた事もあり、崩壊するのは時間の問題だった。

配線などを越え屋上へと跳び上がった《司狂》の少年は、全身を損傷し体力も磨耗し始めていた。制服はズタズタに引き裂かれ、あちこちに血糊が鏝められている。肩で呼吸をする程に性能も下降気味だった。

屋上を滑るように移動し、気配で感じ取れる《檻飼い》と《魔狗》を探り、地上に戻ろうとして、屋上が破裂。足首を引っ掴まれ、地上へと引き摺り下ろされた。

雑居ビルの中を床と天井をブチ抜いて落下し、やがて地上へと墜落する。あまりの衝撃にアスファルトがクレーター状に凹む。

不味い、と《司狂》は思考を鈍らせる。予想以上に《魔狗》が機能している。狙いでは《檻飼い》を単騎で殺害する予定だったが、《檻飼い》自身が《檻》を解除して抵抗し、更には《魔狗》が予想以上の働きを見せてきたため、今回の作戦は失敗に終わる事が現実味を帯びてきた。このまま泥沼の試合を続ければ、やがては《殲滅屋》の介入を許す結果を齎すに違いない。

《司狂》は已むを得まいと殺害を断念し、逃走を図る事を決意した。《魔狗》の戦闘能力は《司狂》のそれと充分に互ひ合える程だ。それに加えて《檻飼い》も同時に攻略するとなれば相当の知力が必要となるだろう。そう結論付けた《司狂》は《檻飼い》と《魔狗》の両方同時に足枷を科せ、自身は持てる力を尽くし全力で戦線離脱した。

時間はあまり残されていない。《殲滅屋》が全てを刈り取る前に何としてでも《檻飼い》を潰し、この忌々しい《檻》から出る。そ

れが成就されなければ待っているのは
『死』。

崩壊寸前の路地裏から繁華街の大通りへと出てきた二人は辺りを見回し、ようやく一息吐いた。瓦礫があちこちに散乱し、凄惨な光景がまざまざと広がっていたが、それでも先程の路地裏の攻防戦に比べれば比較にならないほど平和な光景だった。

「ちッ、逃げられちまったみたいだぜ、兄貴」

毒づいて、落ちていた瓦礫 辞書大のコンクリートの破片を捨て鉢に蹴り飛ばす束子^{たばこ}。コンクリート片は倒壊寸前の雑居ビルを穿ち、がらら……、とビル全体を揺する。近くに人の姿は無く皆どこかに逃げた後のようだった。

周囲に人の姿は全く無い。それほど凄まじい揺れの地震だったし、建物自身限界が近そうな物が多い。皆ここにおいては危険だと察知したのだろう。小さな粉塵がまだ舞っているせいか空がくすんで映った。太陽の光がどこか虚ろに辺りを照らす。

「……今回の仕事はいつも以上に気を引き締めて当たらないといけないようだね。《司狂》が態々（わざわざ）私達の前に姿を現し、且つ《檻飼い》の事を理解している。こんな事例は恐らく初めてだ」
尖った破片を踏まないように移動を始める檻雅^{おりまさ}。鼻を上向けて後ろに続く束子。彼女は再び自身の嗅覚を用いて、危なげなモノを察知しようと努めているようだった。

「……でも、もうオレの鼻じゃ捉えられない位に退いちまったぜ？
幾ら《司狂》言っても、オレが傍にいたりや早々スゲエ手も打ってこねエって！」

「……だと、いいけど」

神妙な面持ちで呟く檻雅の視界に、これから探しに行こうとしていた人物の姿が過ぎる。一瞬驚いたように表情が崩れるが、即座に緩んだ頬が引き締まる。

束子も祥^{さち}の姿を見つけた瞬間、あーっ、と指差して声を上げたが、

刹那にその顔が警戒に歪む。ぐるる、と喉の奥から唸りを上げ始めた。

二人とも祥ではない方の人物に視線が行ったきりだった。

美少女、と形容できる女子高生。それが 二人の視線を釘付けにした。

「あの、勝手に走って行っちゃって済みませんでした。……えと、この人も一緒に助けて貰えませんか……？」 あ、勿論僕に出来る事なら、どんな手伝いもします！」

「……祥、誰だソイツ……？」 束子が呻くように呟く。

「え？ あ、その、僕の、彼女で……」 祥が振り返って紹介しようと口を開き掛ける。

「御淵夢生。みふち むつ【境会】きようかい最高峰の《間術師》まじゆつしが、何故ここに……！？」

名を告げ、正体を明かしたのは夢生本人ではなく 《檻飼い》の檻雅だった。瞠目したまま夢生 【境会】最高峰の《間術師》に視線を注ぎ続ける。

夢生はニコ、と華やぐように嫣然と笑むと、スカートの端を摘み上げて優雅に一礼した。

「お初にお眼に掛かります、《檻飼い》 玖領家当代、檻雅さん？」

「……私の事は、いいんだ。何故キミのような人間がここに……？ この《地獄》はついさっき現界したのではないのか！？」

狼狽を隠しきれない檻雅に対し夢生は悠然と切り返す。

「そうよ、この《地獄》はついさっき現界した。……けど、そこにわたしがいて、何が問題なの？ わたしがここにいちやいけなくて法律は、聞いた事が無いけど？」

「私は何もこんな所でキミと屁理屈を捏ね繰り回したい訳じゃないんだ。……まさかとは思うが、 彼か？」

彼 そう言って一同の視線が集中したのは言うまでも無く、祥だった。

祥自身は戸惑ったように、え？　と言葉を失ったようだったが、夢生はその様子を見ても動じず、檻雅へと視線を向け直して言を返した。

「その様子だと気づいちゃったみたいね。……彼が《屠鬼》^{とく}を内包している事を」

「何故今まで彼を狩らなかった？　《間術師》としての大義を見失ったか、《断空》^{だんくう}」

「逆に問うけど、祥くんのどこが危険だと言うつもり？　《屠鬼》を内包していると言っても、わたしが常に動向を見守ってきたし、且つ今まで一度として暴走する事は無かった。わたしが《間術》を用いて《屠鬼》を封印し続けてきたその実績を、アナタは蔑ろにする気なの？」

監視、と言う単語が祥の脳裏を過ぎる。彼女は自分に《屠鬼》と呼ばれる化物が封印されていた事を初めから知っていたと言う。……僕はずっと夢生ちゃんに……？

廃墟と化したビルが崩落しつつある町の一角で、檻雅は苦虫を噛み潰した表情で血を吐くように返す。

「……全てはキミの手の内と言う訳か……！　……彼を何のために今まで生かした？　何の理由も無く《屠鬼》を手中に納めるなど、愚か過ぎるぞ、《間術師》」

「言いたい放題言ってくれてるけど、人が生きる事に理由を求める事こそ愚かだと思っわ。生きるに理由があるなら、どうして理由も無く人が死ぬの、と返してみようかな」

「今は無駄話をしている場合じゃないだろう、《断空》。自己の利益のためだけに《屠鬼》を生かし続けたのなら、厳正なる処罰が下るのは必然……キミのその行為は【境会】の教えを大きく逸脱している。言い分によつてはキミも《殲滅屋》の手に掛からねばならなくなる……その意味が解らない訳ではあるまい？」

「長広舌痛み入りますわ。……でも、その言葉、アナタにだけは言われたくないわね」

「何？」

「そもそも祥くんに《屠鬼》を封印したのが誰だか、判らないアナタではないでしょう？ 忌まわしき玖領家の跡取りさん」

いつもの穏やかな微笑を浮かべている筈なのに、夢生の表情には凄絶な色調が浮かび始めている、祥にはそう見えて仕方なかった。微笑の仮面の下には悍^{おそ}ましいまでの憎悪と憤怒が込められているように、祥には正視できそうに無い。

檻雅は夢生の言葉の意味が理解できているようで、噛み締めるように返す。

「……私の母は、玖領華檻^{かおり}は最善を尽くした筈だ。《屠鬼》が一介の《檻飼い》に倒せる相手でない事は我々【境会】に属する者なら誰もが知っている常識だろう。併も玖領華檻^{カージェアン}は近衛を付けずに諸国を渡り歩いていた《檻飼い》。自身の《檻》を外してでも敵わない相手に立ち向かう訳が無い。《屠鬼》を封印したのはそれがその時の最善だった筈」

「まあ、その辺は認めようかな。彼女はよく頑張ったわ。……でもね、その元凶が玖領華檻だとしたら、どう？」

「……どういう事だ？」

声は確^{しっか}りとしていたが檻雅の唇は僅かに震えていた。相手の言っている意味が正確に理解できない……無理解と不安が覆い被さり、思考が急速に鈍り始める。

夢生は微笑を削ぎ、冷然とした顔で檻雅の双眸を射抜いた。

「その様子だと《屠鬼》を現界させたのが玖領華檻だという事実を、アナタは知らないようね」

「馬鹿な。……まさか、《屠鬼》は人為的に発生するモノなのか……！？ それを、母が……？」信じられない、と満面に刷いて告げる檻雅。

「《檻飼い》がしてはならない禁忌。それを彼女は犯した。……玖領華檻が犯した罪はそれだけに留まらず禁忌は連鎖を始めた。その結果が　あの震災よ」

まるで血流から鼓動まで全ての機能が停止したように、檻雅のあらゆる動作が固まった。周囲の背景と重ねて見ればまるで世界の終焉を垣間見て絶望した青年に見えない事も無い。一切の音が途絶えた世界で思い出したようにゆっくりと時を刻み始める。

「……教えてくれ。母は、
玖領華檻は、十年前、一体何を過つ
たんだッ!?」
あやま

血を吐くような質問に夢生は詠うように言葉を紡ぎ返す。

「知らないのなら教えてあげる。それを知って絶望してくれると、尚嬉しいから。そう、これは、漫画や映画でよく見る『冥土の土産』って奴ね。死ぬ前にわたしの知る事実を話したげる。……その後で、殺してやるわ」

「……おい姉ちゃん、テメエ、オレの存在を忘れてんじゃねエだろ
うな? 兄貴はオレが護る。テメエなんぞに遅れを取る謂れはねエ
……!!」
い

束子が犬歯を剥き出しにして吼える様を見て、夢生は瞳を眇めて微笑を浮かべた。その笑顔に気圧されたのか一瞬だけ顔を怯ませた束子だったが、それが恥ずかしかったのか顔を若干赤らめて夢生を更に険しく睨みつける。

夢生は束子から視線を逸らすと檻雅に視線を向け直した。 穏やかな、まるで日常の中にいるのではないかと思えてしまう程に穏やかな微笑を湛え、夢生は口を開いた。

「今からする話は、わたしがお父様から教えられた話よ。……正確には、お父様が玖領華檻から聞き出した話、と云えばいいかしら」
そう切り出し、詠むように昔話を語り始めた。

十年前の或る日。玖領華檻はとある町を訪れた。標高の低い山の中腹にある地方都市で、遠くに海が見通せる景色のいい町だった。ただ遮蔽物が無く、海から叩きつけられる北風を正面に浴びるため冬になると凍える程に寒くなる町でもあった。

その町に立ち寄ったのは彼女の生業 《檻飼い》の職を全うす

るため……つまり仕事で訪れたのだった。小高い山の中腹に在るその町のどこかに、まだ生じて間もない《歪^{ひずみ}》が観測された。それを《檻》で囲うため、華檻は单身片田舎とも言える町を訪れたのだった。

町を散策し、《歪》の所在に見当を付けた華檻が向かったのは、病院。田舎と形容できる交通の便の不自由な町だったが、北に入り江を望める病院は比較的大きな施設だった。病院の中のどこかに《歪》があると華檻は調査を進めていた。

そんな折だった。病室の一つに見知った名を見つけた。華檻の同窓生、その中でも《檻飼い》になるまでは仲が良かった間柄の友人だった。

名前は解子^{とぎこ}。

幼い頃から病弱で、再会を果たした時には余命幾許と言う状況だった。甕れ果てた解子を見て華檻は何とか彼女を助けたいと願ってしまう。学生時代華檻に友人らしい友人はおらず、唯一心を許せる親友だった事もあり華檻は彼女を自身の特殊な力を用いて救う事を決心する。

《檻飼い》 生業は《檻》を自在に繰る事。《檻》と認識したモノは、自在に外せ、自在に囲える。

それ故に《檻飼い》にも破ってはならない禁忌が在った。それは何であるにしろ、囲っている《檻》を全て外さない事。《檻飼い》に寄って見える《檻》の数は区々だが、幾つにしても全て外しきる事は禁忌とされる。

それを踏まえた上で華檻は解子の《檻》を一段階だけ外した。この場合の《檻》とは生命に関する制限装置^{リミッター}だ。それにより解子は生きるための制限を一つ無くした。説明を加えるならば、新陳代謝が活発になり、運動能力などの身体能力の向上、徹底した体内の清浄化、等々の生存に関する制限が無くなり、即座に身体機能を回復していく。

そこで話が終われば何も問題は無かった。 現実、は、甘くなか

った。

解子は身体能力の向上に加えて、ある特殊な機能を身に宿す。突然変異としか判らない変事が、華檻に与り知らぬ所で始まっていた。解子も華檻同様、自身を囲う『限界』と言う名の《檻》が見え始めたのだ。この現象を鑑みるならば妥当な線が　間も無く死に至る解子の生命維持能力の急激な向上のために、身体に異常が発生したのではないかと言うところで、実際はどうだったのか解る事は永遠に無い。

解子は《檻》を外すと更なる活力を得られると気づいてしまう。即ち《檻》を外せば外す程に活力が漲る、と認識してしまう。

そして必然のように悲劇は起こる。解子が《檻飼い》としての禁忌を破る。《檻》を全て外しきった彼女は人の持ち得ぬ身体能力を授かり、莫大なる力の負担により理性が消し飛んだ。残ったのは自身だけが苦しんでいたのではないかという錯覚から、世界に対する憎悪と破壊衝動。彼女　最早異形へと化した解子は瞬く間に地方都市を壊滅させる。一夜と経たずして地方都市は地図上から消え失せる程の損壊を被った。

その凶行を止めるべく華檻は全身全霊を込めて闘いを挑み……過程は定かではないが、解子を封印する事に成功。彼女曰く誰かの助けが在ったらしいが、それとて定かではない。何より当時現場に居合わせた生存者は華檻以外いなかったとされているからだ。

ともあれ封印を施された解子は、その場に転がっていた死体の眼球に埋め込まれる。何故死体の眼球に封印を施したのか。……華檻はそれこそが弔いになる^{ひびく}と信じていたらしい。それ以上の事を彼女は語らなかった。

その時解子が《檻》を見られるようになったように、再び奇怪な現象が発生する。眼球に《屠鬼》を埋め込んだ死体が蘇ったのである。彼女の言を信じるならば《屠鬼》の龐大な生命力に当てられ、死体が再生……蘇生したのではないかと。結局この事も彼女の言を信じる他無く、確かめようにも現場は完全に《殲滅屋》に因って

葬り去られてしまう。

華檻はその地域一帯を囲った《檻》を解除すると、一時的に姿を晦まし、ある時この挟峰^{はさみね}に姿を現した。意識を失ったままの幼い男の子を連れて。

応対したのは【境会】に仕える《間術師》の一人、夢生の父親に当たる人物だった。その時に今までの話を聞かされる事になる。最後に華檻は夢生の父親に対してこう告げたそうだ。

「自身に埋め込まれた力に気づかないまま一生を終えるのが彼にとつて一番ですが、そうなるとは限りません。だからせめて気づくまでは彼に普通の人としての生活をさせて欲しい。それが私　玖領華檻として最後の願いです。どうか、お願いします……」

「……そう言つて華檻は姿を晦ませ、二度と【境会】に属する者の前には姿を見せなかった。……これが、玖領華檻と祥くんの眼に関する顛末よ」

……誰もすぐには口を開こうとしなかった。束子でさえ唸るのを止め、静かに頂垂れている。

がら、と瓦礫が崩れる音が遠くから響いてくる崩壊した町の中心で、四人は黙りこくる。顔も上げられずにただ灰色に染まった地面に眼を落としていた。蟠る沈黙はまるで心まで蝕んでいくような重たい緊張を強いる。

「……どう？　玖領家が如何に忌まわしいか、理解できたかしら？」

「……その後、華檻はどうしたんだ。ずっと……行方知れずなのか……？」

縊るような口調で呟く檻雅に、夢生は突き放すように冷淡に口を開いた。

「アナタの知つてる通りよ。逃げているのか死んでいるのか定かじやないけど、一度も姿を見せないんだから、生きてるとしても自ら姿を出そうと思つていないのは確かでしょうね。……その様子じゃ玖領の本家にも戻つてないようだし」

「……母は、持てる力を尽くして《屠鬼》を消滅させた、と聞いていた」檻雅は呻くように言を吐いた。「……同時に、その時に力を失い行方を晦ましたのだとも。……だが、真実は違うようだね。彼女は一人の人生を狂わせ、剩^{あまつさ}え《屠鬼》などと言う異形を生み出した。結末だけなら震災と言う隠語で都市を一つ壊滅させたのだろう……！」

それは泣いているようでもあった。あまりに酷過ぎる現実^{現実}に血を吐いているようにも思えた。齒を食い縛り、必死に自身の底から溢れる感情を堰き止めようとしているようにも祥には映った。

……僕は、選ばれたんだろうか。

右眼の瞼を上から押し、祥は黙考する。どうして僕の眼に埋め込んだんだ？　それが弔いになるから？　何故？　理由がサッパリ思い浮かばない。だが夢生の話では、そうする事が弔いになると華檻が信じていたらしい。それとも死体ならどれでも良かったのか。死体に埋める事にこそ弔いになる要素があったのか。

ふと視線を持ち上げると、一瞬何をしているのか解らなかったが、ゆつくりと思考が現実^{現実}に追いつき、檻雅が祥に向かって頭を深く下げているのだと察した。

「……私が謝ったところで、何の償いにもならないかも知れない。でも、それでも、身内の業だ、謝らせて欲しい。……キミの人生をムチャクチャにした私の母を、どうか、……許して欲しい……！」

深く頭を下げるだけに留まらずその場で土下座を始める檻雅に、束子が慌てて寄り添う。何とかして頭を上げようとしている束子が一瞬祥と眼が合い、すぐに心苦しうに俯く。それから束子は懇願するように顔を持ち上げた。

「……祥、いや、祥さん。オレからも、お願いだ、じゃない、お願い、です。兄貴を……兄貴の母ちゃんを、許してやってくれねエか……？　頼む、この通りだ……！」

檻雅の隣で深々と土下座を始める束子を見ても祥は困惑もせず、

かと言って深い憤りを感じるでもなく、ただ　空虚な気分を味わっていた。

その視線が夢生を射抜く。夢生はその視線を受け止めて、落ち着いた眼差しで見返してくる。

「……許してあげるの？　祥くん。彼らはアナタの人生をメチャクチャにした。アナタの人生を壊してしまいうような力を施した。アナタに纏わる人達を全て奪い去った。そんな人達を、これだけの謝罪で、　許せるの？」

檻雅を非難する言葉の羅列に束子は夢生を睨み上げたが、隣で静かに頭を下げ続ける檻雅に倣い、自身も嫌々ながら頭を下げ戻す。

……許せるのか？　許せないのか？

祥は一瞬何を言われたのか理解できない。今の話はそういう次元の話だったのか、という想いが先立つ。許せなかったら、彼らはどうするつもりなのか。許されたら、自身の運命は変わるのだろうか。……何も変わる訳が無いのだ。これは単なる形式だけの謝罪。それ以上の意味合いなど無い、そういう通過儀式に過ぎない。

そして何より祥はそれ以上に気に掛かる事があって、そんな話に思考を割けるほど融通が利かなかった。

「……夢生ちゃんはその事を知って僕と付き合ってたの……？」

……いや、知って僕と付き合い始めた……違うな、全てを知った上で、僕に近づいたの……！？」

想像するに恐ろしかった。常に監視下に置くために近づき、祥の好意を利用して接近し、あわよくば一生監視し続けられたかも知れないのだ。その時祥は単なる物と化す。実験動物と言い換えてもいい。危ないから監視をして様子を見ようと言う意志の許に、祥の好意を吸い続けて、監視される物として見られ続けるのだ。

裏切られた、と言う意志が祥の心中を占め始める。何も信じられなくなる、その過程を今歩み始めた気がする。

「……祥くんの言うとおり、わたしはお父様に命令されて祥くんに近づいた。勿論監視をするために」

「そんな……」

「でも、……信じてくれないかも知れないけど、わたしは、祥くんが本当に好きなの。祥くんが好きって事だけは、信じて欲しい……！」

胸に手を当てて、切なそうな表情で迫る夢生のその言葉が真実なのか、祥には最早見当が付かなかった。全てが曖昧な嘘のようで、逆に峻厳たる真実のようにも感じられる。どれを信じてどれを疑えばいいのか、段々と判らなくなってくる。

同時に、全てが判らなくなった時こそ狂気に吞まれるんじゃないかと、我に返る。

今見ているモノが現実リアルだと信じなければ、何もかもが虚構フィクションに成り下がる。夢生の話が本当なのか、今見ている現実が虚妄なのか、その判断は自身以外の誰にも下せない。自分が夢だと信じればどんな事実でも空想のように思えるし、現実だと強く思えばどんな虚構でもそこに自身を確立できるだろう。

僕は、僕を信じる。

「……僕は、夢生ちゃんが好きだ」

自分の本音確かめるように言葉を選んで紡ぐ。

「何て言うか、僕には勿体無い位に可愛いし、いつも僕を困らせてばかりだけど、そんなトコも好きだし、何だか猫みたいな性格も、好きだ。好きな所を言い出したら限キリが無いけど、とにかく、好きなんだ。……僕の過去を知っている夢生ちゃんだって勿論 好きだ」

「祥くん……」瞳を僅かに潤ませて顔を華やがせる夢生。

「僕は、キミを信じる。僕も夢生ちゃんが好きだ」

言って、清々しい気持ちをそのままに視線を檻雅へと向ける。頭しんを垂れたまま身動き一つしない姿を見つめて、祥は声を掛けた。

「檻雅さん、頭を上げてください」

「併し……」

「過ぎた事を悔やんだって仕方ないんです。それに僕はこの通り、今まで普通の人として人生を歩んでこられた。それだけでも感謝し

ないといけないんです。……それに、親がないのは檻雅さんと同じ事じゃないですか？」

ポツリと漏れた言葉に、檻雅は俯いたまま血が滲む位に唇を噛み締める。

祥は失言だったかな、と一瞬惑ったがそのまま言葉を続けた。

「……許せるか許せないか今ここで問われても、僕には応えられません。だから、……生きてここを出られた時に結論を出します。ですから……今はここを出る事だけを、考えたいんです」

今許そうが許すまいが、死んでしまえば全て水泡に帰す。ならば結論は後に回し、今ここにある命を救う術を選択する。そう、祥は提案した。

檻雅は居た堪れない感情を滲ませていたが、それもすぐに消し去り、一つ大きく頷いた。

「分かった、確約しよう。キミをここから脱出」

「いいえ、約束を契る必要はありません。わたし、御淵夢生がアナタを脱出させますから」

夢生がそう宣言した直後、祥の姿が廃墟と化す町から脈絡も無く消え失せる

捌章 / 《間術師》

無残な建造物の残骸だけが残る挟峰はさみねの市街　そこには先程までいた人間が消え去り、三人分の影が互いを牽制するように立ち尽くしていた。

「……キミは、私をこの場で罰したいようだね、　　《断空》だんくう」
始めに口火を切ったのは口の端に血痕が滲んでいる、若干疲弊を感じさせる檻雅おりまさだった。

束子たばねがやっと自身の活躍の場を見出したように犬歯を再び剥き出し始め、刹那にでも夢生むうへ飛び掛かれるように重心を移動させる。夢生はその手で祥さちを消し去り、　否、瞬間移動させ、自身は二人の元凶を相手に酷く醒めた眼差しを向けていた。

「罰する？　……いいえ、わたしはアナタを罰したいなんて考えてない。だってそうでしょ？　祥くんをああしたのはアナタではなく、アナタの母親なんだから」

「……では？」探るように檻雅が先を促す。

「　憎い。わたしは単にアナタを懲こらしたいだけ。アナタの母親に出来なかった復讐をアナタで補うの。……だからこれは罰じゃないわ。単なる、　八つ当たり」

冷然と告げる夢生には純然たる殺意しか感じられなかった。爬虫はちゅう類染みた酷く冷徹な眼差しに、《魔狗》ヘルハウンドである束子ですら後れを取りそうになる。

檻雅は努めて冷静に、そして緩やかに言葉を返す。

「……私を、どうするつもりだ？」

「死んで貰もらう」冷酷なまでに即答する夢生。

「テメエ！　さっきから調子ブツ扱こいてんじゃないぞー！！　幾ら《間術師》まじゆっしだからってオレは絶対に負けねエ！　テメエをブツ殺しても、兄貴を　」

束子の声が、口を噤くんだ訳でもないのに突然途絶える。驚いたよ

うに檻雅が束子に視線を向けると、宙に浮かぶ透明な筐体の中に束子の体がすっぽり納まっていた。中で怒号を張り上げて暴れているようだったが、その音が外に漏れる事は全く無かった。まるでそういう映像を見せられているようでもある。

「弱い犬ほどよく吼える。……それが事実かどうか、試してみようかな？」

詠うように言を紡ぐ夢生に、檻雅は緊張に冷や汗を掻き始め、その動向を見逃さないようにと瞬きすらも出来なくなっていた。

「……束子くんは関係無い筈だろう？ 華檻かおりの娘である私が憎いのだろう……！？ 束子くんは、解放してくれ」

そう言いながら、悟られないように右手を持ち上げる。首筋に在る不可視の首枷 《檻》さえ外せれば、《間術師》である彼女よりも高速に移動できる筈。それが実現すれば彼女の機先を制する事が出来る筈でもあった。

夢生はその策に気づいていないのか、浮かぶ透明な筐体に閉じ込められた束子へと指を伸ばす。

「忌まわしい事だけど、《間術師》も《檻飼おりかい》も基本は同じ。【境会きょうかい】に仕えているんだから当然かも知れないけどね。……《間術》を応用すれば《檻》も操れるんだよ、当代さん？」

まさか、と檻雅は夢生の為そうとしている事を瞬時に察する。そんな事をすればどうなるか判っている筈なのに

檻雅は咄嗟に手を持ち上げ、人に科せられた『限界』の《檻》を一つ解除した。

だがその刹那に事は終わっていた。透明な筐体越しに束子の首枷に触れた夢生は、《檻》全てを、外しきる。

ばぎんツ、と破砕音が響いてくるような錯覚を全身で感じる檻雅。正気とは思えないその行為に更なる恐怖と焦燥を懷く。透明な筐体に閉じ込められた束子が正気を失ったように先程とは別種の暴れ方をし始め、やがて 強固と思われた筐体ヒツキに輝ヒツキが走り始める。

「……鎖が外れた《魔狗》だと《隔離かくりの柙ひつぎ》でも保てないか。

さ、これからすべき事は判ってるよね？ 呪縛から解放された《魔狗》に、喰い殺されちゃえ」

言うだけ言って夢生が忽然と消え去ると同時に、透明な筐体が消失する。先程までの愛らしい女の子ではなく、全身を灰色の毛で覆い尽くした、体長が檻雅よりも大きい二メートル近くの凶悪な犬歯をぎらつかせた異形が、悪路と化したアスファルトを毛むくじやらの素足でヒタヒタと移動 檻雅へと接近する。

檻雅は自身の《檻》を外した状態のまま強烈な焦燥を覚えていた。不味過ぎる。現状はあまりに酷過ぎる。予想外の展開が立て続けに起こり過ぎた。だが、とも考える。《地獄》の中で常識を期待する方が間違っている。これこそが《地獄》の在り様なのだから。

「……まさかキミと首の刈り合いをしなければならなくなると思ってもみなかつたよ、 束子くん」

独り言のように呟きを漏らす檻雅に、束子は既に理性の欠片も残っていないようで、化物染みた速さで

灰色の膜に包まれた太陽が見下ろす下界 挟峰の市街の一角。崩壊を免れた五階建ての雑居ビルの屋上に人影が在った。満身創痍と言った感じの少年 《司狂》^{しきやう}は宙を革靴で音を立てて歩く男を視界に捉えていた。

大蛇染みた双眸に知的な印象を与える学者然とした相貌の男は、亀裂があちこちに入り窓硝子が殆ど破碎したビルの屋上の更にその上空を舐めるようにして歩を進め、顎を摘まんでいた指を離し大仰に両腕を広げた。演劇染みた仕草に《司狂》は苛立ちを感じつつもその様を眺め続ける。

「《司狂》ともあろう者が無様だな。《魔狗》如きに後れを取るとは……些か見込み違いだったか？」

演説のように滑らかに言を走らせる《檻破り》^{おりやぶ}に、《司狂》は苦虫を潰したような声音で応じる。

「……言い訳をする気は無い。単なる力量と経験の不足だ。知識として《檻》や《魔狗》を理解したとは言え、実際に戦闘を行うとなれば圧倒的な情報量不足は否めん」

「失敗から物を学ぶのは人の良き所だ。想像を打ち負かすのは容易だが、実像を屠るには些か実力不足だった、そう言いたいのかね？」

「……オマエは、どうやって《檻飼い》を破ったんだ。《檻飼い》を単騎で狙ったのか、或いは《魔狗》共を先に潰したのか」

「先人に教えを乞うのも悪い手ではないな。……だが、私の場合と貴様の場合では状況や敵の武装が違う。それでもいいのかね？」

《司狂》が小さく顎を引いたのを見て、《檻破り》は皮肉った笑みを口許に刷いた。

「私の場合《檻飼い》に近衛はいなかった。単身で《歪》^{ひずみ}に《檻》を囲いに來たのだらうな。故に一對一の真つ向勝負だよ。そして私は《檻飼い》に打ち勝ち、晴れて自由の身 《檻破り》となった。これで話は終わりだ。まだ私の知識を欲するかね？」

「……無理を承知で言わせて貰っていいか」

《司狂》が若干眼を伏せて呟く様を見て、《檻破り》は興味深そうに瞳を眇める。

質問ではなく、確認か。……くく、あくまで自身に主導権を握らせたいのか。此度の《司狂》 《考える狂人》は中々にして興味に尽きぬ奴だ……

「無理と分かつて尋ねるとは、貴様も中々にして意地が悪いな？」

「《檻飼い》を殺すのを、手伝ってくれないか」

告げる《司狂》の瞳に惑いは無い。言葉は下手に出ているようだったが、その語調には僅かな否定も許さないと言う強固な意志を孕んでいるように思えた。

《檻破り》は宙に立ち止まったまま、顎を撫でるように指を這わせる。

「……ほう。私に助力を乞うか。……妥当だな。だが断った場合、貴様はどうするつもりだ？」

「……その時は已むを得まい。オマエを、殺す」
く、と唇が笑みの形に釣り上がるのを自覚しつつ、《檻破り》は言を切り返す。

「《檻飼い》、そして《魔狗》さえも屠れぬ《司狂》風情が《檻破り》たる私を……殺す？　面白い、実に面白いぞ《考える狂人

》よ。さア、どうやって私を殺す？　その拳でか？　或いは」

「……オマエの助力が無ければ、どの道俺はこの《地獄》から脱け出す事は出来ない。俺に残された道は、《殲滅屋》に殺されるか、オマエを殺して《殲滅屋》に殺されるか、そのどちらかだけだ。：

俺がこの《地獄》を生き抜くには、オマエの力、或いは　知恵が、必要だ」

《檻破り》の発言を遮ってまで吐き出された言葉でも、《檻破り》は冷笑を浮かべたまま動じない。

「実に判り易い構図に今更気づいた訳かね。否応無く、貴様は私に乞う訳だ。見苦しい生き様だな？　《司狂》。先程までの思慮深い頭はどこに消えたと言うのだ？」

「……見苦しかろうが醜かろうが構っていられない。単に俺は生きてこの《地獄》を出たいだけだ。そのためには犬も喰わないような矜持など必要無いし、必要とあれば何だってする。……それが生きると言う事だからだ」

……よもや生死を愚弄するような存在である《司狂》に諭されるとは……益々面白い。

内より出てこようとする暗い感情を抑えつつ、《檻破り》は人差し指で額を触り、顔全体を隠すようにして酷く醒めた眼差しを《司狂》に投げた。

「生きるために行動を起こすのは生物として正しい在り方だ、そこに何ら問題は無いな。　宜しい。貴様に我が力を貸してやってもいい。……ただ、条件がある」

「……何だ？」探るように瞳を眇める《司狂》。

「私が提示する唯一の条件は、　私の指示に従う、それだけだ。

難しい事ではあるまい？」

「……出来る限りは遵守すると誓おう。……だがあまりに無謀な案件の場合、俺は自身の力量を鑑みて断る事もあるだろうな」

「我が身可愛さに契約を破棄するか。……ふむ。まあ、いいとしよう。そうでなくては貴様はどの道私か《殲滅屋》に消される末路を辿るのだから。……さて、私が提示する条件 指示と言うのはたつたの一つだ。それは」

「 夢生ちゃん？」

突如として風景が移ろい、周囲が先程までいた崩壊した町の中ではない場所に飛んだのを祥は感覚として感じていた。

どこかの部屋の中のように周囲は壁に囲まれている。居間なのか卓袱台が部屋の中央に鎮座し、上にはポットやお茶菓子が置かれている。部屋の隅にあるテレビは砂嵐を映し出し雑音だけが延々と部屋の中に響いていた。祥の背後に引き戸があり、隙間から覗くと先には廊下があるようだった。八畳程の部屋には他に昔見た事がある健康器具があったり小さな小物入れがあったりと、若干散らかっているようにも映った。

何と無くあちこちに視線を向けていると何と無く思い出してきた。

ここは 夢生ちゃんの家だ。以前来た時 数ヶ月前に遡るが、その時とあまり変わっていない。地震の影響か、あちこち物が落ちていて散らかっているのと物が倒れている事以外は、殆ど変わり無い。お菓子のような甘い匂いが充満しているのも以前来た時と同じだ。

どうしてここにいるのか祥には理解が及ばない。先刻まで崩壊した町のと真ん中で、妙に現実味の薄い話をしていた筈なのに。一瞬前の事が思い出せず、祥は自身が夢遊病者、或いは精神異常者になったように怖くなった。

「……夢生ちゃん？」

人の気配の絶えた部屋でか細い声を上げる。返答は勿論無い。

音が、何も無い。

テレビの発する雑音さえ除けばきつと完全な静寂に包まれているに違いないと、祥は断言できる気分だった。地震の後とは思えないような一切の音が遮断された世界で、祥はここを動くべきか否か惑う。人の家を勝手に動き回るのは、それも彼女の家を歩き回るのは

……

どうして、僕はここにいるんだ？

思考が堂々巡りを始めようとしたところで、また自身の眼を疑うような現象が起こる。

何の脈絡も無い。騙し絵のように、夢生が眼前に現出した。

「夢生ちゃん！」

「……あれ、祥くん。漁らなかつたんですか？」

「漁る！？　ぼ、僕はそんな事しないよ！」

「ふうん……ま、いつか。祥くん。祥くんはここで待ってて。

わたしが一人で《歪》を《檻》で囲ってくるから」

にこ、と控えめな微笑を浮かべて告げる夢生に、祥は自分の耳を本気で疑った。

「夢生ちゃん、《檻飼い》だったの！？　さっき、《間術師》とか言ってなかった……？」

「……そっか、祥くんはもう色々聞いちゃったんだ。……うん、いっかな、別に話しても。何より……わたしの事、もっと知って欲しいし……？」

自分の胸に人差し指を走らせる夢生に、祥は唾を飲み込みながら続きを待った。

夢生は頬を若干赤らめた祥に満足したのか、ふふ、と笑みを零し、真顔に戻る。

「わたしも、玖領檻雅も、そしてあの《魔狗》、更には《殲滅屋》だってそう。皆【境会】に所属する人間なの。……まあ所属が違ってただけで、やってる事は皆同じなんだけどね。

《檻飼い》は《歪》の《檻》を囲う専門職。それだけに一度囲った

《檻》は頑強だし、ちよつとやそつとじや《狂皇》^{きやうきやう}にも破れない。でも逆に《狂徒》^{きやうと}や《司狂》との戦闘には劣るの。だからこそ《魔狗》^{ゴレム}や《式神》を連れ立って行動する。玖領華檻のように単身で活動する《檻飼い》は稀なの。

《殲滅屋》は《地獄》の中を駆逐する専門職。《檻》を扱う事は出来ないけれど、《狂徒》や《司狂》との戦闘で大いに活躍する。人を殺す、物を壊す、それだけに特化した人間で、戦闘の面だけを見ると無敵の象徴なの。それだけに《檻飼い》の依頼は多い。

最後に《間術師》だけど、《檻飼い》のように頑強な《檻》を扱う事は出来ないし、《殲滅屋》のように戦闘に特化している訳でもない、悪く言えばどつちつかずの職なの。でもそれを裏返せば、《檻飼い》程ではないけど《檻》の概念を扱えて、《殲滅屋》程ではないけど戦闘も熟せる^{こな}。言い換えれば万能^{オールマイティ}なの。

その三つの専門家を雇っているのが【境会】と言う組織。《歪》の発見、修正をわたし達に依頼し、それをわたし達が仕事として行う。だから玖領檻雅や玖領華檻とは、同業者に近い関係だけど……わたしはもうそんな裏側を見限ろうと思うの」

「……見限る？ ……夢生ちゃんは【境会】を裏切る、って事……？」

「裏切る……うん、そんなもんかも。……わたしは、祥くんとかって、裏側にいるのが嫌になっただ。祥くんがどれだけわたしを好きになっても、わたしがどれだけ祥くんを好きになっても、例えば結婚したとしても、子を授かったとしても……ずっとわたしは裏にいるんだよ？ 祥くんをきつと心の底からは愛せない。念頭にあるのはずっと……監視。祥くんを見張るために祥くんを好きになるなんて、祥くんを本当に好きになっちゃったわたしには、もう出来ない……」

微笑んでいる筈なのに、祥には夢生が涙を流しているように映った。口調もいつもどおり穏やかなのに、とても苦しそうに聞こえる。泣き叫んでいるようにも、感じる。

抱き締めたいと思った。華奢そうな体を力一杯抱き締めたいと祥は思ってしまった。

夢生は腕を伸ばせば届く場所に枯れ木のように佇んでいる。触れれば砕けてしまいそうな、氷の結晶であるかのように、儚く。その眼差しは祥を柔らかく見つめていた。

「……わたしの力でも、《檻飼い》の《檻》を解く事は出来ない。でもそれだって時間の問題なの。だから最後に《歪》をわたしの《間術》で閉じて……一緒に、逃げよう？」

長い独白が終わったのだと祥は何と無く感じた。縋るような眼差しで、でも返答に怯えるように瞳を潤ませ、ジツと命令を待つ仔犬のように祥を見つめている。その口はきゅ、と小さく引き結ばれていたが、何かを言いたそうに細かく動いているのが判った。

「……僕は、」

惑う事なんて、無かった。祥はその華奢そうな体を抱き寄せ、頷いた。

「夢生ちゃんに、付いてくよ」

玖章 / 《檻破り》

瓦礫が破砕する轟音が走り抜け、亀裂が入ったビルが死に急ぐように倒壊していく。地上には粉塵が舞い地鳴りが響き渡る。崩落したビルの隙間から人影が躍り出る。

外套は千切れ、下に着ていたシックな色合いの服のあちこちには血痕が滲み、露出している肌は粉塵のせいか白く汚れていた。

檻雅は立ち並んでいた建物の屋上を跳び移り、敵の攻撃範囲から何とか逃れようと移動していた。

粉塵の中から異形が姿を現す。狼人間ワーウルフと言う単語が似合いそうな二足歩行をする狼染みた人型が前傾姿勢で檻雅の影を追う。剥き出しの犬歯に、口の端からは涎ヨダレが飛び散る。

檻雅は途中で足を止め、自身の《檻》に触れながら一瞬だけ黙想に入る。

……束子たはねくんには理性は残されていない。視界に映る私を狩る事だけが本能として残されている。……ならば再び『理性』と言う名の《檻》を囲うだけ……！

束子は刹那的に接近して拳を唸らせる。空気が爆発する程の轟音が弾け、檻雅はその直前に自身の《檻》を更にもう一段階解除し、身体能力を加速する。

刹那に交錯クロスする手と拳。

檻雅の肩が、豆腐のように抉り取られた。

濁流のように檻雅の口の端から血液が溢れ出、そのまま地面に膝を突き、横たわる。

「……あに、き……どう、して……」

檻雅の視線の先 異形の首筋には、確かにだが他の誰にも見えない、首枷が掛かっていた。異形の瞳に理性の光が宿ったのが虚ろに見える。

「……キミを取り戻すには、刺し違えるしか、無かったんだよ……」

呟く檻雅の口調に力は無い。どれだけ《檻》を解放しようと、結局相手に《檻》を科せる手段は一つだけ 相手に《檻》を科す部分に触れるしかない。異形は檻雅の命を狙って直線的な攻撃に絞ってくる。ならばその瞬間だけ自身の《檻》を外せばいい。狙つてくるとすれば頭が心臓。そこさえ外させれば即死は免れる。そこだけに集中して檻雅は異形の攻撃を躲す。同時に研ぎ澄ました感覚を以てして、刺し違えるように異形の首筋に手を置き、《檻》を科す。それだけの事を一瞬の内に言い、結果檻雅は右肩を抉り取られ、即死だけは免れた。

「兄貴っ！？ オ、オレどうすればいいっ！？」

狼狽し始める異形 殺気は消え去り、徐々に毛も薄くなり、小さな女の子の姿に戻り始める。 狼人間と言う禍々しい姿からは想像も出来ないが、人に置き換えると十歳にも満たないらしい。

檻雅は自身の首筋に触れ、静かに片目を瞑ってぎこちなくウィンク。頭からの出血が重なり、まるで眼が潰れてしまったかのように映る。

「《檻》を外せば生命維持機能が向上する……それに賭けるしかない……その時は《檻》を戻した時の反動が怖いけどね……」

身を起こさずに《檻》を外し 全力で身体機能を治癒へ回す。 抉り取られた肩が徐々に肉を盛り上げて再生を始める。

血色が徐々に戻り始め、落ち着いて身を起こすと、異形から可愛らしい女の子へ変身を遂げた束子に視線を向けようとして、

「《魔狗》^{ヘルハウンド}も、存外役立つようだな」

呆気無かった。檻雅の視界に映った映像は、現実味がまるで感じられなかった。

虫でも潰すかのように束子の頭が踏み砕かれ、裸体がアスファルトの上に転がる。

凝然と瞳を皿にしてその光景に眼を奪われた檻雅は、束子をいとも容易く殺めた存在をゆっくりと見上げる。

「私の手を汚さずに事を済ませると思ったが……獣風情では人間は

屠れぬと言つ証を垣間見たに過ぎない、か」

濃紺の布衣を纏った、若い雰囲気の男だった。黒く艶がかった総髪に、三白眼の黒い眼。爬虫類　大蛇のような、と形容できる顔立ちと、人の形を模した人外のように映る存在だった。それが宙に足を下ろし、宙を歩いている。　檻雅を、見下す。

「……オマエは……？」乾いた声が檻雅の喉から空気のように漏れ出る。

「私かね？　ふむ、人間はとかく相手の名称を気に掛けるな。私とて人より逸したが未だにその傾向から脱け出せておらぬしな。

そんな論理は^{ロジック}どうでもいいな。私の俗称は《檻破り》^{おりやぶ}。貴様ら【境^{うかい}会】の狗がそう名づけたのだろう？　《檻飼^{おりか}い》よ」

「《檻破り》……！？　ではオマエが《司^{しきやう}狂》に入れ知恵を……！」

修復された肩より先　腕から指の細部にまで再生した右腕を庇うように檻雅は左手で右腕を抱き、その場より後ずさる。足が震えて、体力の限界が近づいている事を悟る。このままでは　死に至る……！

一方《檻破り》はと言うと悠然と宙を闊歩し、革靴が地面に触れていないと言うのに、足音を立てて《檻飼い》の方へと歩を進めていた。

「だが此度の《司狂》は些か経験が不足していた。貴様の《魔狗》を屠る程の力を得る前に貴様が来訪したのだからな。……何れにせよ《司狂》が《魔狗》を屠れる程の次元になるには、まだ時間が足りぬのでな、仕方なく私が出向いてやったまでだ」

「……」言葉を失ったまま檻雅はとにかく思考していた。活路を見出そうとしていた。

「貴様が何を考えているのか私には計れぬがな、抵抗は無意味と悟れよ？　《檻飼い》。圧倒的なまでに力量に差があるのだ、如何に貴様が《檻飼い》と言えど私にはどうあっても敵わん。　そう、どうあっても、だ」

「……そうだね。私も、そう思っていたところだ」

ポツリと零れた言葉に《檻破り》が眉根を寄せ、不機嫌そうな面持ちになる。檻雅はまだ彼が自身の力の全てを知っている訳ではない、と何と無く悟る。

「ほう？ まだこの現状で活路を見出したか。見上げた度胸だ、

恐れ入ったよ。是非とも拝見致したい」

「……いや、見せる訳にはいかないな」

「？ 出し惜しみは即ち死、と言う結論が出なかったか？ 或

いは、そうだね。《屠鬼》^{とぎ}となつて、本能のままに私を打ち砕く、とかかな？」

三日月の形に唇が歪み、即ち笑みの形で告げる《檻破り》の発言に檻雅は言葉を失っていた。

《屠鬼》になれば確かに《檻破り》を殺せる程の膂力を得る。併しその時自身の理性は無い。ただ飽くなき破壊に走る怪物と化す。そうなれば最早《地獄》や《歪》^{ひよみ}どころの話ではなくなる。併し《檻破り》を相手にこのまま戦えば結果は見えている。

活路は実質絶えていた。後は《殲滅屋》^{せんめつや}が来るのを待つだけ。自分自身の《檻》を解放して、ギリギリまで《檻破り》を引きつけるしかない……

絶望的な闘いだつた。勝負に勝てる訳が無く、殺すためだけに戦い続けなければならない。はたと絶望の種に気づく。《司狂》の姿が無い。彼がここに合流すれば、その時点で自身の命は絶たれたと考えるべきだ。

併もあの《司狂》は頭脳派だつたように思える。考えて行動し、最善を尽くし、無駄無く攻撃を加えてくる……その彼が《檻破り》だけに私を殺害させるか？ 彼ならば恐らく確実に殺害を目論む筈。近くに待機しているのではないか？

廃墟が続く、五、六階建ての雑居ビルなどの建造物が幾つか立ち並ぶ市街で、あちこちから視線を受けているような錯覚を覚える。どこからか判らないが、猥染みた眼差しで常に隙を窺っているのだ

はないかと。些細な瓦解音が神経を尖らせる。

「その様子では何の策も無いようだな、《檻飼い》よ」

「……」視線を逸らさないように、周囲に気を配る檻雅。唇を引き締め、歯を食い縛る。

「では死に逝く者に一つ話を聞かせてやろう。死ぬのはそれからでも遅くあるまい？」

「……？ 話、だと？」

突然何を言い出すんだ、と檻雅は怪訝に眉根を寄せる。《檻

》の解放限界時間を長引かせるために長広舌かちやうごうぜつと更に訝りを深める。

《檻破り》は檻雅の険しい眼差しを平然と受け流しつつ話を始めた。

「私は今は《檻破り》という立場だが、元は貴様と同じ人間だ。《歪》の干渉を受けて《司狂》となり、《檻飼い》を葬って《檻》を逃れ、有体に言えば『自由』になった。あらゆる呪縛より解放された訳だ。人間と言う枠に囚われる事は無い。故に寿命も無いし、

肉体が朽ちる事も無い。言わば、最早私は神に近づいたのではないか、とさえ考える事もある」

「……人は人で無くなった時、自身を神と想像するのはよくある事らしいぞ、《檻破り》。自身が特別なモノと思い込み、人より優れたモノであると、錯覚する」

呻くように怒りをブチ撒けるように切り返す檻雅に、《檻破り》は驚いたように片眉を持ち上げ、それから嘲弄するように鼻を鳴らす。

「そうとも、これは錯覚だ。私は神ではない。だが人でもない。では何だ？ 妖精か？ 天使か？ 或いは 悪魔か？ 否、どれでもない。私は既にその域を逸した、『そういう存在』としか形容できないモノだ。……私が語りたい話とはその過程だよ。その過程に意味がある。貴様と、私の接点か」

自身と檻雅に向けて指を振る《檻破り》に、檻雅は不快感と共に疑念が浮かび上がった。接点？ そんなモノ、在る訳が無い。

《檻破り》は宙に腰掛け、悠然とした動きで檻雅に視線を注ぐ。

「私が人であった頃、私は死に掛けていた。病気……不治の病と言われる難病だ。完治する見込みは無く、進行を遅らせる事しか出来ない、酷い病気だ。私は死を恐怖した。死にたくない、そう思うのは人間として、動物として、生物として、自然な思考だ」

語りながら、『檻破り』は檻雅の動向を窺い続ける。檻雅は常に攻撃を仕掛けられる体勢だったが、動き出す事は無かった。少しでも時間を稼がなければ、『殲滅屋』が来るまで持ち堪えなければ……。だが『殲滅屋』とどこにいるか判らない。来るのは一分後かも知れないし、十時間後かも知れないのだ。今は信じて待つ以外に手は無かった。

「そんな時だよ。私は偉大なる『狂皇』に逢った」
誕生日を迎えた子供のように、とても嬉しそうに『檻破り』は継げた。

「私に力を授けて下さった。そう、私はその力を『魔法』と認識した。故にそれは『魔法』となる、そこまで絶対的な力だ。……それに間が良かったのだよ、とても」

「……間？」檻雅が相槌を打つように、鸚鵡のように呟いた。

「そう、間だ。貴様は知っているのではないかね？ 丁度そう、十年前の事だ」

どくん、

檻雅の瞳が限界まで見開き、『檻破り』の姿を網膜に焼きつけんばかりに睨み据える。

『檻破り』はその仕草を滑稽そうに見つめ、先を更に継げる。

「思い出したかな？ 貴様は馴染みがある筈だ。その当時私の『地獄』に一人の女がやって来たのだ。そう、貴様のような『檻飼』だ。名を 玖領華檻、と言ったかな？」

檻雅の足が、地面を抉り蹴る。

刹那的に『檻破り』との距離を殺し、その喉へと指を走らせる。

機能停止の『檻』を掛けようとしたが、その指が熱を帯び、『檻破り』に触れる間に手首諸共爆ぜ飛んだ。

併し痛みは無い。檻雅の右手の指は早送りするように再生を果たし、再び《檻破り》の喉目掛けて這い伸びる。次こそはその首に枷を嵌めようと、決死の覚悟で。

「そうそう、その意気だ、《檻飼い》」

指を躲すように高く跳び上がり、睥睨するように地上を見下ろす。残骸のような下界を見下ろしながら、《檻破り》は自身を見上げる《檻飼い》に嘲笑を浮かべる。檻雅は灰色がかった靄が掛かった空に浮かぶ《檻破り》を睨み据え、力の限り声を轟かせる。

「嘘を吐かすな、この下種が！！」

「嘘？ …… ほう、どこが虚言だったのか、それを証明してみせよ、《檻飼い》」

楽しげに廃墟と化した下界へと声を掛ける《檻破り》に対し、犬が遠吠えするように頭上を見上げて声を張り上げる檻雅。

「オマエの話と私が知る事実に食い違いがある！ 出鱈目を吐いたのはやはり単なる時間稼ぎか、《檻破り》！！」

「時間稼ぎ？ それは貴様の方ではないかね？ 貴様にはいつだって私を攻撃できる機会チャンスがあった。併しそれを全て賭してでも、私の話に耳を貸していた。それとも狂気の塊の与太話に付き合える程、貴様は寛大な心の持ち主だったのか？ だとしたら失礼した。私はてつきり、《殲滅屋》がここを見つけるまでの暇潰しだと勘違いしていた」

全てお見通しだったと言う事が……！

檻雅は齒噛みしつつも、頭上に浮かぶ憎悪の塊へと怒声を張り上げる。

「オマエの企みは何だ、《檻破り》！ オマエは私に、一体何を望んでいる！？」

「自暴自棄に陥るのは得策とは言えないな、《檻飼い》。自暴自棄に陥ったと見せかけるのも同義だ。それでは私からは何も得られんぞ、物事は常に持ちつ持たれつだ。交渉次第で返答も有り得る。…そうだな、私が貴様に望むモノと言え、説明、だな。私の話の

どこに虚言が含まれていたか、その説明を願いたい」

「巫山戯るな！！ 私の母 華檻は、《地獄》より脱出し、刻木
祥さちと言う名の少年を《間術師まじゅつし》の許まで送り届けている！ オマエ
が母の事をどこで知ったのかは知らないが、オマエは母を殺してな
どいない！！」

「ほう、その話を知っていたのか。では訊くが、何故私が
《檻飼い》や《殲滅屋》の事を知っていると思う？」

はた、と檻雅の怒声が止む。

そう、何かがおかしかった。《司狂》が《檻飼い》を殺害して《
檻》を出ると、確かに《檻破り》と呼ばれるようになる。だがそれ
は【境会】でのみ使われる渾名コトナ。何故その張本人である《檻破り》
がそんな事を知っている……？

それだけではない。《檻飼い》の他にも《殲滅屋》や《魔狗》の
事さえ把握している。明らかに【境会】の人間しか知らないような
《檻》の効力にまでも理解が及んでいるように感じられる。内
通者がいたのか。

「では、最後の種明かしをしようか、 我が娘、檻雅」

ずる、と《檻破り》の顔が崩れ、その下から 幼い頃に見た、
華檻の顔が現れた。

「……はは、うえ……？」

驚愕のあまり言葉が出てこない。思考も全てが白紙と化し、全く
物事を考えられない。幻だとしても、夢だとしても、もう二度と逢
う事は無いと思った人物が現実に現れた時点で、最早正常な思考で
いられる筈が無かった。マトモ

刹那的に、彼女が本物の玖領華檻である筈が無いと断じる自
身を自覚する。彼女はこんな事をする人ではなかった。誓っても人
を欺き、騙し、嘲るような下劣で非道な人では、決してなかった！
だが……あまりにその雰囲気は、檻雅の知る華檻のそれだった。
華檻としか言いようの無い空気に、その声、口調、仕草。幻想にし
ては、あまりに現実味を帯び過ぎていた。

「檻雅、大きくなったわね。……昔の私そっくりに、育って……」

「う、嘘だ……母上は、……そんな、筈は……っ！」

「信じられないでしょうけど、私は、華檻よ。玖領の《檻》を継ぎし者。……いえ、信じない方がいいかも知れない。私は既に人外へと堕ちた。もう《檻飼い》としての矜持^{プライド}を捨てた、成れの果てなのどこか諦めた雰囲気^{雰囲気}を漂わせ、髪を指で引つ張る仕草をする華檻は荒廃した地上へと舞い戻り、視線を落として檻雅の前に立つ。

檻雅は狼狽する。その雰囲気、空気、声、口調から仕草の細部までが、華檻のそれと同じだった。全てが遠い記憶の頃のままの母親だった。その行動全てが檻雅を惑わせる。

「《檻破り》……！　どこまで私を愚弄するつもりだッ！！」

自身の《檻》を更に一段階解除し、華檻へと刹那的に接近する。拳を唸らせ、《檻破り》の顔を　穿

「……………ッ！！」

「……殺さないの、檻雅？　私は、アナタの《魔狗》を殺したのよ？　《檻破り》として《司狂》に【境会】の話もした、裏切り者なのよ？」

華檻の眼前で止まった拳を下ろし、檻雅は彼女の胸倉を掴み上げた。ギリギリと首を締め上げていく。顔を怒りと憎悪で真っ赤に染め上げ、実の母親の顔を睨み上げる。

「何が望みだ……ッ！　私を弄^{もてあそ}んで楽しいか……ッ！！　母上よ……！！」

「　檻雅。そう簡単に信じてはダメ。先刻までの私を忘れたの？　私は《檻破り》としてアナタの《魔狗》を殺め、アナタまで手に掛けようとした……その私を信じるのは、狂気を認めるのと何ら変わり無いわ」

「では何を信じると！？　ここまで追い込み、嘲り、弄んで、私に何が残されている！？　抵抗する事すら叶わず、ただ朽ちるか暴走に走るかの選択肢を、私に選べと申すつもりか……！」

血を吐くような語調だった。泣き叫んでいるように見えるが、檻

雅は気丈にも齒を食い縛り、必死に嗚咽を堪え、涙を留めていた。あまりの苦しさに周囲にまでその気持ちを伝播する気迫があった。

だが それでも、彼女には届かない。

「……それが絶望という感情よ、檻雅。私も一度それを感じて、堕ちた。それを感じた後はいつだって空虚なもの。世界に生きる孤独を覚え、正気を、失うの」

どくん。

今、やっと分かった。彼女は、母親では 玖領華檻ではない。同じ声で喋っても、同じ仕草をしても、同じ雰囲気、空気を纏つても、それは全くの別物だ。まるで 思想が違う。

彼女は やはり、

「――」

檻雅は咄嗟に掴み上げていた手を離し、全力で顔面に拳を叩き込んだ。生々しい鼻の骨が拉げる音が走り、華檻の顔をした人型が廃墟と化した建物を貫き、姿を消す。それを見失うまいと、檻雅は瓦礫となる前に廃墟へと突入し、その影を見つけ出す。倒壊する前に引き摺り出し、頭上へと渾身の力で放り投げ、天井を突き破って人型が宙へ投げ出される。檻雅もそれを追うように瓦礫を突き破って屋外へと脱出し、ようやく足を止めた。

外には、宙に浮かぶ、拉げた華檻の顔をした、《檻破り》の姿が在った。

「くくく……そうよ、檻雅。信じてしまえば、世界なんてあつと言う間に崩壊するわ。疑う事こそ、大事なの」

「黙れ下種が！！二度とその声で喋るな、その喉を引き千切るぞクソツタレ！！」

口汚く罵声を上げる檻雅に、《檻破り》はやれやれと肩を竦め、顔を先程の醜い大蛇染みたモノへと戻す。

「そう、信じるのは己だけでいいのだ、《檻飼い》。それ以外を信じれば何れ馬鹿を見るからな。……価値観や経験での話だ、それが絶対と言ふ訳ではないのだろうがね」

「……華檻を何故知っているのか話せ。信じる信じないは、聞いてからだ」

「ふむ。まずは虚実であろうが事実であろうが脳に刻んでから、という事か。賢明ではないな。何も聞かずに私を葬る事を考えねば。それこそが最良であり最善だ。毒は馴染むと普通にモノが喰えなくなるぞ？」

「毒を喰らわば皿　否、店主までだ。毒であろうが果実であろうが、喰らうまで判るものか。そういう事は喰らった後に考えるべきだ」

「なるほど正論だ。では実の母親を渾身の力で殴ったお返しに真実を教えようか。私は確かに十年前、玖領華檻を殺害した。

これは間違い無い。故の《檻破り》なのだからな」

「……では私の方の事実が間違っている？」檻雅が畳み掛けるように尋ねる。

「貴様が見聞きした事実になど興味は無い。ただ私が認識している事実は、今語った事のみだ。……そうだな、そろそろ幕引きにしようじゃないか。最後に楽しめただろう？　冥土の土産にしては、あまりに旨過ぎた」

灰色の膜が張られたような空を指差すように、人差し指を立てる《檻破り》。その指の先に黒い渦々しい塊が渦巻き始める。その大きさが徐々に拡大し、やがては《檻破り》よりも規模を大きくしていく。

檻雅はそれを睨み上げ、不可視の首枷へと指を走らせた。

「この黒い塊、忌名を《闇陰影》^{ゴート}。効能は私以外の絶滅。……さて、この《闇陰影》は町に半径一キロのクレーターを穿つぞ。貴様も逃げられぬと知って、どう足掻く？　私はな、その足掻く姿にこそ、人の真価が問われると思うのだよ。如何にして絶望と対面するか、それこそが人の全てだ」

ゆっくりと黒い塊　上空へと放たれた闇黒の暗雲に、《檻破り》は満足そうに下界へと視線を走らせる。　圧倒的有利に立つ者

の愉悦がその瞳に禍々しく宿るのが、檻雅には判った。

対する檻雅は怒りに腸を煮え繰り返らせながらも、その眼差しには強い意志が宿っていた。頬筋が不吉な形に歪み、凄絶な表情が滲み出る。

「知っているか、『檻破り』」

全てを知った上で上から物を見るように私達を見下してきたオマエに、最後に報いるにはこれしかない　檻雅が怒りに任せて口を動かす。

「『屠鬼』は、絶大な生命力を持つと言う。凄まじいまでの自己修復能力と、破壊力、そして音速にも達する脚力。それをオマエは知っているか!？」

「……それが何だと言うのかね？　まさか　理性を無くしてまで、『地獄』を蔑ろにしても、私を屠りたいと、世迷言を吐かすつもりではあるまいな？」

嘲るように笑声を降り注ぐ『檻破り』を見て、檻雅は凄絶な笑顔のままその天上人を見上げ続ける。下りてくれば即座に喰い殺さんと言わんばかりに恐ろしい笑顔を浮かべたまま。

「……ふ、その意気や良し。己を殺しても相手を屠る、その生き方を褒めてやろうではないか、　『檻飼』よ。ならばこれが最後の礼だ。私の真名を教えてやろう。　諫昏^{いんこん}。諫昏棕櫚^{しんろう}だ」

「棕櫚、オマエもここで、　くたばれッッ!!」

首枷　『檻』を、全て外しきる。

闇に覆われた世界に高らかに咆哮が突き上がった

「……あの黒いの、一体何だろう……」

「……判らない。『司狂』の攻撃だとしたら、今が好機^{チャンス}なのは違いないと思う。今の内に『歪』を『間術』で修正しよう？　もうすぐ『檻』が解放される筈だから、後は逃げるだけだし。この際『司狂』を『檻破り』にしたとしても、もうそこはわたし達とは無縁の世界だから……」

祥と夢生がいる場所は挾峰の住宅街　その辻だった。二人がいる場所から向かって市街の方に、巨大な暗雲が垂れ込めているのが映ったのである。先程まで粉塵が舞い上がって灰色の薄い膜が張られたように太陽を薄っすらと隠していたが、暗雲のせいで完全に陽光が遮られる形となった。

「……それで、この近くに《歪》が在るのは本当なの？」

住宅地も先刻の大地震の影響であちこちに亀裂が走り、幾つか倒壊しているのが見受けられた。電線が切れ火花が散っている場所や、硝子片が飛び散っている地帯など、危険な場所に違いないのは視覚的にも解る事だった。

祥は辺りに人氣が無いのを訝しく思いながらも夢生に尋ね掛けた。こんな場所に《歪》があるなんて俄かには信じ難かった。

「《歪》って言うのは名の由来どおり、歪んだ場所にこそ発生し易いの。人がいる場所とはかく歪み易い……家の中や、人が屯し易い場所に好んで発生するものなの」

「じゃあこのどこかにあるんだね？」

「……うん、ただね、わたしもずっと探っていたのに、今まで見つからなかったんだ……隠されてるのかも知れないと思ってただけど……何かおかしい……」

「おかしい？　何が？　隠されている、事……？」

ある方角を見つめたまま歩き出す夢生に、釣られて歩を進める祥が発言を促すと、彼女は眉根を寄せたまま訝しげに足を止めた。

とある民家の前だった。

「……さっきまでずっと判らなかったのに、ついさっきここに来た瞬間から急に《歪》が姿を現したみたいに、……場所が判っちゃったの」

「え……？　それ、って……」

「……誘き出されたのかも知れない、って事」

二人が見上げた家は、どこにでもありそうな一軒家だった。

が、地震の影響が電気が全て落ち、深と静まり返った町と同じよう

にただただ沈黙だけをそこに蟠らせている。まるで闇の塊とでも形容すべき雰囲気醸し出していた。

玄関にある石で造られた表札には、
『異世』の文字が連ねられていた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2492z/>

狂獄 The CrazyInferno

2011年12月20日18時48分発行